
永遠のフィレーナ
4
反撃への跳躍
作/首藤剛志
絵/高田明美
AM JuJu

永遠(えいえん)のフィレーナ 4 反撃(はんげき)への跳躍(ちょうやく)

支配者デビス帝国に滅ぼされた、フィロセラの王女フィレーナは男奴隷の闘技士(バトラー)として育てられた。しかし自分の出生の秘密を知り、逃亡奴隷となって帝国内を放浪する。そこで帝国の圧政を目のあたりにしたフィレーナは、ついに帝国の打倒を決意し、帝国のシンボルともいうべき神殿を破壊する。やがて、フィレーナの神殿破壊のうわさは帝国各地で「フィレーナ」を名のる反乱軍を生み出した。（1～3巻）

それから3年後、南部海岸地方の一反乱軍の首領におさまったフィレーナは、いまや盗賊と何ら変わりのない反乱軍の横行に心を痛めていた……。









アニメージュ文庫

永遠のフィレーナ 4

反撃への跳躍

首藤剛志

絵/高田明美

AM JuJu

Pocket Editions of Animage
by Tokuma shoten

主な登場人物



フィレーナ

デビス帝国に滅ぼされた国・フィロセラ王国の王女。男として反乱集団〝狼のフィレーナ〟を率いる。



リラ

フィレーナの名目上の妻。前巻でフィレーナと別れ、ネストと行動をともにしている。



ネスト

元・闘技作家(バトルライター)。現在は地下に潜伏し、反乱地下組織の機関誌『フィエーブ』の発行人である。



バンニル

放浪の天才軍略家。通称〝はぐれ蜘蛛(くも)のバンニル〟。フィレーナに興味を持ち〝狼のフィレーナ〟に加わる。



ラズル

帝国の優秀種のエリート。だが、リラの一撃によって男性機能を失い、すべてを捨てて彼女を追い回す。

口絵・本文中さしえ／高田明美

帝国地図／道原しょう子

目次



プロローグ

それは海を見つめていた。
じっと立ちすくんで、水平線のむこうを見つめていた。
それが、ここに造られてからどれほどの時間が経ったのか、もう知るものは、ほとんどいない。
その光を失った瞳が、かつて海に生きる人々にとって、どれほど、希望への道標になったか、今、それを知る人はほとんどいなくなった。
それは自分すら、何のために造られたのか忘れかけていた。
石で積みあげられたその体は長い間の風雨でひびわれ、今にも崩れ落ちそうだった。
それが、意志のある生き物だったら、とっくに自分の死を悟っているのかもしれなかった。
だが、それは、最初に造られた目的どおり、何かを待って立ち続けていた。
いつか、その光を解き放つ何かの来る日を……。
それの見つめる海が、まだ、昔の青さを残しているのが、わずかな救いだった。
夜空に三つ見える銀色の月が、波に揺れる光のきらめきも昔のままだった。

だが、その海がどす赤く濁り、それの体が風雨に崩れ去るのも、そう遠くなさそうだった。
ざらざらと風化し、こぼれ落ちていく石の体は、死を待つ砂時計のようだった。
それがまだ生きていると認められるとするなら、高い円筒形の塔の先に付けられた、その瞳ともいえる硝子の鏡玉（クリスタルレンズ）が、ときおり太陽や月の光を反射してまばたきする、わずかな瞬間だけだった。
海に生きる民、フィの人々は、昔、それを灯台と呼んだ。
特に、このあたりに、ほんの二十年あまり前まであったといわれるフィロセラという海洋民族の国では、この灯台を、フィホーパー（海の希望）と呼んだ。
ある日のことだった。
灯台の前にたたずんで、灯台と同じように、じっと海を見つめる若者がいた。
汐風（しおかぜ）に長い髪をなびかせた若者は、腰に中型剣（ミドルスオード）を下げ、一頭の犬を連れていた。
その種類は、めったに見られなくなり絶滅したとさえいわれていた狼犬（ウルフドッグ）だった。
若者は、そこが気にいったのか、それからもしばしばやってきた。
そして、いつも沈んだ瞳で、何かを考えこんでいるようだった。
灯台は、残されたわずかな命を、この若者に期待することで費やすことにした。
若者の名は、海洋民族ではありふれた名の一つ、フィレーナといった。
海の魂という意味のこの若者の名が、海に希望をもたらすかどうか、まだ誰にもわからなかった。

フィレーナという名の脱走奴隷（エスケープクレチア）が、首都ボーの神殿を破壊してから三年が経った。
帝国内部で、反帝国を旗印にした反乱活動が、さまざまな形で続いている。
一様にフィレーナの名を叫びながら……。
だが、同志たちよ、聞いてくれ。
このままでいいのだろうか……。
今、われら、反乱情報組織「ラ・グランデ」の知るところ、全国で二百余の反乱組織が、ゲリラ戦を展開している。
組織、集団とはとても呼べぬ、反乱の風潮に便乗した盗賊団（とうぞくだん）、暴力団、暴走族の数は優に千を越えるだろう。
そのほとんどが、フィレーナの名をかたっている。
そして、そのそれぞれが、何の関連もなく帝国への抵抗という名目の破壊をくりかえしている。
そのたびに、帝国軍に制圧され、逃走し、分裂し、さらなる烏合（うごう）の反乱集団が水泡のように誕生する。
そのたびに増えていくのは、反乱同志、帝国人民（エンパイアラー）、その敵味方にかかわらず無言の屍（しかばね）だけである。
このままでは、帝国打倒はとうていおぼつかない。

それはかりか、疲弊するのはわれわれとわれわれの住むこの大地である。
今のままでは、帝国打倒はわれわれらの夢どころか、さらなる地獄を生みだす悪夢になりかねない。
今、名前だけの、自称フィレーナが多すぎるのだ。
身勝手で、独善的で、身のまわりの小さな利益を優先する名ばかりの改革者が、多すぎるのだ。
そして、「われこそは、正当なフィレーナである」……と、たがいに譲らず、他の集団を武力で吸収、合併し、その首魁になろうとしている一派も、少なからずいる。
同志よ、われわれは問う。
「フィレーナとはいったいなんだったのか？」
いま一度、フィレーナの名の持つ意味を考えてほしい。
自由のために帝国を打倒する……その合言葉であるフィレーナの原点を、思いだしてほしい。
もう一度、いおう。今、フィレーナが多すぎる。
それも、似て非なるフィレーナが……。
今いるフィレーナのほとんどは、蘇るべき「海の魂」ではない。
あなたたちそれぞれの「欲望」でしかない。
このままでは、しょせん、帝国の体制にはじきだされた負け犬の、改革ごっこにすぎな

くなる。……それにしては、犠牲（ぎせい）のなんと大きいことか……。
同志の心に「フィレーナ」の正統な意味の蘇らんことを！
「フィレーナ」の名の下に、すべてのしいたげられた人々に平等な自由が実現されんことを！
思いだそう！　われわれの心の「フィレーナ」を！
反乱地下組織「ラ・グランデ」秘密情報誌『フィエーブ』三周年記念巻頭記事より

ネストは文章印字機（ワードプロ）から指を降ろすと、ふっとかぶりをふって、テーブルの酒瓶（さかびん）をあおり飲んだ。
「ドリンクホリック」は、ネストのペンネームだったが、ネストそのものも酒中毒といってよかった。
この短い文章を書き終えるまでに、アルコール度、四十五度の酒を一瓶（ひとびん）飲み乾（ほ）していた。
「飲まなきゃ書けんよ。こんなものは……」
そうつぶやくと、インターホンのボタンを押した。
「リラ、原稿があがった……」
ドアが開き、リラが顔を覗（のぞ）かせ肩をすくめた。
「飲むとさすがに早いわね……しめきりを十時間も過ぎてくれちゃって……」
もうすぐ二十歳のリラは、それでも充分子供っぽい顔をしていた。

「それを間に合わすのが助手の才能だろう」

「助手に責任をおっかぶせるのが、大先生の才能ね」

リラは、文章印字機から記憶盤を取りだすと、暗号翻訳機に入れた。

全国の反乱組織に送るには、それぞれの組織の指定した暗号に翻訳して送らなければならない。

しかも、その暗号は秘密保持のため、毎日変わるのだ。

三年前、フィレーナと別れたリラは、ネストの助手として、もっぱらそんな仕事をしていた。

ネストの書いた文章を読みながら、リラはぽっと溜め息をついた。

「なんか、まわりくどい書き方ね。要するに、みんな仲よく、いがみあわずに、手をつないで帝国と戦いましょうってことでしょう？　酒飲みは、しつこいから嫌いよ。暗号翻訳だって、こんな長いと楽じゃないんですからね。……いっそ、今度から、私が、さっさと代筆してあげようか？」

ネストの答えはない。

ふり返ると、酔い潰れてソファーに倒れている。

リラは立ちあがると、戸棚から毛布をだし、ネストに掛けてやった。

そのとき、ネストが聞きとれない声で、ぶつぶつと寝言をいった。

「ハイ……、いい子。いい子ね。おやすみなさい」

リラはネストの一週間は洗っていない髪を、撫でてやった。

そして、今度は、深呼吸をしてからの、どっと溜め息。
「あ〜あ……、おじさんはいい子だ。ねんねしな……か。フィレーナ、お守りするならさ、わたしゃ、若い子がいいよう……」
フィレーナが、生きているかどうかすら知らないリラだったが、ひとり言では、いつもフィレーナに語りかけていた。

＊

電話回線を細工して各地の反乱組織に送られた『フィエーブ』は、リラの苦労にもかかわらず、そのほとんどが、帝国機密情報部に解読されていた。
だが、帝国上層部は、なんの動きも機密情報部ならびに機密情報兵団、通称……「黒い悪魔」に命じなかった。
さらに、情報部が送った帝国軍への公式報告には、こう書かれてあった。

> 『フィエーブ』は、全国の主要反乱組織に配布されている電話回線による隔月誌（かくげつし）である。
> 発行元の地下組織「ラ・グランデ」は、首都ボーにあると見られるが、現在、その所在地は不明……。

あきらかに帝国上層部は、「ラ・グランデ」を泳がせていた。

第1章

正統なるフィレーナ

白熱光が飛びかう。
硝子剣（グラススオード）のぶつかり合う冴（さ）えた響きが、いたるところで交錯（こうさく）する。
デビス帝国……南部海岸地方。
人里離れた帝国軍駐在所のひとつに、帝国のいう反乱暴徒の一団が、奇襲をかけたのだ。
悲鳴と怒号の嵐（あらし）が吹き荒れ、次々に帝国軍の兵舎に火が放たれていく。
あきらかに奇襲は成功したようだった。
一時間そこらの戦闘の末、駐在する帝国軍兵士のほとんどが消えていた。
そして今……。
屋根の燃え落ちかけた帝国軍の兵舎の前に、血にまみれた硝子剣（グラススオード）をかまえた若者が、立っている。
その少し離れた背後には、見るからに獰猛（どうもう）で精悍（せいかん）な狼犬（ウルフドッグ）が、うずくまっている。
精悍さなら、若者も狼犬（ウルフドッグ）に敗けていない。
いつもは、おだやかなその瞳（ひとみ）が、獲物を狙（ねら）う野獣の眼のようだ。

手に持った「フィレーナ」と呼ばれる硝子剣は、もう、白熱光を放ってはいなかった。
いつもなら、人の心を和ませるといわれる兵器らしさのない独特の青い白熱光を放つはずなのだが、今は光を見せる隙間のないほど、血が、剣の表面にこびりついていた。
今日、いったい何人の血をこの硝子剣が吸ったのか、若者はもう数えるのにうんざりしていた。
そして、さらに今、目の前に、兵舎を背にして三人の帝国軍兵士が、剣をかまえている。
その切っ先は、恐怖に心なしか震えていた。
若者は、三人を一瞥してふっと溜め息をついた。
……この人たちは、ぼくに勝てやしない……。
……この人たちを殺してなんになるっていうんだ……。
若者の獣の目に、かすかなやさしさが蘇った。
二十歳にしては、どこか子供っぽいあどけなさのある表情だった。
若者は硝子剣を、腰の右に吊るした鞘に収めた。
そして、三人に話しかけた。
「もう、よそう。戦いは終わったよ」
帝国軍兵士の三人は顔を見合わせた。
若者は続けた。
「僕は、『狼のフィレーナ』……」

帝国軍兵士の顔が引きつった。
この付近の暴徒たちの中では、帝国駐在軍が最も手を焼いている一団のひとつだったのだ。
三人の兵士は、狼のフィレーナに遭遇してしまった自分たちの不運を呪った。
狼のフィレーナは、気の毒そうに三人を見た。
本気で気の毒だと思っていた。
「判るでしょう？……僕たちはまだ帝国軍に負けたことがない。今日も同じさ。あんたたち、無駄に戦うことないよ……。相手が僕らじゃ、しょうがないさ……。剣を捨てて出ていってくれ。誰にも手は出させないから……ね、無駄に命を捨てるのはよそうよ」
考えてみれば、相手もいちおう剣を持つ男たちなのだ。
狼のフィレーナの台詞は、ずいぶん帝国軍兵士を小ばかにしているように聞こえた。
だが、事実であることも確かだった。
その場にいれば、闘技など何も知らない子供にすらわかっただろう。
目に見えぬ空気……気の迫力としか表現のしようのないもので、狼のフィレーナと、三人の兵士たちの勝負は見て取れた。
まして、狼のフィレーナを守るように背後についてきた狼犬のギャッピーに、それがわからぬはずがない。
三人を警戒する様子もなくのんびり狼のフィレーナを見つめている。
三人の兵士も、勝ち目のない予感があった。

できることなら、剣を捨て、この場から一目散に逃げていきたかった。
しかし、三人は、ぶるぶる震える手で狼のフィレーナに向けた剣を放そうとしない。
「やめようよ……ね」
狼のフィレーナは、落ち着いていた。
その口調は、崖から飛び降りようとする自殺者を、やさしく説得して、やめさせようとしている精神科の医者のようにすら感じ取れた。
だが、自殺しようとしている人間の説得は、精神科の名医でも難しい。
なまじのやさしさよりも、「馬鹿者！　やめんか！」と、怒鳴り、叱りつけるほうが、自殺を思いとどまらせることも多いのだ。
そして……、
狼のフィレーナのやさしさは、裏目にでることが多かった。
そのやさしい声の響きが、三人の帝国軍兵士に、もしかしたら、勝てるかもしれない……という、淡い希望を抱かせたのだ。
三人は、それぞれの顔色をうかがった。
同じ決意の色があった。
彼らのような、末端の帝国軍兵士にとって、剣を捨てて逃げることは、命令なしの退却……、いわゆる敵前逃亡を意味した。
敵前逃亡の罪は、軍法会議の余地もなく、即刻死刑だった。

さらに、彼らの家族には、末代まで、逃亡者の血を引く卑怯家系の汚名がついて回る。
……だが……、それも、自分の命にはかえられない……。
そんな、甘い誘いを、狼のフィレーナのやさしさが消した。
もう一度、彼らは、からからになった喉の奥で祈るようにつぶやいた。
……勝てるかもしれない……。
三人は、目でそれぞれの気持ちを確認した。
そして、動いた。
「ぐえっつ！」
彼らは、悲鳴とも叫びともつかぬ声をあげ、剣を振り上げると、狼のフィレーナにむかって同時に走りだした。
狼のフィレーナは、ぴくりともしなかった。
右手に持った硝子剣の白熱光線が、威力を発揮するには、あまりにたがいの位置が近すぎる。
その条件は、三人の兵士も同じだ。
ここは、剣対剣の飛び道具なしで戦うしかない。
そして、今の状況は、一対三……。
しかも三人の兵士は、右手から、中央から、左手から、狼のフィレーナを包むように襲いかかってくる。

狼のフィレーナの今の位置はあまりに不利だ。
だが、それでも、狼のフィレーナは動かなかった。
ただ、その瞳に、やるせない影が、ふっとよぎった。
右手の兵士が、渾身の力を振り絞って、狼のフィレーナの頭上に剣を振り降ろした。
間髪を入れず左手の兵も、真ん中の兵も、剣を叩きつけた。
狼のフィレーナの小柄な体は、三方からの剣で、たちまちのうちに、幾つかの肉塊に引き裂かれる。
……そのはずだった。少なくとも三人の兵士は、その心づもりだった。
だが、三人の目には入らなかった。
右側の兵士の剣先が、狼のフィレーナの頭上、髪の毛の一本ほどのところに迫ったとき、狼のフィレーナの鞘の中の硝子剣が、右手で抜かれたことを……。
ピキーン……。
硝子と硝子がぶつかる冴えた音がした。
瞬間、炎上する帝国軍兵士宿舎の赤い光が、兵士の顔を浮かび上がらせた。
それは、その男の生きている最後の顔だった。
狼のフィレーナの剣は、頭上の剣を弾き飛ばし、そのまま斜め下へ切り降ろされ兵士の心臓をえぐっていた。
何が起きたのかわけもわからず、左手の兵士が、剣を狼のフィレーナに叩きつけた。

少なくとも狼のフィレーナは、右手に硝子剣（グラスソード）を持っている。

左側は、がらあきのはずだった。

だが、左手の兵士の剣が、狼のフィレーナにかすりもしないうちに、その首は、胴体を離れ空中を飛んでいた。

まだ、意識はしっかりしていて、それでも何が起こったのか……、自分が、首だけになっていることに気づいていなかった。

狼のフィレーナの右手に持っていたはずの硝子剣（グラスソード）が、右側の兵士の心臓を使いものにならなくした後、左手に持ちかえられたのだった。

硝子剣（グラスソード）は、確かに一本だけだった。

だが、その右から左への持ちかえの早さは、二本持っているのと同じに見えた。

真ん中の兵士の剣が、狼のフィレーナの胸元めがけ突っ込んでくる。

……やった！……。

兵士は、一瞬、そう思った。

だが、その耳に、かすかに空気を切る音が聞こえた。

ちらりと、音のした頭上を見たとき、そこに硝子剣（グラスソード）があった。

ぽこん……。

まるで、すいかでも割るような音がして、兵士の頭は、縦にまっぷたつになっていた。

左の兵士の首を飛ばした狼のフィレーナの硝子剣（グラスソード）に、右手が添えられ、上段から真ん中の

兵士の頭を軽く叩いたのだ。

宙を飛んでいた、左手の兵士の首が、地面に落ちた。

信じられない……といった表情で、口をぽかんとあけていた。

狼のフィレーナの両足は、一歩も動いていなかった。

ただ稲妻のように、硝子剣（グラススオード）が、走っただけだった。

狼のフィレーナは、狼犬（ウルフドッグ）のギャッピーのほうをふりかえった。

ギャッピーは、当たり前のことを見たように、平然と起き上がった。

狼のフィレーナは、どうしようもなかったとでもいうように、首をゆっくり振ると、ギャッピーのほうに歩きだした。

そのとたん、狼のフィレーナを取り囲んでいた、いまは息をしていない三人の兵士の体から、血液が、噴水（ふんすい）のように吹き出し始めた。

狼のフィレーナは、ふりかえらなかった。

三人の兵士たちの体は、ぐらりとゆれて崩れ落ちた。

「殺したくないのに……」

狼のフィレーナは、つぶやいた。

いつもの口癖だった。

それは、今、三人の兵士を殺さねばならなかった自分に対する弁解にすらならない口癖なのを、狼のフィレーナは知っていた。

狼のフィレーナ……。この若者こそ三年前、デビス帝国の首都ボーで、神殿を破壊して姿を消したフィレーナ……、帝国中で暴れている数多いフィレーナの中で、唯一、女であり、しかも、フィレーナという名の続出する騒乱のきっかけを作った本人……、

いわば、本当のフィレーナだった。

＊

やがて……、

帝国軍駐在地から悲鳴と怒号の嵐が去った。

帝国軍の兵舎は燃え落ちた。

今日の戦いは終わった。

フィレーナは立ちつくしていた。

……静かだ……。

こんなとき、フィレーナはいつもそう感じる。

だが、戦いのこの静けさは、いつも炎の燃える音と、うめき声とすすり泣きがたちこめている。

けれど、フィレーナはその戦いの切ない効果音を、静けさと感じていいような気が、今はしていた。

今夜、何人の血が流されたのだろう。

「またか……」

フィレーナは地面のいたるところに散らばっている血溜まりをぼんやり見つめ、ぽつりとそうつぶやいただけだった。

呆然とするわけでもなく、うんざりしているわけでもなく、もちろん喜んでいるわけでもないが、少なくとも、目の前に広がる戦いの跡に、慣れのようなものを感じてしまっている自分をうすら寒く思う……、

それが、表情のないつぶやきになって洩れたのだ。

＊

狼犬のギャッピーを連れたフィレーナが、この土地に辿り着いたのは、二年前のことだった。

帝国に滅ぼされたフィレーナの母国、フィロセラがあったと見られる南部海岸地方のそのあたりは、帝国の巨大な軍事試験場になっていた。

それ以来だ。フィレーナの戦いが続いているのは……。

そのころは、帝国の首都ポーの神殿を破壊したフィレーナの噂は、奴隷たちの間にも知れわたっていて、いたるところで奴隷たちの反乱や暴動が湧き起こっていた。

この南部海岸地方も例外ではなかった。

フィレーナはその小さな暴動の一つに紛れ込んだ。

そして、鎮圧にやってきた帝国兵の一団を、たった一人で全滅させた。

優秀な闘技士だったフィレーナにとって、地方の帝国軍兵士が数十人、束になってかかって

も負けるはずがなかった。

反乱を企てた奴隷たちは、目を丸くした。

誰ともなく名前を聞いた。

「フィレーナ……」

フィレーナはきっぱりと答えた。

今は隠す気などない自分の名だ。

そして……、

フィレーナはギャッピーの頭を撫でてから、ふっと笑ってつけくわえた。

「狼の……、僕は狼のフィレーナだ」

奴隷たちはフィレーナの名を聞いて歓声を上げた。

フィレーナの名をかたって、反乱や、暴動や、盗みをする集団は多い。

いたるところ、フィレーナの名は横行している。

どれが本物か、偽物か、それを考えるのさえ億劫になるほど、フィレーナの名は巷にあふれていた。

だから、いまさら、彼らにとってフィレーナが、ボーの神殿を破壊した本人であるかどうかはどうでもいいことだった。

ともかく、彼らの目の前にいるフィレーナは強かった。

強い者についていけば、生き延びる可能性があるに違いない。



「フィレーナをおれたちのリーダーに！」

その暴動の首謀者の一人、スパタが叫んだ。

スパタは、帝国の地方図書館で、属国の書物を整理するために使われている奴隷だった。

さまざまな属国の言葉に詳しく、体力や闘技は強くないが、書物から手に入れた知識で、帝国への反乱をあおりたてている男だった。

……人間は生まれながら自由にして平等である……。

どこで仕入れたのか、スパタが呪文のようにくり返すこの言葉は、奴隷たちの反抗を奮いたたせていた。

その男が、フィレーナを指差し叫んだのだ。

「彼こそ、おれたちが待っていたリーダーだ！」

フィレーナの闘技力を見せつけられた今は、誰も異論はなかった。

フィレーナは、たちまち、その小さな反乱集団の指導者に祭り上げられていた。

フィレーナにとっても、帝国に歯むかうには味方が欲しい。

もちろん、フィレーナは女であることを隠した。

戦いに明け暮れる反乱集団の男たちの中で、フィレーナがたとえ闘技に自信があっても、女を見せて、彼らの飢えた視線を浴びるのは耐えられなかった。

フィレーナは、布のテントにこもって、戦闘の指導や会議などの必要なとき以外は、彼らの前に極力、姿を見せなかった。

たまに、狼犬のギャッピーを連れて、海辺を散歩する姿が見かけられるぐらいだった。

戦いの後、男たちが、たまたま助けだした快楽用女奴隷と、どんちゃん騒ぎで一時の乾きを癒しているときもあった。

そんなときフィレーナは女たちが嫌がっていないことを確かめると、かすかに溜め息をついてその場からいなくなるのだった。

……うちのリーダーは女に興味がないのかな……。

……といって、男同士が好みでもなさそうだしな……。

最初のころ、男たちは首を傾げていた。

……もしかして、あの犬が恋人だったりしてよ……。

……ありうるな。なにせ、狼のフィレーナだからな。犬が相手でもおかしくねえってもんだぜ……。

……待てよ、それにしたって、あの犬は、オス犬だぜ……。

……だからよ、人間同士だって男同士がいいやつがいるんだ。犬と人間だって男同士がいいってのがいてもおかしくねえ……。

……そういやあ、あの犬、おれたちが、なに気なくフィレーナに近づくと、歯あ、剝きやがるもんな……。

そんな下卑た噂で賑わったときもあった。

だが、どんな趣味の持ち主と誤解されようと、リーダーとしてしっかりしていれば、誰も文

句はいえない。

フィレーナの率いる集団は、帝国の鎮圧隊に勝ち続けた。

いつの間にか、その名もない小さな反乱集団は「狼のフィレーナ」というフィレーナのあだ名そのままの名で呼ばれ、この地方の帝国人民に恐れられるようになっていた。

だが集団となれば、維持するために食料がいる。金がいる。

それを調達するためには、しいたげられた奴隷を解放するという名目で、富裕な帝国人民や、帝国軍の施設を攻撃しなければならなかった。

……これでは、盗賊や野党と同じではないか……。

最初は悩みもした。

「帝国打倒への必要悪です」

戦いが終わるたびに、スパタは、フィレーナの動揺を見透かすように平然といい続けた。

……そうなのかもしれない。これは仕方のないことなんだ……。

フィレーナは自分にいい続けてきた。

だが、彼らのゲリラ的な戦いに、すっきりした勝利の快さはない。

彼らのわずかな武力でも攻撃可能な帝国の小さな施設を壊し、帝国打倒の費用の調達という名で金品を略奪し、末端の帝国軍兵士を何人か消したというわずかな自己満足があるだけだ。

いつもは、帝国の制圧部隊からの逃亡と、食料難の飢えの日々が続いている。

そして増えていくのは、怪我人と解放した奴隷たちの群れ。

さらに、狼のフィレーナの名が知れ渡っていくたびに、食い扶持（ぶち）欲しさに集まってくる属国の流れ者たち……。いつの間にか狼のフィレーナは二百人を越す大集団になっていた。

もはや、反乱軍と呼んでいい規模だった。

解放されたときには喜んでいた奴隷（クレチア）たちさえ、飢えのために……、これでは、奴隷（クレチア）でいたほうがましだった……、口には出さないが、そんな不満が表情に出かかっていた。

しかし、個人の力では、なにもできない奴隷（クレチア）たちだ。

集団から離れ、もし帝国軍に捕えられれば、脱走奴隷（クレチア）として有無をいわさずその場で処刑されるだろう。

行き場のない、どうしようもないいらだちは、やがて、帝国への攻撃へ残忍な形になってでてくる。

すでに降伏の意志をはっきり見せた帝国人民（エンパイアラー）を、激情にまかせて殺害する。……無抵抗の婦女子への暴行……、無意味な破壊をくり返し……、金品の略奪には見境（みさかい）がない……。

戦いにどんなに正当な目的があったにしろ、古今東西の戦場と名のつくところでは、どこでも見られる狂気が、狼のフィレーナに吹き荒れ始めていた。

これでは、文字どおり、暴徒にすぎない。

フィレーナは、それを見て見ぬふりをしてはいられなかった。

フィレーナは一同を集め、意見を聞いた。

「無為な殺戮（さつりく）、暴行、略奪を禁じる掟（おきて）を作るべきです！」

スパタは、立ち上がり熱っぽくいった。
「われわれの戦いは正義の戦いです。正義に不純な行為は許されません」
スパタは続けた。
「今、われわれには崇高なる鉄の掟こそ必要です。掟を守ることがわれわれの団結をより一層深めるのです」
スパタは口から泡を飛ばし、こぶしを握りしめて喋り続けた。
同じ意味のことを表現を変え、何度もくり返す。
「われわれは、帝国支配下の悪しき世を改革する清冽な志士でなければなりません！」
くどい気もしたが、その口調は説得力があった。
一同は酔ったようにうなずいている。
フィレーナは、スパタを呆気にとられて見つめるだけだった。
明らかに、皆の気持ちは、動かされていた。
喋ることが、これほど力を持っているのを見るのは初めてだった。
強い犬はあまり吠えない。
闘技士も同じだ。喚きながら戦うやつほど、案外、実力がないものだ。
けれど、普通の人間の場合は、喚けば喚くほど、強いやつもいるらしい。
フィレーナはスパタの演説を……、まことにごもっとも……、とは思うけれど……、それはそれでいいのだけれど……、やっぱり、口先だけで、人が動かされるのは、何となくすっきり

しない気持ちだった。

やがて、一同の結論が出た。

狼のフィレーナの戦闘目的に反する残虐行為を犯した者は粛清する。

……しゅくせい？……。

フィレーナの聞き慣れない言葉だった。

だが、意味は知っているつもりだった。

「……粛正か……厳しく取りしまって、よくないことを正しく直すことだね」

昔、闘技指導員のゼナから教わった、政治によく使う言葉のはずだった。

「その粛正ではありません。政治は政治でも革命に使う粛清です」

「かくめい？」

「そうです。革命です」

スパタは、何も知らないんだな……、とでもいいたげに、ひやりと笑った。

「この世界が、帝国の支配下になる前には、あちこちの国で流行った言葉です。世直しとでもいいますかな……、革命での粛清は、厳しく不正、不純を取り除くことです」

「取り除く？……」

フィレーナは眉をしかめた。

「奴隷に通用する言葉だと、取り除くっていうのは処分すること……、要するに殺すってことかい？」

「殺しではない。粛清です。処刑です」
フィレーナはスパタを見すえた。
「言葉の遊びはもういいよ。どんな理由でも仲間は殺せない」
「秩序を守るためには、厳しさが必要です」
スパタは見返して答える。
「僕には難しいことはわからない。けれど、何のためであれ、同じ奴隷（クレチア）だった仲間の命を奪うのは、帝国のやり方と同じような気がするんだ」
フィレーナはこの話に関してだけは、スパタにゆずらなかった。
「僕は嫌だ。どんなことがあっても奴隷（クレチア）だけは殺したくない。奴隷（クレチア）だけは敵と思いたくない。帝国のために惨（みじ）めな目にあっている奴隷（クレチア）を殺して、どうして帝国打倒なんて偉そうなことをいえるんだい？……もし、そうまでしなければ、狼のフィレーナの秩序が守れないとしたら、僕はここにはいたくない。僕はここから出ていく」
一同は顔を見合わせた。
今、戦闘能力と戦闘指揮（しき）力のあるフィレーナに出ていかれたら狼のフィレーナは、この先、どう帝国軍と戦っていいのか、途方にくれてしまうことも確かだ。
「これでは、会議とは呼べんね。強い人の意見が、通ってしまうのではね……」
スパタがつぶやいた。
フィレーナは、自分の言っている台詞に、いささか興奮（こうふん）しながら続けた。

「それとも、こんな僕を、みんなは粛清するかい？　もしも、みんなのひとりひとりが、僕だとしたら、黙って粛清されてもいいのかい？」

いつの間にかフィレーナの手は剣を握っていた。

一同に動揺が広がった。

……そういわれればそうだ……。

粛清を認めれば、自分たちだっていつ過ちを犯して粛清されるはめになるかわからない。

スパタの演説で盛り上がった気分は、たちまちしぼんでしまった。

結局、掟を破った者は、追放処分にすることに決まった。

スパタは、追放処分は、帝国軍に狼のフィレーナの居場所と戦力が洩れる危険があるとして、死刑を主張しかけたが、みんなの意見がフィレーナに傾きかけているのを肌(はだ)で感じると卑屈に笑って、追放処分に賛成した。

もっとも追放処分は、仮に、帝国軍に捕まったときを思えば、死も同然の処分だった。

帝国軍は、反乱奴隷(クレチア)は見せしめのため、拷問(ごうもん)の末に処刑するだろう。

フィレーナは溜め息をつきながらも、思い直してみる。

……それでも追放の処分なら、どこかで生き延びられる可能性もある……。

本当はもっと処分を軽くしたいが、これ以上、自分の我を通すのは、それこそ狼のフィレーナという集団の秩序を乱しかねないと思い、諦(あきら)めたのだった。

そんなフィレーナを横目で見ながら、スパタはつぶやいた。

「甘いな……、こいつは、指導者には向かない……。頼りになるのは、戦闘のときだけのようだ……」

スパタは、そのときからフィレーナを見限り、次の指導者になる人物をそれとなく探すことにした。

スパタは、弁舌以外の自分の非力を自覚していた。

強い者の陰で、策を弄し甘い汁を吸うのが性にあっていた。

そして、不都合が起きたときには、責任を指導者一人に被せ、逃げおおす処世術を心得ているつもりだった。

*

掟ができてから、確かに狼のフィレーナの戦いに、無意味な残虐行為は減った。

だがそれでも、追放処分を受ける者は少ないとはいえなかった。

戦いの極限状態は、人間を悪魔に変える。

そのときの狂暴な衝動を、おさえるのは難しい。

闘技士だったフィレーナにはそれがよくわかっていた。

自分が経験したこともある感覚だけに切なかった。

……殺せ！　やっつけろ！……。

死にもの狂いの戦いの中では、胸の奥からつきあげる声は、それしか聞こえないのだ。

戦いに人間らしさを求めること自体が無理なのだ。

狼のフィレーナの人員はどんどん増えていった。
非戦闘員の女子供たちも少なくない。
反乱軍というより、戦いながら移動する一部族と、呼んでも恥ずかしくない規模になっていた。
人が多くなればなるほど、人の心の掌握は難しくなる。
烏合の衆ではなく、せめて反乱軍と呼べるほどの集団にしておくには、やはり規律を正しく掟を守らさなければならない。
だが、ひとたび戦いが始まると、その狂乱状態にいる人間に、掟を守らせるのは不可能に近いのだ。
殺戮、暴行、略奪をするな……。
口では簡単だが、それを守れば自分が殺されかねない。
それを知りながら、掟を守れというのは、あまりに矛盾している。
実戦の体験のない人間なら、戦いに勝て！　だが人道に反することはするな！　と、奇麗ごとを並べるのは簡単だろう。
……しかし……、しかし……、　しかし……、　僕は……。
悩み続けている暇はなかった。
戦いを続けなくては、とりあえずの食料すら尽きてしまう。
そして、月日が経ち、今も相変わらず戦っている。

この二年間、味方が何人死んで、何人の敵を殺したか、もう、はっきり思い出せない。
……今日の死者の数だって、いつまで覚えていることか……。
「またか……」
フィレーナはもう一度、その口癖をつぶやいた。
……また、いっぱい死んじゃったな……。
そういっているつもりだった。
スパタが、いつものとおり、計算機のボタンを叩きながらフィレーナの傍(そば)に来た。
「今夜の損失(そんしつ)、二十二名……。内、足手まといの自決が七名……」
スパタは、あたり前のような口調で報告する。
「自決が七人？」
フィレーナは、ふっと夜空を見上げる。
「ええ、いつもより、激しかったですからな。今夜の戦闘は……」
スパタはそういってから、思いついたようにつけ加えた。
「あ、帝国軍は、三人の死体を確認しました。しかし、残留している手足は五十本を越えますから、白熱光線(ホワイトレイ)で蒸発(じょうはつ)した敵は、少なくとも二十五人はいるはずですな……。ま、数では、うちの勝ちですな」
「自決が多すぎるね？……」
スパタはちらっとフィレーナを横目で窺(うかが)ってから……、

「最近は、われわれの中にも戦士としての自覚が確立してきたんですな」

「自覚の確立?……」

フィレーナは、スパタの持って回ったいい方にうんざりしていた。

「ええ……」

スパタは平然と答える。

「怪我をした連中は、足手まといになる。といって、ここに放っておかれて帝国軍に捕まれば、わが軍の位置を洩らすかもしれない。本人がいくら意志が強くても、帝国の自白剤には勝てませんからな。あげくのはてに激しい拷問の末、処刑……。死体は白熱光線（ホワイトレイ）で蒸発処理。骨のかけらも残らない。それに比べたら、ここでさっさと自決して、仲間に埋葬されたほうがましってものです。……少なくとも今までの奴隷（クレチア）のころだったら、死ねばゴミ処理されていた体が、ここでは墓の下に埋められるんですからね」

「体が埋められようが、蒸発しようが、死んだら同じさ……」

フィレーナは、ぽつりとつぶやいた。

「奴隷（クレチア）に墓があるだけでも、革命的なことと評価すべきでしょう」

フィレーナは肩をすくめた。

「元気なんですね。スパタさんは……」

フィレーナの皮肉など、気にもならない様子でスパタは続けた。

「それから、また、出てくれましたよ」

「出たの……」

何が出たのか、いわなくてもわかっていた。

掟破りだ。

スパタはうなずいた。

「二人です」

フィレーナの前に、後ろ手に縛られた二人の若い男が、引き出されてきた。

「帝国軍の薬物庫で覚醒剤を略奪飲用、奇襲の際、敵指揮官の寝室に乱入、たまたま、二人の快楽用奴隷と行為中の敵指揮官を殺害、さらに快楽用奴隷に暴行……。暴行発覚を恐れ、快楽用奴隷の二人とも殺害した」

スパタが、手短に報告用電子手帳を読んだ。

覚醒剤やアルコールの濫用が巻き起こす、よくあるケースだった。

うんざりしながら、フィレーナは聞いた。

「なにも殺さなくても……、だって、快楽用の女の人だったんだろう？　その人たちだってわかっているはずだ。話し合えば……」

……何を話し合えばっていうんだ……。

フィレーナは自分のいっていることに自己嫌悪していた。

スパタが、真面目な顔でいった。

「合意で行為できた……、そういいたいのでしょう？」

フィレーナは、答えずにうつむいた。
スパタは、おかまいなしに続けた。
「普通ならそうでしょう……。しかし、今回の快楽用奴隷(クレチア)は、女ではなかった」
「えっ？……」
「男でした」
フィレーナは、突然、吐(は)き気に襲われた。
「快楽用奴隷(クレチア)は思ったのでしょう。帝国人民(エンパイアラー)相手なら、奴隷(クレチア)として我慢できる。しかし、同じ奴隷(クレチア)相手に犯されるのは御免だと……。その快楽用奴隷(クレチア)は誇りだけは男を忘れなかった。そして抵抗した。で、殺された」
「追放を……」
ぼそりとフィレーナはいった。
「いつもどおりに追放処分だ」
もうこれ以上、何も聞きたくなかった。
……こういうのを、風紀の乱れっていうんですか？……。
……ここには、乱れていく風紀ってもの、そのものがあるんですか？……。
「困ったもんだよな……」
ひとごとのようにしかいえないつぶやきがフィレーナの口から洩れた。
……何だか、やたら疲れてしまって、その疲れにも慣れてしまって、ただぼんやり、つった

っている無力なけだるさがいっぱいだった。
そのとき、引きだされてきた男の一人が喚いた。
「助けてくだせえ！　おれはここから出ていったら、生きていけねえ……」
覚醒剤に冒された脳が、少しは回復したらしい。
もう一人は、ぼんやりと夜空を見上げ、まだ視点が定まっていない。
フィレーナは、二人に目もくれずいった。
「仕方ないさ。生きていくようがんばるんだね」
「お願いだ！　置いてくだせえ！」
男は、涙で顔をぐちゃぐちゃにしながら、フィレーナにすがりついた。
フィレーナは、振り払うよりなかった。
情けを見せれば、周りでこれを見ている皆に動揺が起きる。
「これは、掟だよ」
男はうらめしそうにフィレーナを見上げた。
「どうしてもだめなんですね」
男はふらふらと立ち上がり顔を歪めて叫んだ。
「おれはいってやる。これから出合うやつみんなに、狼のフィレーナってやつは、鬼みたいなやつだってな」
フィレーナは何にも答えなかった。

代わりにスパタが冷たくいった。
「おまえが生きていけるかな……？」
男の顔は硬直した。
縛られていた金属縄を解かれている間、ただ、ぶるぶると体を震わせているだけだ。
「さあ行くがいい。おまえの生きていられるところへな」
スパタがそう言ったとたんだった。
男は、かたわらにいた反乱兵の剣を抜きとった。
身構える一同をうつろに見回すと……、
「ぎゃ～っ」
絶叫して自分の胸に、剣を突き立てた。
胸から吹き出した血の一滴が、フィレーナの頬に飛んだ。
男の体は、ひくつきながら、しかし、すぐに動かなくなった。
「生きる望みがないと判断したわけですな」
スパタは、フィレーナの頬の血を拭くためのティシュを、肩に掛けたポシェットから出しながらいった。
フィレーナは、それを無視して、手の甲で血を拭った。
スパタは肩をすくめ、いき場のなくなったティシュで自分の鼻をかんだ。
「これも自決ということにしておきましょうか」

フィレーナは何もいえず、唇を噛みしめるだけだった。

＊

夜の森の中を、男が、歩いていく。
狼のフィレーナから追放処分されたもう一人の男だ。
先刻の薬に酔い惚けた様子はなく、しっかりした足取りだ。
あたりに人の気配はない。
この森の中なら、帝国軍に見つかることもあるまい。
だが、森の中に隠れ続けているわけにもいかない。
奴隷だった彼は、誰かに飼われて生きるのには慣れていたが、自分で食物を探す方法は知らなかった。
このままでは、いずれ飢え死にしてしまうだろう。
……どこへ行けばいいんだ……。
男は途方に暮れた。
しかし、その必要はなかった。
いきなり、木々の間から光が飛んできた。
それが白熱光線だとわかる前に、男の頭部は蒸発していた。
胴体だけになった男を、茂みの中から現れた数人の男が取り囲んだ。
「処刑にすれば、こんな手間ははぶけるのに……」

男たちの一人はスパタだった。

狼のフィレーナから追放された者は、誰も生きていなかった。

彼らが帝国に捕まり、狼のフィレーナの情報が漏（も）れることを恐れたスパタが、フィレーナを無視して、勝手に処分していたのだ。

男たちは、首のない死体に硝子剣（グラスソード）の白熱光線（ホワイトレイ）を浴びせかけた。

死体は跡形もなく消えた。

手当しようのない重傷者を、自決と見せかけて殺すよりは楽な仕事だった。

なにしろ、墓を作る手間がいらない。

「いいな……、これは、われわれ狼のフィレーナ全体をまもるため、やむをえない処置なのだ」

スパタは、男たちに念を押していった。

「戦闘は、あの甘ちゃんの餓鬼（がき）にまかせていい……。だが、本当に狼のフィレーナを動かしているのは……」

……私でなければならない……。

そういいかけて、スパタは一人、ほくそ笑んだ。

*

フィレーナは海を見ていた。

浪（なみ）が岩を噛む。

風が強い。
いつもなら、灯台から見渡すこの海は、フィレーナの心をなごませるはずだった。
だが、最近は浪が冷たい。
風が寒い。
汐が肌を刺す。
まだ冬は遠いというのに……、何もかも枯れ果てたようなこの気分はどうしたんだ。
狼のフィレーナの仲間は増える一方なのに、なぜ、こうも自分一人を感じてしまうんだろう。
頬を、風に飛ばされた浪のしぶきが伝わり落ちていく。
狼犬のギャッピーが、そんなフィレーナの顔をじっと見上げている。
ギャッピーは彼なりに、フィレーナを気づかっていた。
「ありがとう……、ギャッピー」
フィレーナは、ギャッピーの顎の下を優しく撫でた。
「君と話ができたらいいのにね……」
そして、つぶやいた。
「あの娘ほどうるさいと、困っちゃうけどね」
あの娘……、リラのことに決まっていた。
……ここにリラがいたら……。



フィレーナは、浪の遠くにリラを見つめ、静かに溜め息をついた。

第2章

享楽地の夜

その地区は、毎夜が謝肉祭だった。
帝国の首都ボー……、ブギーガナ地区。
どぎつい硝子着色光が激しく猥乱な踊りを舞っている。
昼間の、くすぶったような通りの様子が嘘のようだ。
激しい音拍のくり返しが、街の人々の脳髄を洗脳するように、街頭拡声器から垂れ流しにされている。
街行く人々は、リズムに乗って揺れ、漂っている。
音楽と呼ぶには、ほとんど旋律調のない音だ。
打楽音だけと呼んでもいい音のうねりだ。
ここでは、深夜を過ぎるころともなるとほとんどの人々が、酒か薬で酔っている。
もっとも、昼間ここにいる人間は、それこそ酔いつぶれて路上に倒れている中毒者しかいない。
夜も昼も、酔った人間の吐瀉物の饐えた匂いの消えない街だ。

ここブギーガナ地区は、帝国の首都ボーの浮浪者（ふろうしゃ）の街、メガデラシーナ地区に隣接した、大享楽街（きょうらくがい）だった。

最近、この地区に数えきれないほどある舞踏場（ディスコ）で、噂（うわさ）の舞踏場女王（ディスコクイーン）がいた。

その女は、いつも狐（きつね）の仮面を被っていた。

仮面を被ること自体はそれほど珍しくはなかった。

もともとブギーガナ地区は、いかがわしさでは、ボーで一、二を争う歓楽街だ。

身持ちのいい娘が出歩く場所ではない。

だが建て前と現実が違うのは、いつの時代の娘たちも同じなのかもしれない……。好奇心と文字どおりの謝肉を求めて、帝国人民（エンパイアラー）のさまざまな層の若者たちが一夜の快楽のため、この地区へやってきていた。

しかし、一部の帝国人民（エンパイアラー）は身元が知れては困る。

それは、上層階級の帝国人民（エンパイアラー）だ。

帝国の発展を担う上層階級の帝国人民（エンパイアラー）は、中層、下層階級の帝国人民（エンパイアラー）、および他なる人類の属国人、ならびに奴隷（クレチア）階級の道徳的な模範にならなければならない……といちおう、帝国憲法に記されているからだ。

もともと奇麗（きれい）ごとを並べた憲法など、通常慣例法と比べて、無視されるためにあるようなものだが、やはり、憲法違反とはっきり知れれば、なにかと後が面倒だ。

そこで、顔を仮面で隠し、人目を避けるのが流行りだした。

三日月の晩に仮面をつけて、憑かれたように踊りだす神女団の女たちを真似たのだ。
神女団の仮面は、神の名において犯すことは許されなかった。
そしていつしか、この地区では仮面が普段着になっていた。
名前もほとんどの人々が、偽名だった。
本名を使ったとしても誰も信じなかったし、信じる必要もなかった。
一夜の触れ合いに、名前など何の意味も持たない。
だから、この街をさまよう女たちは、素性がはっきりしていない。
街娼に身を持ち崩したものもいるが、良家の子女が、遊んでいる場合も多い。
だいいち、この街では、行為に金を要求する女はほとんどいない。
それは、あくまで、遊びのための行為なのだ。
他の街で、娼婦をしている女も、この町には金銭抜きの快楽を求めてやってくる。
仮面をつけているかぎり、ここでの価値は、身分でも金でも、仮面に隠された顔の美醜ですらない。
一目でわかる身体……、それだけが、男女を問わず決め手になる。
その意味では、帝国人民の世界で、階級差を云々されない珍しい地区だといえた。
仮面を取らなければ、わざわざ告白でもしないかぎり、一夜を過ごした相手に自分の身元がわかるはずもなかった。
そして、その舞踏場女王の素顔も本名も、誰も知らなかった。

いつの夜、どこの舞踏場に現れるかすら、わからなかった。
ただ、気まぐれに深夜近くになると現れ、一時間ほど踊りまくると、いつの間にか消えてしまう。
……今いた、狐の女の子はどこへいった？……。
娘の弾けるような踊りに舌なめずりしていた男たちは、いなくなったことに気づくと、まるで本物の狐に騙されたように首をひねるのだった。
その消えぎわのあざやかさに、酒や薬に酔った男たちはとてもついていけない。
いつの間にか、狐の仮面を被った舞姫は、遊び人たちの間で、評判になった。
いわく、
……誰が、ベッドのうえであの娘の仮面を剝ぐことができるか？……。
それも、娘が自発的に仮面を取らなければならない。
もし、仮に、誰かが、身元の知れぬ狐の舞姫に乱暴し、無理やり仮面を剝いだとしよう。
いきなり階級差の厳しい帝国人民の世界の掟が顔を現す。
狐の舞姫が、下層階級の娘ならともかく、強引に仮面を剝いで、それが、上層階級の娘……、それも帝国支配階級の娘だった場合、訴えられれば、人民権を奪われ、浮き草階級か、下手をすれば、奴隷の身におとされかねない。
たとえ酔ったうえでのことといっても、日常、酒や薬で酔うことが常識化した帝国人民の間では、弁解にならない。

酔っていてこそまともな帝国人民(エンパイアラー)だ……、という言葉もあるくらいだ。
酔ったうえでの不祥事(ふしょうじ)などあってはならないことなのだ。
だから気安く仮面の女には手をだせない。
けれど、その危険を犯してでも狐の仮面の女に接近したいと思う者もいた。
それほど、狐の女の踊りは魅惑的(みわくてき)な動きに見えたのだ。
……誰が、狐の女を落とせるか？……。
その筋の魅力に自信のある男たちは、狐の舞姫を探し歩いた。
そして今夜も……。
舞踏場「笑い茸(たけ)の檻(おり)」の片隅のテーブルに、酔いにかすんだ眼で、狐の仮面をつけて踊る女たちを物色している六人の若い男がいた。
女たち……、そう……、狐の仮面を被った女は多かった。
とくに、狐の舞姫が男たちの話題の中心になってからというもの、われもわれもと、便乗して狐の仮面をつける女が増えた。
ブギーガナ地区では今や、狐でなければ女にあらずというぐらい、石を投げれば狐に当たるというほどの大流行だった。
狐は、猫(ねこ)や犬のように種類による顔の形に差がない。
みんな似たような仮面だ。
「こん中にいるのかよう……、本命さんがよう……」

六人のひとりが、酩酊した頭をぐらぐら揺らしながらいった。
男たちの体は、酒をあふれんばかりに飲み込んでいた。
ただでさえ多い狐の仮面が、男の目には二重三重に見え、収拾がつかない。
「ちぇっ、ややこしいことになったぜ」
男は、吐き捨てるようにそういうと、ついでに、胃の中の物を吹き出し、口を押さえて、椅子からずり落ちた。
「ひとり、落っこち」
男を助け起こすそぶりも見せずに右隣に座っていた男がつぶやいた。
硝子の首飾りをつけ、筋骨隆々とした上半身の素肌を合成皮のジャンパーで覆っている。
だが、その体は、これ見よがしで、おそらくボディビルで作った体に違いない。
それでも、この猥雑で病的な人間しかいないように思える舞踏場には、珍しく日に焼けて浅黒く健康的には見える男だった。
しかし、酒と薬物に酔い、どんより濁り血走った目だけは、他の男たちと変わらない。
「ラズル……」
左隣の男が、グラスを持って立ち上がった。
「ん？」
首飾りの男が答えた。
ラズルは、この男の名前らしい。

グラスの男は、酒をあおり飲むと、
「おれも降りなきゃならなそう……」
最後までいいおわらぬうちに、テーブルに突っ伏した。
ラズルと呼ばれた男は、肩をすくめテーブルに向かい合った三人の男たちに言った。
「これで、今夜の賭け（か）の勝率は四分の一だな」
「それはどうかな？」
酩酊した三人の一人が、もつれる口で答える。
「こんなに狐が多くちゃ、本命がいるかどうかもわからんぜ」
「そうさ、今日の博打は流れだな」
もう一人がうなずく。
「そうとは限らんさ」
ラズルは、踊り狂う女たちから目を離さずにいった。
「やれやれ……。税務局一の運動人（スポーツマン）さんは、これだけ飲んでもまだ、精力が残っていると見えるな」
もう一人が、だるそうな声でいった。
「勤めを間違えたんじゃないの。税務局じゃなく性務局なんてな」
からかう男に、ラズルは、にやりと笑って……、
「この賭けに勝ったら、そのうちそんな役所を作ってやるよ。その初代局長は、おまえがやる

かい？」

「いいねえ……。けど、本気で勝つ気か？」

「競争相手は、おれたちだけじゃない……。税務局に三十人はいるんだぞ……」

そう、男たちは、賭けをしていたのだ。

半年以内に、狐の舞姫を見つけだし、ものにすること……。

「何人と競争しようとおれの体に泣かない女はいないさ……」

ラズルは、自分にいい聞かせるようにうなずいた。

……きさまらに敗けてたまるか……。

その言葉が、酔ったラズルの頭を駆け回っていた。

賭けの代償は大きかった。

首都税務長官への最短コースといわれる税務係長補佐の座がかかっていたのだ。

彼らは帝国人民（エンパイアラー）の中でもナンバーワンクラスのＣ型優秀胎芽種（シード）だ。

帝国人民（エンパイアラー）は、生まれる前の胎児（たいじ）の時点で胎芽種判定局（シードジャッジメント）の審査を受け、等級づけされる。

奇跡的な確率で生まれる最優秀、数の少ない優秀、かなり多い秀種、圧倒的な数の良種と普通種、などに分かれ……、さすがに、劣等種とか粗悪種などという呼び名はないものの、胎児の時点で、帝国内の階級が判別され、それにあった胎教（たいきょう）をほどこされて誕生してくる。

どんな胎教を受けても、育った環境によっては、落ちこぼれる者や、予想される将来の進路を変える者も出てくるが、おおむね胎芽種判定局（シードジャッジメント）の審査どおりの職につく。

当然の話だが、優秀種は優秀種同士で結婚したがる。
生まれてくる子供も優秀種の場合が多いからだ。
さらに、強制はしないものの、帝国は、同一種の結婚を奨励していた。
同一種の結婚を帝国権力で強制しないのは、圧倒的に多い下層等級種の感情を刺激しないためと、まれに、突然変異的な別種の胎芽種が生まれることがあるからだった。
もっとも、実際の話、良種と良種の結婚で優秀種が誕生することはまずないし、優秀種が秀種やそれ以外の下等種と結婚すれば、優秀種が生まれる確率は低くなる。
結局、同一種同士の結婚が常識になり、よほどのことがないかぎり、他種との結婚は見られなかった。
それに、優秀種と優秀種の結婚には期待もあった。
優秀種と優秀種の中から、突然変異のように最優秀胎芽種が生まれる可能性があったのだ。
だが最優秀胎芽種と判定される者は、生まれてくる子供の百万分の一もなく、仮に生まれたとしても、帝国指導者の候補として、すぐに親元から離され、デビス帝国指導教育神殿で英才教育を受けさせられるのだ。
教育の内容は、帝国機密で一般は誰も知ることができない。
親兄弟との縁も、誕生したときから切らされている。
おたがいに、名前すら知らされない。
母親の胎内(たいない)から出た瞬間から赤の他人にさせられるのだ。

もっとも、文句をつける者もいない。
帝国から莫大な報奨金が出るのだ。
最優秀胎芽種は、誕生の日以後は人前に姿を現さない。
両親にすら生きているのか、死んでいるのかわからない。
ただ、成人した彼らが決定したのであろう帝国指導者令が、ときおり、軍部や、政財界、科学医学界、さらにデビスの神を司る神殿の中枢機関に発せられるだけなのだ。
もちろん帝国機密情報兵団「黒い悪魔」の最上層部も、帝国指導者の直轄で動いている。
だが、それでも、帝国機密を守る役目の彼らすら、帝国指導者に直接会ったことはない。
ようするに、帝国の第一等階級、最優秀胎芽種の動きは、帝国の中でまるで見えない部分なのだ。
そして、「笑い茸の檻」で、踊っている狐の仮面を見つめているラズルたちは、第二等階級の優秀種、それも行政関係に向いているC型の男たちだった。
ちなみに、A型は軍事関係、B型は神殿関係、D型は報道管理関係、E型は科学関係、F型は生産管理関係……というようにJ型まで十五種類に細かく分けられている。
帝国では、これを優秀種十五枝職能分類基準と呼んだ。
さらに優秀種でありながらどんな職に向くか不明なX型というのもあった。
軍人の家系に生まれながら闘技作家の道を選んだネストなどは、さだめし、X型の典型といえるだろう。

職能分類基準は他の等級の種にもあり、最下層種の普通種など百五十の職能分類がある。
もっとも普通種で圧倒的に多い職能は軍事……、いわゆる軍曹（ぐんそう）止まりの並の兵隊である。
職能分類のないのは、最優秀種だけだ。
だが、姿を見せない最優秀種は一般の帝国人民（エンパイアラー）には直接の関わりはない。
だから現代帝国社会において、外見上では最高の精選階級が優秀種といえた。
「笑い茸の檻」で、狐の舞姫を探している税務局員のラズルたちは、当然、自分が優秀種だという自負がある。
しかし、いくら優秀種とはいえ、働いているのは帝国の首都ボーの税務局だ。
行政関係でも一流の役所だ。
同期の優秀種は少なくなかった。
だが、税務局長の椅子は一つしかない。
誰かがその椅子に座り、他は諦（あきら）めなければならない。
さして実力差のない連中が、一つの椅子を争うのだ。
そこにはさまざまなかけひきがある。
ラズルとその仲間たちはまだ入局して三年、金も権力もない。
昔はあったといわれる行政界のコネによる出世も、帝国指導者令によって禁止され、今は通用しない。
税務局長になるためには、これから二十年以上、ぎすぎすしたかけひきに走り回らなければ

ならない。
これはかなりくたびれる。
もし、税務局長になれないのだったら、若いうちに諦めて、自分の人生を楽しんだほうがいい。
どうせ、給料は勤続年数で決まる。
局長もそうでない者も、給料はたいして変わらないのだ。
おまけに、局長の重職の忙しさで病気になり、心筋梗塞のため、現職のまま死んだ税務局長も歴代で少なくない。
行政という名の戦場でのいわば名誉の戦死である。
葬儀は、首都ボーの主催だけに、目を見張る盛大さだが……。
……死んじまっちゃおしまいじゃないか……。
そう思うのが、今の若者の風潮だった。
そこで、競争者同士が若いうちからかけひきをしてしまう。
誰が局長の座を狙うか決めてしまうのだ。
他の者は、局長を今から諦め、競争を辞退する。
それを決めるのは、どんな物でもよかった。
たまたま、ラズルたちの場合、誰が、狐の舞姫をものにするかの賭けだったのだ。
……だが、どんな賭けだろうとおれは、敗けるわけにはいかん……。おれは、おれは、おれ

は……。

ラズルの頭の中を、酒や薬に酔うと必ず駆け回る思いがあった。

……おれは、普通の優秀種とは違うんだ……。あと偏差値が、四ポイント高ければこの世界を支配する最優秀種になれたかもしれなかったんだ……。

確かに母親の体内にいるときに受けた試験で、ラズルは、最優秀胎芽種と認められるのに四ポイント足りなかった。

その四ポイントがどういうものであるかは、帝国機密で知るはずもなかったが、試験官が思わず洩らしたつぶやき……、

「惜しいなあ……。あと、四ポイントあればなあ」

それを、ラズルの母は、聞き漏らさなかった。

そして、口癖にしてぼやくのだった。

「あと、四ポイントあれば、最優秀を生んだ女になれたのに……」

あと四ポイントあれば……、母のその言葉は、赤ん坊のころからラズルの頭の中にしっかりと刻み込まれてしまっていた。

わずか四ポイント。

しかし、それは、最優秀と優秀を分ける越えられない壁だった。

努力や練習で変えることのできぬ質の問題だった。

どんなに最優秀に近くとも、しょせん、質の違うただの優秀種でしかなかった。

あまりに差のある四ポイントだった。

……おれは、最優秀種ではない……。けれど、同じ優秀種の中では敗けるはずのない、いや、敗けてはならないんだ……。

ラズルは、そんな気持ちを持ち続けて生きてきた。

そうでも思わなければ、自分がやるせなさすぎた。

行政関係向きのC型優秀種と選定されたにもかかわらず、毎日のランニングやボディビルを欠かさなかった。

体力で、他の優秀種に敗けたくなかったからだ。

そして、女に対してだって、他の男に敗けたことはないつもりだ。

ラズルは女をものにするときは、いつも三角関係だった。

いつもライバルがいた。

そんな関係から、女を奪い取るのが癖にすらなっていた。

ライバルになる男のいない女は、好きという感情すら起こらなかった。

そして今、税務局の同期、三十人をライバルにして、狐の舞姫を探している。

敗けるわけにはいかなかった。

ラズルは、踊る狐の仮面の女たちを食い入るように見続けた。

テーブルの上には、ラズルの飲み乾したグラスの数が、みるみる増えていく。

酔って弛緩した頭のなかは、狐の舞姫しかなかった。

「ん？……」

ラズルのグラスを持った手が止まった。

狐の仮面をかぶった女たちの中の一人を、じっと見つめた。

それは、ありふれた仮面だった。

だが、その女は普通ではなかった。

ラズルは身を乗り出した。

ラズルは女の踊りに釘づけにされたのだ。

弾んでいる。

飛んでいる。

激しくも柔らかな躍動。

しなやかにうねり、次の瞬間、衝撃的にはじける。

……これが踊りだ。

これに比べれば他の女たちの踊りなど、もぞもぞと身悶えしているとしか見えない。

……その仮面の下の素顔を見てみたい……。

狐の踊りを陶然と見とれていたラズルは、仮面に目をやった。

濡れていた。

狐の瞳から涙がほとばしっていた。

……涙？……泣いているのか？……。

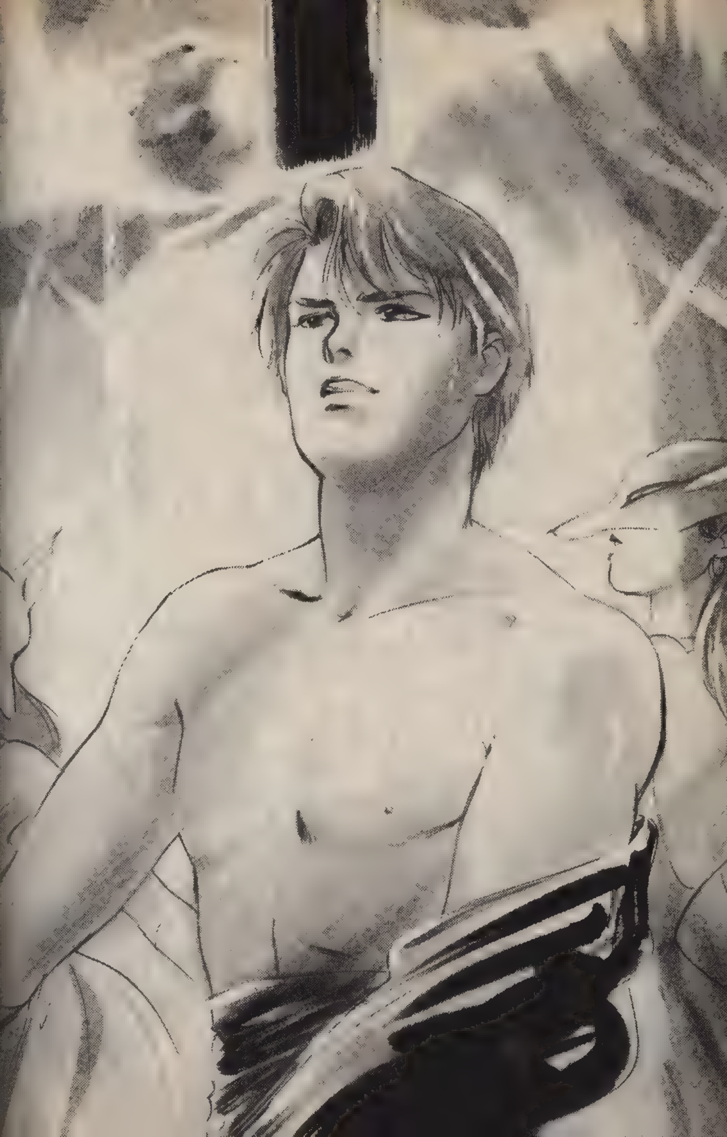
……いや、違う……。
ラズルは、すぐに首を振った。
これほど官能と魅惑にあふれた踊りを、涙の悲しみが表現できるはずがない。
涙ではない別の体液……。
あれは、仮面の下の顔が流す汗が、仮面の目の穴から吹きだしているのだ。
冷房の効いている舞踏場だというのに、さっきまでさらさらと揺れていた女の身体を覆っていた白い合成絹の一枚布が、いつのまにか汗でぴったりと体に張りついている。
あらわになった身体の形は、意外ときゃしゃで、どこにこれほど踊れる活力があるのか信じられない。
……こいつが、あの狐の舞姫だ……。
ラズルは確信した。
同時につぶやいた。
「ものにするのは、このおれだ……」
ラズルは、よろよろと立ち上がってテーブルの男たちを見回した。
「おまえら、手を出すなよ……」
テーブルの男たちは、誰も答えなかった。
酔いまみれて、答える気力などなかった。
「それでよろしい……」

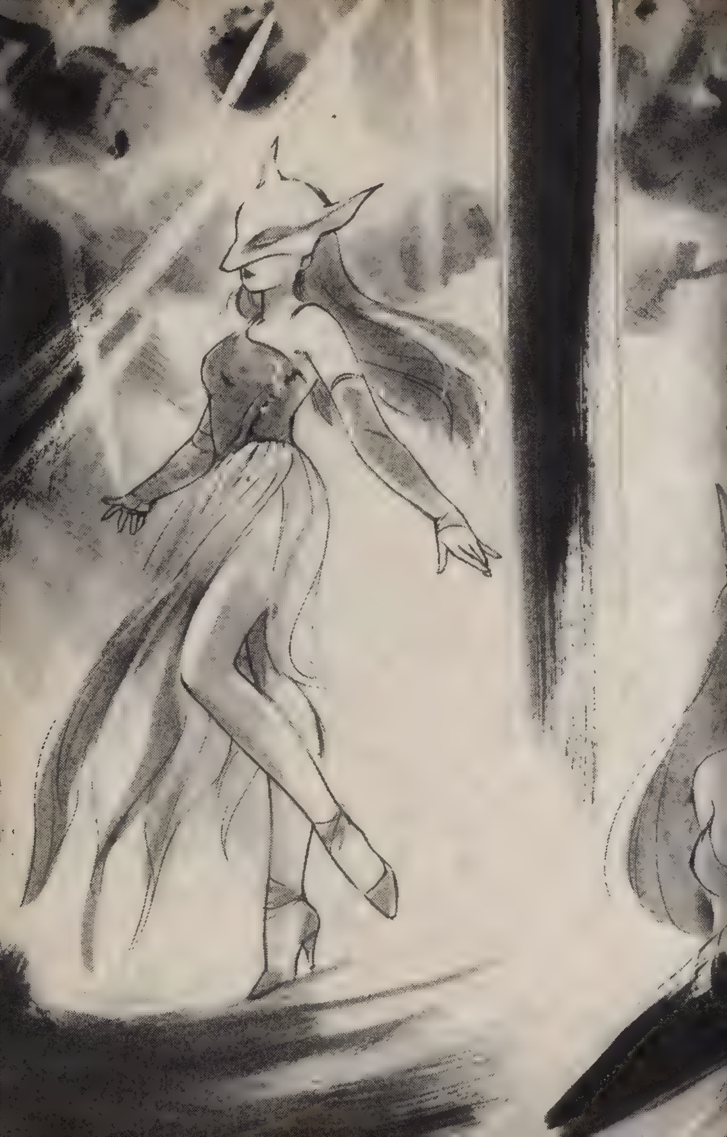
ラズルは、ぐらりとうなずくと、酔いにもつれる足を引きずるようにして、狐の仮面に近づいていった。
狐の仮面の鼻づらに、ぐいっと顔を突き出す。
狐は、すーっと首を振り正面のラズルを避けると、何ごともなかったように踊り続ける。
「ほう……」
ラズルは肩をすくめると顔を歪めて苦笑いをした。
……この女、おれをないがしろにするたあ、いい度胸だ……。
酔いでよれよれになった、今のラズルの様子を見れば、誰でもかかわりたいとは思わないだろう。
だが、酒で麻痺したラズルの頭では、それに気づくはずもなかった。
いつもなら、気のきいた口説き文句のひとつも用意するのだが、酔いは、ラズルに先を急がせた。
「おれは優秀種だ。優秀種が、おまえさんの相手をしたいっていっているんだ」
優秀種という言葉を聞いて、まわりで踊っていた男女の動きが止まった。
「優秀種？」
「こんなところに？」
「嘘でしょう……」
ざわめきが起こった。

この街で自分の種を名乗るものは、ほとんどいなかった。
種や職業に関わりなく一夜のつき合いができるのが、この街の利点でもあったはずだ。
「馬鹿が、種を明かしやがった」
テーブルの同僚が、もう一人にいった。
「焦っているのさ……。優秀種といえば、つき合いたいってやつが、五万といるからな」
もつれた声で答えが返ってくる。
「だが誰がそれを信じる？」
「さあね、おらあ、関わり合って、おれたち、優秀種が、こんなところをうろついているなんてことを知られたくない……。おらあ、今日は降りるよ」
「おれもだ。つき合いきれないぜ」
二人は、肩を抱き合いながら、よろよろと立ち上がり「笑い茸の檻」を出ていった。
まだ、酩酊しきれていない残りの一人が、ラズルの傍にやってきていった。
「よせよ……、おまえは、悪酔いをしてるんだ。もう二人酔い潰れているんだ。後のやつらは。逃げちまったし、おれ一人でおまえまで介抱するはめになるのは御免だよ」
「だったら帰れ！　この狐っ子は、おれが唾をつけたんだ。おまえの出番はない」
ラズルは、仲間に食いつくようにいった。
それから、踊りをやめてラズルを見つめている客たちに怒鳴った。
「なんだ。なんだ。優秀種がそんなに珍しいか？　とぼけるな……おまえたちの中にだって、

優秀種はしっかり紛れ込んでいるはずだ。一夜の行為の優秀種がな。気取るなってんだ」
「だめだこりゃ……」
止めに入った男は、肩をすくめて、これ以上の関わりは御免といった様子でこそこそとテーブルに戻っていった。
そんなことはおかまいなしで、ラズルは続けた。
「いいか、それに、おらあ、おれが優秀種だってことをおまえらにいったんじゃない。おまえらが隠している自分の種を……、それも名誉ある優秀種であるこのおれ様がだ……、恥も外聞もなく自分の種を明かす意味がわかるか？　それほど、この女を抱きたいと思っているからだ。これは愛の告白である。だからおまえらの知ったことではないのである！」
テーブルの男は、酔い潰れている二人の仲間を抱きあげながら舌打ちをした。
「わけのわからん演説をしやがって、あれで口説いているつもりか……」
そして、よろよろと立ち上がった仲間たちにいった。
「おい、長居は無用だ」
二人の仲間を引きずるようにして出ていった。
ラズルは、演説をやめると狐の仮面に向き直った。
「ん？……」
狐の仮面は、ラズルの言葉をまるで無視して、踊り続けていた。
「今、言ったとおりだ。抱かれてくれるね」

狐の仮面は何も答えないで、踊っている。
「聞こえないのか。そういうことなら……」
ラズルは、にやりと笑った。
合成皮のジャンパーを脱ぐと、舞踏場のリズムに合わせ体をくねらせ始めた。
ビルドアップされた胸の筋肉が、ひくりひくりと動く。
「すごい！」
客の女たちの仮面の口元から溜め息が漏れた。
女たちは、先を争うようにラズルの周りに来て、踊り始めた。
もとより、ラズルには、そんな女たちは、眼中にない。
だが、目当ての狐の仮面も、ラズルをまったく意識していない。
芋を洗うように蠢く踊り手たちの間を擦り抜けて、たった一人で踊っている。
……そっちがその気なら……。
苛立ったラズルは、踊り手たちを押しのけるように踊り、ぐいぐいと狐の仮面に近づいていった。
そして、抱きしめようと飛びかかった。
その腕を払うように狐の仮面は、するりと背を向けていた。
仮面を濡らす涙のように見えている狐の汗が、弾けた。
ひと雫が、ラズルの口元に飛んだ。





ラズルは、思わず舌先で嘗めた。

「うっ……」

ラズルは思わず呻いた。

それは、鈍い刺激があった。

舌先が、かすかに痺れた。

「これは?……」

抱き慣れた帝国人民の女の汗の味ではなかった。

ラズルは、女の汗の香りに刺激されるタイプの男だった。

とくに、発情期の女の汗は、どんなスープよりラズルを興奮させた。

だがこの女の汗は違う。

心地よいとはいえなかった。

いや、むしろラズルには苦い不快な味といえた。

そしてこの不快感には、似たような記憶があった。

＊

子供のころ、優秀種研修会で、「帝国人民の体質にとってもっとも有害なものは何か……」

という課題があった。

研修会は、海に近い僻地の町に見学に行った。

町の住人は、ほとんど属国人と奴隷だったが、町についたとたん、漂う異臭に、ラズルは卒

倒した。
優秀種の同級生も一様に不快感をもよおしたが、気を失ったのはラズル一人だった。
後で指導員の説明を聞くと、それは、町を覆う空気……海の汐の香りが、原因だった。
今後の帝国人民にとって、光化学大気以上に危険になるはずの空気だという。
完璧な空気清浄器の取りつけられた診療所で、目を覚ましたラズルに、僻地駐在診療員は、にこやかに語りかけた。
「きみは、理想的な帝国人民の体質をしているね」
「理想的な体質？」
聞き直すラズルに診療員はうなずいた。
「帝国人民の種は、年々進歩している。数十年前に生まれた帝国人のなかにはまだ、海の匂いや空気を好む者もいた。いわば、不純種だ。この奇形変種は、始末が悪い。帝国人の優秀種の中にも、普通種の中にも、まんべんなく現れるのでね。だが、最近は、ほとんどの帝国人が、汐の香りに不快感を持つようになった」
「まだ、体がだるいです」
ラズルは、逞しい体を、やっとの思いで、起き上がらせた。
「すぐに元に戻る。今は、まだ、きみの体内で海の空気に対する抵抗素が、活動しているんだ。体内から海の空気が抜ければだるさも消える」
診療員は話を続けた。

「知ってのとおり、海水は、帝国人の体にとても危険なものだ。それを前もって感知できるどころか、きみは、アレルギー性癲癇に似た強い反応を起こして倒れてしまう。体質だけなら、今現在、最も進歩した帝国人の体のひとつだといえるね」

「最も進歩した帝国人の体？」

ラズルは聞き直した。

「そう……、きみが生まれるのが十年早かったら、最優秀種に認定されていたかもしれないね……」

「最優秀種か……」

ラズルは力なくつぶやいた。

……確かにおれは、十年遅れたのかもしれない……。それが四ポイントの差か……。

診療員は、ラズルの気持ちを知るはずもなく、

「ま、もっとも、今は、もっと進歩した帝国人種が、どんどん誕生しているから……われわれの体質は帝国人として、どんどん遅れた種になっていく。わたしも一応優秀種のはしくれだが、それほど海に弱くない体質だ。たぶん不純種が、遺伝子に交ざっていたのかもしれんがね……。で、お陰さまで、海に近い僻地の町の診療員だ。今、生まれたとしたら、優秀種どころか、秀種はおろか、良種に認定されても文句はいえないだろうね。下手をすれば、普通種かもしれん。まったく近ごろの種の進歩にはついていけんね」

診療員は、自嘲気味に肩をすくめた。

ラズルは、浄化マスクをつけっ放しで町を見学した。
それでも町の空気はめまいを起こすほど不快だった。
平気で暮らしている属国人や奴隷が、信じられなかった。
しかも彼らは、海の匂いのしみ込んだ魚を、平気で食べている。
しょせん奴らは、人間じゃない。
獣だ。
いや、どう使ってもかまわない家畜どもだ。
ラズルは、帝国人民と他の人種の差をいまさらながらに感じた。
しかし、耳を疑う話もあった。
海の近くに別荘を持っている帝国人もいるのだ。
魚すら、ゲテモノ料理として好んで食べるという。
「旧種に属する帝国人は、海を好むものもいました。彼らは、海の毒素に影響を受けない体質を持っていたのです。それればかりか、彼らは、海を心地よいとすら感じたようです」
海を見下ろす丘の上に建つ荒れ果てた屋敷の前で、指導員はラズルたちに説明してくれた。
「もともと、この世界の生き物は、海から生まれたという伝説があります。事実、属国人や奴隷たちは海を苦にしない。それが、帝国人にも現れるのは、遺伝子のなかの不純要素の作用としかいいようがありません。その解明はまだ完璧になされてはいませんが、帝国人にとっては、原始の体質が現れる一種の先祖返りかもしれません。この現象は、つい最近までは、優秀種か

ら普通種までの胎芽種の差なく現れる一種の病気でした。その数は、一時、薬物依存や喫煙癖の人間より多くて、社会問題化されたことは、皆さんもご存じでしょう。なにしろ、海を好む体質の帝国人は、癌系統の発病率が、他の帝国人の五倍以上あったのです。海を好むということで、帝国の優秀な人材が癌で失われていくのは、国家の重大な損失です……」

「法律で規制はできなかったのですか？」

同級生の一人が聞いた。

指導員はうなずくと、

「（健康のため海に近づくのは注意しましょう）の台詞をスローガンにしたキャンペーンが、帝国によって幾度も行われました。しかし、俗にいう『海禁法』の設定までには至りませんでした。海を好むという性質は、法律などでは規制できないほど強く、無理強いをすれば暴動の危険さえありました。ご存じのようにその当時のわが帝国は、世界制覇の途上にありました。世界各地で絶えず起こる聖戦の最中に、内部で暴動が起こっては大変危険です。そのため、帝国は『海禁法』を諦め、海を好む不純種傾向のある帝国人は、減りはしませんでした」

指導員は、建物の屋上にみんなを案内した。

「そんな帝国人たちは、仕事を離れて同好の者たちと海を楽しむ別荘をこぞって建て始めました。このあたりは、海も汚染されていなくて彼らにとって格好のリゾート地でした。それに目をつけた、土地売買業者が、自分は海の近くには住めない体質のくせに、海を好む帝国人目当てに土地を買い占め……自分は住む気はないが、貸別荘で儲けようという投資家の人気をあお

って、海岸線がリゾートブームに沸いたこともあります。帝国上層部も、土地売買の税収入を見込んでそれを奨励した時期もありました」
「税収入か……。それで行政関係のおれたちを、こんな気分の悪いところに連れてきたんだな……」
同級生が、ラズルにささやいた。
ラズルは、海の空気に吐き気をもよおして答える余裕もなかった。
一刻も早くここから逃げだしたかった。
だが、指導員の説明は続いた。
「しかし、汚潮が海を覆いだすと、さすがに不純種傾向の帝国人も海の吐き出す有害物質のため、命の危険に曝されます。とてもこんなところでは住んでいけません。結果はこれです。二年前は、豪華な屋敷だったこの別荘も、今は住むことのできない廃墟です」
たしかに丘から見下ろす海は、汚潮にどす赤く濁り、おりからの強風にのたうっていた。
「もったいないことです。これだけの建物です。膨大な金額がかかったでしょう。このように無駄な消費を象徴する廃墟は帝国領土の海岸線に数多くあるのです」
「使われなくなった土地の固定資産税はどうなるのです？」
早く説明なんぞやめてくれ……、おれはここにいたくない……。そんなラズルの気持ちなどおかまいなしに研究熱心な同級生が、指導員に聞いた。
「土地を持っている以上、税金は取られます。帝国人民の住めない土地であっても土地は土地

ですからね。売ろうとしても、もはや帝国人民(エンパイアラー)に買い手はいない。属国人や、奴隷(クレチア)たちの収容地区ぐらいにしか使い道がないのです。この別荘の持ち主は、今も多額の税金を、使わなくなったこの土地と建物のために払っているのです」

「大散財だな……、別荘貧乏になっちまう……」

同級生がつぶやいた。

「そう、そのために没落した家も少なくありません。けれど、それでも懲(こ)りずに不純種傾向の帝国人は、きれいな海を求めて、僻地に別荘を建てたがる。金が動く。帝国に税金が入る。これも大事な帝国の税収入のひとつです。しかし、それも長くは続かないでしょう。いいですか。ここからが大切なところです」

研修生たちの数人は、電子手帳を出してメモの用意をした。

「われわれの種は絶えず進歩しています。海の空気に耐えられる不純種傾向の旧種帝国人の出生率は、どんどん減っています。それは、帝国人の人種的進歩としては、喜ぶべきことですが、一方、海岸線の税収入は減少の一途をたどらざるをえません」

指導員は、研修生を見回していった。

「われわれは、代わりの税収入を求めねばなりません。その方法が諸君にはわかりますか？帝国が、最も得意とするやり方なのですが……」

指導員は、もったいぶった口調でいった。

研修生たちは、顔を見合わせた。

「そんなわかり切った質問は、教室でしてくれ……」
ラズルが、あえぐように叫んだ。
「わかり切った？……」
指導員は、明らかに気分を害して聞き返した。
ラズルは吐き捨てた。
「ああ、その答えは戦争さ……。戦争が起これば、武器の製造やら、葬式やら、破壊された土地の復興やらで金が動く。金の動きが活性化すれば、それに伴う税金が入ってくる。消費税は、人が金を消費しなければ、税金にならない。それと同じだ。帝国人に戦争で金を使わせれば、いろいろな形で税金が入ってくる」
「しかし、戦争での金の使いすぎは、インフレ……、物価高を巻き起こします」
「それで困るようなやつは、切り捨てる。流民でも奴隷(クレチア)にでも身を落とせばいい。劣等部分を切り捨てて進歩するのが、帝国の基本方針のはずだ」
ラズルは、まくしたてた。
ともかく、この場の海の空気から逃げたかった。
「なるほど、しかし、戦争をしようにも、帝国の敵はこの世界にもう存在していませんが……、どうします？」
指導員は、試すような表情でラズルの顔を覗(のぞ)き込んだ。
「内乱でも反乱でもいい、帝国内部で戦いを起こせばいい」

指導員はうなずいた。
「そのとおりです。で、内乱や、反乱を起こすには……」
「属国人や奴隷だけでなく帝国人の不満を爆発させるような、政治の欠陥があればいい。……おれたちが、誰が見ても不公平でおかしな、ばかな行政をやればいい……。そうすれば、そのうち、反乱が起こるかもしれない」
「むちゃくちゃだ」
メモを取っていた研修生の一人がつぶやいた。
「むちゃくちゃ？　何がむちゃなんだ！」
ラズルは、食いつかんばかりに喚いた。
その迫力に押されながらも、研修生は、口をトンがらせて逆襲した。
「われわれは、帝国人のためになる、よい行政を学んでいるんだ。税収入を増やすために、帝国人に犠牲のでる行政をやろうなどという発想は信じられん」
もう一人の研修生もうなずいた。
「そうとも、内部混乱を引き起こすような間違った行政を、それと知っていてやるなど、まるで、飢えたタコが自分の足を食べて生きようとするたとえ話と同じような愚行だ！」
ラズルは、海の空気に喘ぎながら叫んだ。
「死に絶えた海の生物などをたとえに使うな。いいか、帝国はタコではない。足がなくなっても頭が残ればいい。足などいくらでも生えてくる。頭が成長するならば、足など何本食ったっ

ていいんだ！」
「諸君……」
指導員が、割って入った。
「教科書どおりのよい行政が、現実の帝国にとって最良かどうかはわかりません。常識としては間違っていても、現実の帝国のためになるのがよい行政です。違いますか？」
ラズルは胸をかきむしって怒鳴った。
「もういい！　そんな議論は、教室でもできます。こんな空気のなかで長話するのが、現実的によい指導法だっていうんですか？　おれはもう耐えられん！」
……よかろうと間違っていようと、それを決めるのは、帝国指導者だ。おれの知ったことか……。
ラズルはよろよろと屋上から降りていった。
ラズルがそのときやりたかったのは、一刻も早く、海の空気から逃げることだ。
それは、ラズルが税務局員になった今から、十年以上昔の出来事だった。

＊

……あのときの味だ……。
舌先に味わう狐の舞姫の汗は、ラズルに海の匂いを思い起こさせた。
ラズルは立ち止まり、狐をじっと見据えた。
普通の帝国人なら、汗に交じったかすかな匂いに気づきはしないだろう。

だが、並みの優秀種より体質だけは、最優秀種に近いラズルの体は、海の匂いに敏感だ。
たとえ、酒に酔って、意識は泥に近くても、その感覚は失っていなかった。
いや、むしろ酒を飲んで感覚の麻痺した状態で接する海の匂いは、毒に痺れたような、苦いがそれでいて不思議に甘美な快感があった。
海の匂いを持つものは、内陸の都市にもいる。
海を苦にしない属国人や奴隷(クレチア)には、どんなに香水で隠しても、体臭や汗の匂いの中にそれが交じっていた。
そして、不純種の傾向をもつ帝国人にもかすかにその匂いがある。
ラズルは、そんな人間に会うと知らず知らずのうちに鳥肌(とりはだ)がたち熱っぽくなるのだ。
一種のアレルギー体質と呼んでよかった。
酒に酔ったとき、それは少しも苦しくなく、なんともむず痒(がゆ)く身悶(みもだ)えするような刺激が肌(はだ)全体を襲い、欲情を奮(ふる)いたたせるのだ。
体には拒絶反応はありながら、官能は吸い寄せられていく。
ラズルはその感触が自虐的(じぎゃくてき)で好きだった。
毒の甘さと表現するしかなかった。
ラズルは酩酊するといつも、海の匂いのする汗をかく属国人や奴隷(クレチア)の女を、そして不純種傾向の帝国人を、抱きたい衝動にかられた。
毒の甘さと表現するしかなかった。

狐の舞姫の汗には、たしかにその舌触りがあった。
ラズルは興奮を押さえることができない。
……こいつは不純種の帝国人なのか？……。
ふっと浮かんだ疑問を、ラズルはすぐに打ち消した。
……いや、この若さで、不純種傾向の帝国人は、めったにいないはずだ。今、女で不純種傾向といったらほとんどばばあばかりだからな……。すると……、奴隷が、こんなところを出歩くはずはないし……、そうか、こいつは属国人の女か……。
ラズルの酔いに歪んだ顔に卑猥な笑みが浮かんだ。
同時に無視され続けている怒りが込み上げてきた。
……属国人なら、帝国人のおれに何をされようと文句はいえまい。まして、おれは優秀種なんだぞ。なめやがって……。
ラズルは、いきなり右足を狐の舞姫の両太股の間に突き出した。
びくんと狐の体が弾けるように揺れた。
そしてもう動けなかった。
ラズルの太股が、しっかりと狐の舞姫の両足の間にはまり込んでいたのだ。
あまりに唐突で、信じられないほど乱暴で淫らな行為だったため、舞姫には、かわす用意ができていなかったのだ。
少なくともここは舞踏場とはいえ、公衆の面前なのだ。

だが、踊っている客は、一瞬動きを止めたが、見て見ぬふりをして、また踊り始めた。面白がってにやにや笑って見ている者さえいる。
さっきのラズルの演説が効いていたのかもしれない。
もし、ラズルが本当の優秀種だったら、止めに入って喧嘩にでもなり、後で裁判所にでも訴え出られたらどんな仕打ちを受けるかわかったものではない。
帝国の裁判で、下等種が、上等種に勝った前例はないのだ。
それに、舞踏場に来た男たちのほとんどが、この舞姫を誘い、そして無視されていた。生意気なあの女が、どんな目に遭うか、見物してやろうという男たちもいた。
この舞踏場中で誰一人、狐の舞姫を助けようと思うものはいなかった。
ラズルは、舞姫の襟首をつかんで引き寄せ、酒まみれの息を吹き掛けた。
「おまえを抱きたいといったんだ。優秀種のおれの言葉が、聞こえないのか？」
「優秀種……」
狐の舞姫が、かぼそい声でいった。
声も体も震えていて、明らかに怯えていた。
「おまえは、帝国人じゃないだろう」
「えっ？」
舞姫の体の震えが凍りついたように止まった。
「だがおれは、どこの女だろうとかまわん。おれは、おまえの仮面を剥いで、抱いてみたいだ

けだ」
「優秀種ね……、そう、帝国の優秀種ね」
「ん？」
ラズルは、意外だった。
さっきとはまるで違った、妙に落ち着いた声が返ってきたからだ。
……誰も助けてくれそうもないと知って居直ったのか？　それにしてもこの落ち着きようはなんだ。どこか手慣れていて……、こいつは、商売女なのか？……。
狐の舞姫ははっきりした口調でいった。
「あなたの器に、わたしは似合いません」
「器？　器はおまえだ。どんな器だろうと似合わせてやる」
ラズルは強引に、舞姫を覆っている合成絹の下から手を入れ下着を引きちぎった。
「うっ」
舞姫は、かすかに悲鳴をあげた。
ラズルは、太股の上に舞姫を乗せ、そのままテーブルの上に押さえつけた。
舞姫は、まな板の上に乗った魚のように動かなかった。
ラズルは苛虐(かぎゃくてき)的な笑みを浮かべ、
「最初から、その態度だったら、こんなところで抱かれずにすんだものを……」
ごくり……。

客の男の生唾を飲む音がした。
ラズルはその音のほうをふり返った。
「よく見ておけ……、狐の舞姫の素顔が、優秀種のやり方で泣きじゃくるところをな……」
そして、仮面をはずそうとして、舞姫の両足の間に踏み込んでいた右足を降ろした。
そのとたんだった。
ラズルの体は、下半身からぐいっと突き上げられた。
感電したような痺れが、下半身から頭へ突っ走った。
「なにっ？」
ラズルは立ちすくんだ。
舞姫のバネのように弾けた足が、下半身の付け根に叩き込まれたのだ。
だが、ラズルには何が起こったのかまだわかっていなかった。
テーブルから跳ね起きた舞姫の仮面を剝ごうと手をのばした。
その手の下をかいくぐった舞姫は、同じ場所を今度は、ハイヒールの先で蹴り上げた。
ぐしゃっという何かの潰れる嫌な感触が、ヒールの先に残った。
ラズルは、かっと目を開いて仁王立ちになっている。
舞姫は、後ずさるとくるっと踵を返し後も見ずに出口へ走った。
客たちは何が起こったのかわけがわからず、ただ立ちすくんでいるラズルを見つめ、誰も狐の舞姫を追おうとはしなかった。

ラズルは立ったまま気を失っていた。

やがて……、ラズルは下半身にしみるような痛みを感じ意識を取り戻した。

だが、酒に酔いすぎた神経は、本来の痛みを感じさせていない。

ラズルにとって、その痛みよりも、大勢の前で舞姫を取り逃がしたバツの悪さのほうが頭をしめていた。

同僚たちが、先に帰ってくれたのがせめてもの幸いだった。

……このざまを見られたら、税務局のいい笑い者だ……。

ラズルは、背筋を伸ばすと、まだ、様子を窺っている客たちにいった。

「なに、今日は、挨拶代わりだ。楽しみは、後に延ばしたほうがいい……いずれ、あの女は、おれに抱かれることになる。それだけは確かだ」

そして、ゆっくりと自分のテーブルに戻ると、酒をあおり飲み、ふーっと息をついた。

それから、ふと、下半身に手をやった。

まるで感覚がなかった。

ラズルは、その手を目の前にかざした。

「ちぇっ……」

ラズルは舌打ちして、それから、わけもなくにやりと笑った。

手は、血まみれだった。

ラズルは、血をぺろりと嘗めて、そのままテーブルにゆっくりと頭をつけた。

下半身に何が起きたのかはっきりわからないまま、ラズルは気を失った。
両足を伝わって血が流れ続けていた。

＊

深夜のブギーガナ地区の雑踏を、狐の舞姫は一目散で走っていた。
ブギーガナ地区は不夜城だ。
夜が明けるまで人の絶えることはない。
毒々しい硝子着色光が乱舞し、風俗営業の呼び込みがけたたましく、街灯拡声器の音は、鼓膜に単調な打楽音を叩きつける。
だが、今の狐の舞姫には、そんなものは何も見えず、何も聞こえなかった。
胸の鼓動だけが、激しく響いていた。
初めてだった。
男に、あんなふうに体を触られたのは……。
そりゃあ知識だけなら、並みの帝国人の女の何倍もあるはずだ。
なにしろ、狐の舞姫は、子供のころ、男を慰める接待用奴隷として育てられたのだから
……。
なのに、狐の舞姫の体は、今も震えが止まらない。
知識としては教えられていても、実際には、まだ、何の体験もしていない彼女にとって、今日の出来事は、いきなりだっただけに衝撃は大きかった。



……しっかりしろ！　しっかりしろ！　別に、やられたってわけじゃない。抱かれたわけじゃない……。

狐の舞姫は、その言葉だけをくり返していた。

やがて、舞姫は、あたりに人通りのない路地にやってきた。

そこから先は、歓楽街ブギーガナ地区に隣接する浮浪者の街メガデラシーナ地区だ。

狐の舞姫は、仮面を取って路上のゴミ置場に放り投げた。

口をへの字に曲げて今にも泣きだしそうな顔が現れた。

まだ少女の面影をいっぱいに残している。

帝国の地方都市ドラ出身の奴隷（クレチア）……、リラ……。奴隷（クレチア）管理局の資料が正しければ、十九歳になったばかりだ。もっとも、正式な記録では、数年前に、死亡したことになっている。

……そう……、リラ、あんたは、もう、ガキじゃない。こんなことで、おたおたしてどうするの……。

リラは、自分にいい聞かせた。

……でも……、十九歳にもなって、何の経験もないなんて……。だからこんなにうろたえてしまう。十九歳よ。十九歳！　不幸以外のなにものでもないわ……。

リラは溜め息をついた。

そして、ふと足元に目をやった。

いつもなら、かすかな街路灯の明かりにも、きらりと反射して見える極上エナメルのハイヒ

ールに何かがべったりとこびりついていた。

リラは、ハイヒールを脱いで、指先で恐る恐る触ってみた。

それは、血の固まりだった。

一瞬、リラの頭に、あの男の股間(こかん)を蹴りあげたときの、おぞましいつまさきの感触がよぎった。

リラは、身震(みぶる)いし、ハイヒールを思いっきり投げ捨てた。

それは、リラの大切にしている靴(くつ)だった。なにしろ、ブギーガナ地区の闇市でいちばん値段の高い靴だったのだ。

十八歳の誕生日に、今、行動を共にしている元闘技作家(バトルライター)のネストが、一週間分の酒代を我慢して贈ってくれたものだった。

だから、血のついた右足だけ捨てた。

ぴょこんぴょこん……、リラは、歩き始めた。

片足だけのハイヒールはよけい惨(みじ)めだった。

「夜遊びが過ぎるぞ」

後ろから、声がした。

びくんと立ちすくんだリラはふり返った。

酒瓶(さかびん)を手にした男が、ふらつく足で立っていた。

リラは、今にも泣きそうな顔でいった。

「もう、ふらふら、おじさま以上に悪酔いしちゃった」

それから、男に思いっきり抱きついた。

そして、本当に泣きだした。

ネストは、ふーっと酒臭い息を吐き出した。

同じ酒臭さでも、ネストの息は、あの男の息よりやさしく、リラには心地よく感じられた。

第3章

追跡者の足音

〔本日の抵抗活動〕……西部海岸地方、ルシベ市近郊で暴動……。疾風のフィレーナ……、鎮圧される。

……中部高原地方、ドーンレーカン奴隷管理局襲撃。……フィレーナの命……、一端、占拠するも、帝国軍の反撃で全滅。

……西部海岸地方、ゲンニュー市で、帝国銀行襲撃……、成功……。愛のフィレーナ……、逃走中なるも、強奪した金が、今後の抵抗活動に使用されるかどうかは不明……。フィレーナの名をかたった単なる銀行強盗の可能性もあり。

……南部海岸地方……、ガドィ地区、帝国農園壊滅、帝国軍兵士十九名、帝国人民百八十四名を消却後、南へ逃走……。嵐のフィレーナ……、帝国軍兵士の消却に比べ帝国人民の犠牲者が多く、一般の反感を買う危険性、大。

……南部海岸地方……、ルイ地区、第十七奴隷収容所解放……。鯱のフィレーナ……、人員一万に増大、おそらく、南部海岸地方では最大規模の抵抗部隊に発展するもよう。

携帯通信電算機の画面に、次々に文字が打ちだされていく。

狼のフィレーナが、南部海岸地方の帝国駐在所で行ったような戦いが、今日も帝国内のいたるところで起こっていた。
どれもこれもフィレーナの名をかたっていた。
しかし、それぞれの規模は小さく、帝国に対する影響力は、微々たるものだった。
「……こんなせこいことやって、いつになったら、帝国さん、かゆがってくれるのかしら……。こんなもん、いくら帝国中で、ちくりちくりちくちくやったって、水虫、蕁麻疹ほどもむずかってくれないと思っちゃうな……」
携帯通信電算機に写しだされていく、各地の反乱情報を見つめながら、リラは溜め息をついた。
そこは、帝国の首都ボーのスラムタウン、メガデラシーナ地区に無数といっていいほどある浮草人相手の木賃宿……風呂抜き荘の、一室である。
その名の意味するとおり、部屋に風呂はおろか、トイレすらついていない場末のホテルだ。
そんなホテルを渡り歩く生活が、もう三年近くも続いている。
このホテルを借りたのは五日前……。そして明日は、また、別の宿屋に移る予定だ。
……そりゃ、ねぐら定めぬ浮き草暮らし……。慣れてもいるし、もと奴隷の私としちゃあ文句をいえる筋合いじゃあないかもしれませんけどね……。
リラは、酒瓶をかかえるようにして、ベッドで寝息をたてているネストをちらりと見て肩をすくめた。

ないけど……、ああ、やだ……。

……お酒のアルコールで体を内側から消毒している人には、お風呂なんて必要ないかもしれ

リラはぶるると体を震わせると、携帯通信電算機の蓋をぱたんと閉じた。

……人民温泉、行ってこ……。

リラは、ネストの寝ているベッドサイドにある文章印字機のキーボードを手早く叩いた。

［情報収拾に行ってきます］

リラは、ネストを起こさぬように、忍び足で出ていった。

ドアの閉まる音に、ネストは、ふっと目を開ける。

その目は、酔いで血走り、まるで濁ったコンタクトレンズをつけたようだ。

ネストは文章印字機のビジョンをとろんと見つめ、窓の外に目をやった。

明るい……、まだ昼間だ。

「情報収拾ね……。まあ、一人歩きしてもいい時刻だ……」

そうつぶやきながらも、けだるそうに立ち上がり、手にもった酒瓶をあおり飲んだ。

「……ん？」

酒瓶はすぐ空になった。

ネストは、懐をまさぐった。

二、三個のクリスタル貨幣が見つかった。

「よろし……」

ネストはにんまりと笑う。

なにしろ最近は、

……ん、もう……、お金を持たすとすぐ飲んじゃうんだから……。

そういって、リラが、しっかり財布の紐を握ってしまっているのだ。

ネストは、文章印字機に向かってなにかを打ち込むと、よろよろと部屋から出ていった。

〔燃料補給〕

ビジョンにはそう書いてあった。

もちろん、リラとネストにだけしかわからない機密管理のキーワードで、文章に鍵をかけておくのを、いくら酔っているからとはいえ、忘れるネストではなかった。

今、部屋の中には、小さな携帯通信電算機と文章印字機と空の酒瓶だけしか見当たらない。

二人の着替えも、旅行鞄らしき物さえ見当たらない。

まさに、着のみ、着のままだ。

二人が、このホテルに入っていく姿を、誰が見たとしても、まさか三年近くも安宿を渡り歩いてきた、いわば安住の家のない旅人だとは思わないだろう。

せいぜい、いささか歳の差のありすぎる恋人同士……、それも、まともな恋愛待合施設を利用できない貧しい恋人同士……か、周囲の目をはばかる、いわゆる奴隷相手では満足できない不倫理的不純異性交遊行為……ほどにしか見えないだろう。

まして、全帝国のいたるところで勃発している、反帝国活動の唯一の反乱相互連絡地下組織

らできないだろう。

情報誌といっても、電話回線を無断利用する通信文書誌だ。別に、印刷所や配達人が必要なわけではない。

優秀な通信電算機と記者と編集者がいれば、少人数でもできない話ではない。

だが、それがまさか二人だけとは……。

しかも、若い娘と中年男の組み合わせとは……。

そして、絶えず居場所を変えていようとは……。

その意外さが、帝国警察の首都圏反乱特捜部が、いくら血眼になって捜査しても、いまだに尻尾を摑めない理由のひとつだった。

もっともリラにいわせると、『フィエーブ』の最大の意外性は、その優秀な記者と編集者を兼任するおっちゃんが、空前絶後の酒中毒者だということだ……と、ときどき真面目な顔をしてつぶやく。

いまはともかくやっていけてるけど、……このままアルコールに浸かってい続けると……、昔、教わった接待用奴隷の教育のひとつに、酒中毒の主人の扱い方というのがあり、リラも一応、知識だけは、酒中毒を知っていた。

だから、口を酸っぱくしていってみる。

「そのうち体をやられるか、でなきゃあ、頭に来てパッパラパーだよ」

が、そんなとき、ネストはいつもしみじみと、
「本当にそうだよなあ……」
何度もうなずきながら、やがて、にっと笑うと、いつの間にか酒瓶を握っていて……、
「リラのいうとおりだ。リラの名診断に乾杯！」
「……！　んったくもう……、帝国に反乱する前にアルコールに氾濫されちゃうわ……」
リラは、ネストから酒瓶をもぎ取る。
だが、次の日には、どこから手に入れたのか、しっかり酒瓶を抱えている。
それからというものは、いたちごっこだ。
取り上げても取り上げても酒瓶が途切れることはない。
まるで、手品だ。
「こりゃ、執念の人だわ……」
最初は呆れた。
「おじさま、やめて……ね」
それから、一応、年上への敬意をこめて、さらに接待用の口調でお願いしてみる。
だが、やめられない。止まらない。
ネストの体からしみだす酒気の匂いに、リラまで酔っ払って二日酔いだ。
リラだって、お酒は嫌いじゃない。
けれど、飲まずに……、おいしい思いもせずに地獄の二日酔いは、激怒に値する。

「たいがいも、いいかげんにして……。怒！　怒して激！」
怒りまくっても、暖簾に腕押し、
「すまんなあ、悪いと知りつつも……おれはだめな男だなあ……悲しい酒をもう一杯」
で、ぐびり、ぐびり。
「だめだ、こりゃ……」
最近は、ぼやくのすらかったるくなってきた。
しかし、リラはあきらめない。
どんなときでも元気をだすのに慣れているつもりだ。
……要するにさ……、結局、あたしが、頑張るっきゃないのよねえ……、うん……。
リラは、自分で自分にうなずく。
こんなとき、リラはいつも、もしも生きているなら、きっとどこかで頑張っているに違いないフィレーナを思う。
……ね、フィレーナ、ガンバ！……。
そうつぶやきながら、リラは、反乱とは別の、ネストから酒瓶を取り上げるという、まるで酒中毒者の妻のようなもうひとつの戦いを続けていた。

＊

……ここは？……。
ラズルが目を覚ましたとき、最初に目にはいったのは白い天井だった。

何が起きたのか、しばらくは思いだせなかった。

……たしか、ブギーガナ地区の舞踏場「笑い茸の檻」で……、ああそうか……、おれとしちゃ、珍しく不覚をとったもんだな……。

ラズルは苦笑した。

しかし、その口元のゆがみが、一瞬で凍りついた。

壁に備えつけられた、硝子着色光の数表示式時計の文字が目に入ったからだ。

首都時間、二十六日十五時三分……。時間など、どうでもよかった。

問題は、日にちだ。

この時計に間違いがなければ……、十九日の夜、ブギーガナ地区で、あの女に声をかけてから、七日が過ぎたことになる。

……その間のことは何も覚えていない。いったい、これはどうなっているのだ……。

ラズルは、混乱した。

さらに、身体が、何か目にみえない力のような物で身動きできないこと……。そして、身体中に細い管が突きささっているのに気がついた。

管の先には硝子の瓶……。

そのとき、軽やかな鈴の旋律が、聞こえた。

それを合図にしたように、細い管が、するすると、身体から離れていった。

と、同時に、身体を押さえつけていたものが、すっと消えた気がした。

ラズルは上半身を持ち上げた。
ベッドの上に寝かされていたのに気がついた。
「お目覚めですね。点滴の時間が終わりました」
黒衣の男が入ってきた。
黒衣は、この帝国では、最上級の医者を意味することが多い。
「点滴？……すると、ここは？……」
「帝国病院……、ブギーガナ地区分院です」
「なぜ、こんなところに……。この七日間に何があった。おれに何をした！」
ラズルは、矢継ぎばやに質問した。
詰問に近かった。
「まあまあ、落ちついて……」
黒衣の男は、わざととしか思えないゆっくりとした口調でいった。
「七日間も寝ていたんです。のんびりお話しても、いまさら、あなたを、誰も急がせはしませんよ」
「寝ていた？」
「そのいい方が気にいらなければ、気を失っていた。昏睡していた。死にかけていた」
「死にかけていた……」
ラズルは息を飲んだ。

「死にかけたって……。あんた、おれは、死にかけるような、病気も、いや、ブギーガナ地区で、喧嘩も戦いも怪我も、しちゃいない」

ラズルは、酒の入っていないしらふのときには、口調に、たたみかける癖があった。

黒衣の男は、ラズルのしゃべりに水をかけるようにゆっくりといった。

「たしかにあなたには、これといった病気はありません。ブギーガナ地区であなたが何をしたかも知りません。それが常識ですからね。あなただって、いつもはそうでしょう？」

何も知りません。ブギーガナ地区に集まってくる人たちは、何も見ません。何も聞きません。

ラズルは、詰まった。

……そう、ブギーガナ地区は、集まってくる各人が、私事を明かさず楽しむところだった。

「だから、私も、何も聞きません……」

黒衣の男は、ふっと溜め息をついてラズルを見つめた。

「私の知っている事実だけをいいます」

黒衣の男は、手帳型小型電算機を取りだした。

「六日前の朝、ブギーガナ地区の舞踏場の一つであなたは、発見された」

「笑い茸の檻……」

「ええ……。前夜の営業が終わって、誰もいないはずのフロアで、清掃員がテーブルに眠りこけている客を見つけました。けれど、その客は、眠っているわけではなく足元には、血溜りができていた。処分に困った経営者は、とりあえず、人民救命所に連絡した。この地区の救命所

は、応急処置だけして、あとは放りだすのが普通です。なにしろ身元の知れない人間が多すぎますのでね。他の地区なら、当然調べられる逃亡奴隷調査も、ろくに行われない。役人の怠慢ですな……」

「そんなことは、今、どうでもいい」

役人の優秀種であるラズルは憮然といった。

「あ、そうですな……。で、あなたを治療しようとした救急員は、あんまり見たくない物を見てしまったんですな」

「見たくないもの？」

「ええ、あなたの身元証明書……。普通は、ブギーガナ地区をうろつく族は、証明書など持ち歩かないもんですけれどね……。ま、だいたい、いかがわしいことをしにくるわけですからねえ。ここには……」

「先を……」

「あ……、どうも。わたしはどうも、ひとこと多いようだ。で……、あなたは、この場合は、運がいいことに、証明書を持っていた。優秀種という証明書をね。これを見てしまったら、いつものようにいいかげんな治療はできない。いいかげんにやっていたら今ごろあなたは生きちゃいない。出血多量でね……」

ラズルは、呆然と口を開けた。

「そんなにひどかったのか？……」

黒衣の男はそれには答えずに続けた。

「で、あなたは、ここに運びこまれました。優秀種用特別治療を受けるためにね……。で、あなたは生きている。いえ、以前より健康体といえます。酒気と薬物障害がないだけね……、たった、ひとつだけ失ったことを除いてはね……」

ラズルは、怪訝そうに聞いた。

「たった、ひとつだけ？……」

黒衣の男は、ラズルの顔を見るのがつらいのか、窓の外を眺めた。

「結婚できない。……いえ、してもかまわないが、しても意味がないというべきでしょうか。快楽なら、奴隷や、このブギーガナ地区で、同好の女性……、いえ、男性でもかまいませんが、探せば見つけられますからね……」

ラズルには、黒衣の男のいいたいことが一瞬のうちに理解できた。

しかし、ふっと息を吐くと、いった。

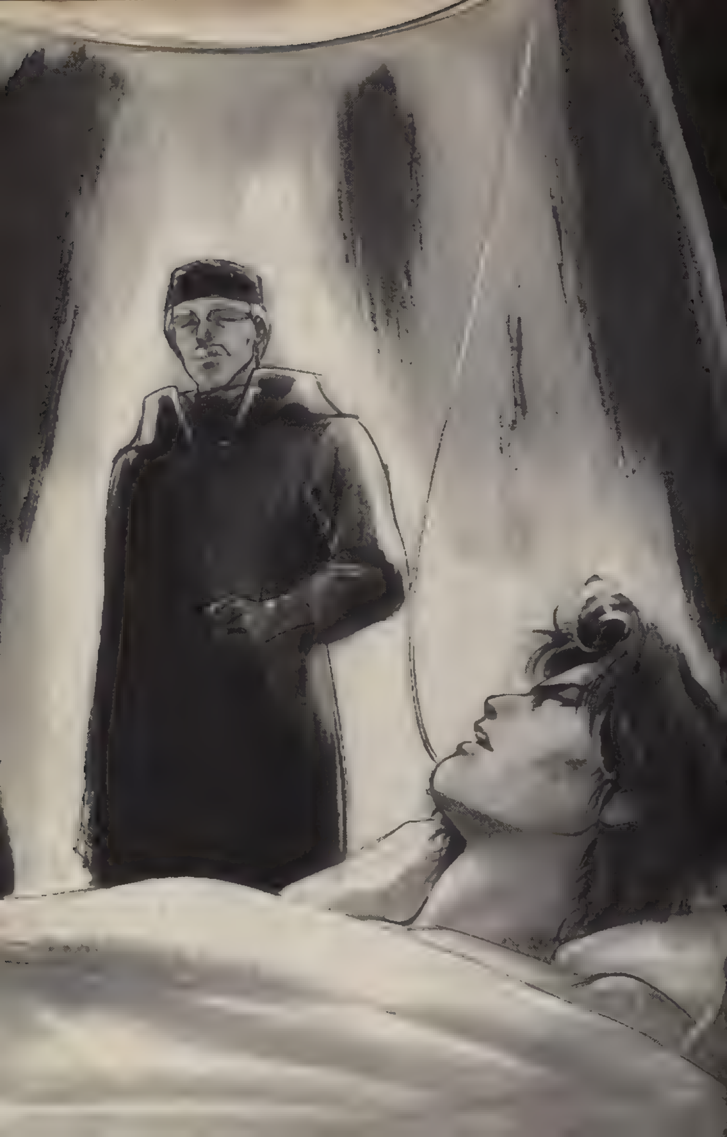
「はっきりいってくれ」

黒衣の男は、仕方ないとでもいいたそうにうなずくと、ベッドサイドの、診断画面を点灯した。

男のラズルが見て、一番面白くない物の断面図が写った。

「あなたの出血と、受けた打撃の損傷を治すためには、この管を切らなければなりませんでした。本来なら、本人の意思を聞くのが建て前ですが、今回は、緊急を要しました。いつ、卵

子と結合するかわからないあなたの種よりも、今のあなたの人命を優先させたのです。種の貯蔵も考えたのですが、肝腎のあなたが、あの状態では、それもかないませんでした。結論をいいますと、あなたは、行為はできますが、種はありません」
ラズルは、目覚めて突然つきつけられた現実に、笑ってしまった。
その笑いで、頬は歪んでいた。
だが、目から涙が、だらだらと頬を伝わっていた。
黒衣の男はさすがに気の毒そうな表情を作った。
「この事実は、当然、帝国上層部の電算機には記憶されます。しかし、個人の秘密は守られますから、あなたの、優秀種という誇りはなんら傷つきません。いままでどおりの役職にも復帰できますよ。職能と、人民生産生殖能力は別の問題ですからね」
ラズルの涙は止まらない。
……それほど、衝撃を与えたのだろうか……。
黒衣の男は、いささかあわてた。
……せっかく命を助けた優秀種なのだ。優秀種を助ければ、医者の得点は高くなる。それが、種のないことを苦に自殺でもされたら、もともこもないどころか、失点になりかねない……。
黒衣の男は、やさしさをとりつくろうことにした。
「なあに、気にすることはありませんよ。結婚だって、問題はありませんよ。相手の女性が、最優秀種を生む可能性のあるほどの優秀種でもないかぎりは……、上層部の最優秀種期待指定



の折り紙つきの女性でもないかぎりはね……」
ラズルはふっと黒衣の男を見つめた。
黒衣の男は、しゃべり続けた。
「ま、そんな箱入りお嬢さんは、めったにいないわけですし……、要するに、誰とでも結婚できるといっていいんじゃないんですか？　もともとあなたは優秀種です。地位も将来性もあるんです。それはちっとも変わっちゃいない。たかだか、子供ができないくらいで結婚を断わる女性はいないでしょう。だいいち、産児制限は、上層部によって奨励されているんですからね。自発的に、産児制限したと思えば腹もたたないでしょう。いいですか、あなたは今も優秀種なんです。現代の実社会では、最高の位置にいる優秀種なんです。それをお忘れなく」
黒衣の男は、優秀種という言葉をしつこくくり返した。
ラズルに優秀種の自覚を持たせて、元気づけようとしたのだ。
ラズルは、涙にかすむ目で、黒衣の男を睨んだ。
「種のない優秀種に、なんの意味があるというんだ？」
「は？……」
黒衣の男は、ラズルを見つめた。
「優秀種は、最優秀種を生める可能性があるから、価値があるんじゃないのか？　帝国は、種の進歩を最大の目標にしている。そして、すべての帝国種は、確実に進歩している。おれの十歳年上の世代の優秀種と、おれたちの世代の優秀種を比べれば、知能指数の面で五パーセント

は違う。おれに子供ができたとしたら、さらに優秀な優秀種になるのはわかりきっている。だが、そんなことは当たり前だからいいんだ。けれど、おれがもし、最優秀種期待指定の女と子供を作れば、最優秀種が、生まれたかもしれない。いや、生まれる確率は高い。いや、確実に生まれる！」

ラズルは、まくしたてた。

行き場のない怒りに身をよじらした。

黒衣の男はラズルのえもしれない自信にいささかムッとしたが、落ちついた声をとりもどしていった。

「たいした自信ですが、最優秀種を生みだせる確率に賭けるより、ご自分の人生を楽しむべきだと思います。いずれにしろ、結果はでてしまったのですから……」

「失われたものは、もう戻らないってことか……」

「失われたものより、新しいこれからを考えるほうが、楽しいと思いますよ……」

「まあね……」

ラズルは、もう何もいいたくなかった。

自分の人生のほとんどが、最優秀種と優秀種のわずかの差によって支配されてきた。

それを、いまさらいったところで誰の同情を得ることもできない。

なにしろ、この世界では、優秀種自体が選ばれた少数の人種なのだ。

その種が、さらに高みの最優秀種を望んだところで、高望みの嫌なやつとしか思われないだ

ろう。ラズルは、ぼんやりと、窓の外を見つめていった。

「話はわかった。で、おれは、いつ退院できるんだ?」

「体調は、万全のはずです。今日いまからでも退院は可能ですが……、心理的な事情も考えられるともう少しは入院してらしたほうがいいと思いますが……」

「心理的事情なら、ここにいないほうがいい。天井を見ていると、考えるのは、種のない自分の、せつなさだけさ……」

その日、ラズルは、病院を出ていった。

税務局の独身寮にも戻らなかった。

もちろん、局にも出勤してはこなかった。

局は、ただちに、帝国警察にラズルの捜索届けを出した。

届けは、行方不明者としてではなく、危険な精神異常者としてだった。

優秀種であり、将来の局長候補であるラズルが、その職を投げだすなど、常識では考えられないことだった。

局は医者からの報告を聞いたうえで、精神異常をきたしたと判断した。

しかも、ラズルは首都の税の不透明な部分をよく知っているだけに、一部の有力者にとっては危険な存在だった。

何を話しても、神経がおかしいといわれ信用されず、即刻隔離されれ脳にそれなりの処置をされる精神異常者としてのあつかいは、局として、適切なものといえた。

ラズルも局がその処置を取るのを予想していた。
だが、今はどうでもよかった。
むしろ、逮捕(たいほ)されて、脳処置をされ何も考えられぬ痴呆状態(ちほうじょうたい)になったほうが、気が楽になるとさえ、思っていた。
ラズルは、街をさまよい歩いた。
目的はなかった。
だが、ふと気がついたら、この破滅的ななりゆきの原因になった、あの、仮面の舞姫を追いかけている自分に気がついた。
どこにいるのかも知らないが……、ラズルがとりあえず、やろうとすることは、それしか思いつかなかった。

＊

リラは、純粋湯の中でゆったりと身体をのばした。
そこは、メガデラシーナ地区の人民温泉と呼ばれる公衆浴場だ。
温泉とはいっても、不純物の多くはいった温泉や、鉱泉を、帝国人民(エンパイアラー)は、嫌っている。
したがって、ここの水は、ほとんど蒸溜水(じょうりゅうすい)と呼んでいいほど混り気がない。
リラにとっては、それが、なんとなく、物たりない気もするが、まあ贅沢もいってられない。
広い浴槽(よくそう)で、のびのびできるのは、その日暮らしで安ホテルを転々としているリラにとってここぐらいしかなかった。

もっとも、相棒のネストおじさんが、この温泉に来たら、酔っぱらっているせいもあって、きっと溺(おぼ)れ死んでしまうかもしれない。
それほど広い浴槽なのだ。
ま、お風呂までつき合う義理はないから、いつも、一人で来ているのだが、ま、気になるといったら、その浴槽は、男女混浴で、湯気の向こうに、男性らしい裸もチラチラするが……、気にしない……、気にしない……。ここは、健康のための施設で、来る客も、ブキガーナ地区の舞踏場のように、いかがわしい気持ちで女性を見つめたりはしない。
帝国人民(エンパイアラー)の、場所をわきまえた道徳心の高さは、リラもときどき、感心したりしてもみる。
でも、まったく、温泉の男たちがリラに関心を示さないというのは、接待用奴隷(クレチア)として育てられたリラとしては、いささか、がっかりの気分もないわけじゃないが……、この前の舞踏場で出あった災難を思えば、これのほうがさっぱりしていいなどと思ってもみたりする。
あの事件以来、リラは、まったく、舞踏場には、足を踏み入れてなかった。
仮面で隠した顔は見られていないと思うが、あの男にまた会うかもしれない。
いや、あの男に会わなくても舞踏場に、あの種の男は、まだたくさんいるだろう。
……やだ、やだ……もうごめんだわ……。
リラは、ふっ切るようにお湯の中で身を翻(ひるがえ)し、泳ぎ始めた。
今は、何もかも忘れて、お湯の感触を楽しもうとした。
そのときだった。

「フィエーブだがな……。どうやら、メガデラシーナにいそうだという確証がでてきた」
……『フィエーブ』！　私たちのこと！
リラは、平泳ぎの手を止め、あわてて頭をお湯の中につけた。
頬をぷっくりふくらませて、息を止める。
まるまる数を六十数えられるほどは、お湯の中で、じ～っと我慢はしていたものの、息が苦しくなるにつれて、リラは思った。
……私、何やってんだろ……。ちょっとだけ考えてみればわかることだけど、『フィエーブ』の名前を聞いただけで、なぜ隠れなきゃなんないんだろう……。声の主が、私の顔を知っているはずはまずないし、むしろ『フィエーブ』の言葉でうろたえちゃったりしたところを感づかれたら、それのほうが、よっぽどやばいわ……。そうよ、潜りはやめて、堂々と……。
リラは、ゆっくりと顔をお湯から出した。
顔をぬぐって、声のほうを見ると、湯気でまるで見えない。
……って、ことは、あっちからも見えないわけだ……。こっちが見えないなら……、ようし……。
リラは、少しだけ、大胆になった。
声の主が、どれだけ『フィエーブ』を知っているか、聞いてみたくなった。
「フィエーブを、なぜ、おれたち、都市警察が、やらにゃならんのよ。こりゃ、帝国規模の話だぜ。どう考えたって、帝国軍や国家警察の仕事だ」

さっきの男の声だ。
リラは、なに気なさを装いながら、声のほうに、お湯をかきわけていった。
湯気の向こう……浴槽の縁に腰かけている二人の影が見えてきた。
「それだがな……どうも、帝国の上層部は、真面目に反乱や暴動を鎮圧する気があるのかっていうやつもいてなあ……」
もう一人の男が答えている。
リラはさりげなくお湯の上を漂いながら聞き耳を立てた。
「どういうことだ？」
二人は、リラを気にかけるふうでもなく話し続けている。
「フィエーブという反乱暴徒どもの機関誌が、このボーから発信されているのは、三年前からわかっている。だが、捜査しているのは、おれの知るかぎり……首都治安警察の反乱暴動対策本部だけだ。二年前、部長の上申で百人の捜査員が増員されたとはいえ、まだまだこの首都全域を、同時期に絨緞捜査するには多いとはいえない」
「まあな、お陰で、いちばん住民の素性の不鮮明な、メガデラシーナの捜査が、後回しにされてしまった」
「そりゃそうだ。疑いの薄いほうから消去して、核心に迫っていくのが、捜査の常道だからな……」
「ま、ともかく、絞り込むに絞り込んで、絨緞捜査ができる範囲まではなった。しかし、そ

れまで、何年かかった？」
「ほぼ三年か……」
「そう、その間、フィエーブの地下情報活動で、帝国軍が鎮圧しそこなった反乱や暴動は、全国だと百を下らんだろう」
「だからいってるんだよ。フィエーブの問題は、首都規模でなく、全国規模の帝国軍がやるべきだってな。だが、現実はフィエーブを捜査しているのはおれたち、首都警察だけだ。なぜ、国家警察が動かない？　なぜ帝国軍は、反乱や暴動が起きたときだけ行動するんだ？　まるで、受身一方じゃないか……」
「そのために、何万の帝国人民（エンパイアラー）が犠牲（ぎせい）になった？」
「ようするに、上層部は、あまり、この事態を重要視していないか……もしくは、なにかのために、反乱や暴動を、野放しにしている」
「これだけ、人が死んでか？　今、起こっているのは、奴隷（クレチア）どもが闘技場でやっている闘技試合（バトルショ）じゃない。娯楽じゃない。現実だぞ！」
　男の一人の声が怒りを吐きだし始めた。
　リラは思う。
……そりゃね、反乱や暴動でも人が死ぬけど、闘技場でも奴隷（クレチア）が死んでいるんですけれどね……、あなたたちの娯楽として……。
　男たちは背後のお湯に浮かぶリラには気がつきもせず、話を続けている。

……お風呂で、のんびりするつもりだったけど、これじゃ、本当に情報収拾だわ……。
リラは、しっかりと、聞き耳を立てた。
「まあまあ……、どうせ、数日中の絨緞捜査で見つかるさ。もう、メガデラシーナしか、やつらのいそうなところはないんだから……」
「見つけたら、ぶっ殺してやる!……」
「待てよ。反乱情報を得るために、生かして逮捕するのが建て前だぜ」
「殺す! どんなことがあっても……」
一人がうめくようにいった。
「上層部の命令に逆らってもか?」
吐きすてるような口調が戻ってくる。
「おれの故郷の親父の農園は、反乱軍に焼かれた。みんな殺された……。だからおれも、殺す。フィエーブのやつらが抵抗したことにすれば、殺したっていいだろう?」
「おいおい、そんな命令違反を、こんなところでしゃべっちゃまずいぜ……。誰かに聞かれたらどうする」
二人は、後ろをふりかえった。
お湯の中のリラと、目が合った。
リラは、お湯に潜りたい気持ちを懸命に押さえて、きょとんとした表情で、二人を見つめ返した。

それから、ゆっくりと背をむけた。
二人は苦笑いして話を続けた。
「それはかまわんさ……。どうせ、首都警察の捜査班はみんなその心づもりだ。ここにフィエーブのやつらがいれば、大声でいいたいぐらいだ……。てめえら、待っていろ！　必ず、おれたちがぶっ殺してやるからな！」
大声だった。
浴槽の中で、共鳴して響くほどだった。
その声は、さすがに、お湯の中のリラの背筋を寒くするに充分だった。
リラは、ふりむいて二人にいった。
膝をがくがく震わせながら……。
「あのう、静かにしてくれません？　ここ、あなたたちだけのお風呂じゃないんですから……。
それも、殺すだなんて、ぶっそうなお話……」
あんな声を聞いて、じっとしているほうが、かえって変だと思ったのだ。
「すまんな。驚かして……」
二人は、お湯の中に透けて見えるリラの胸に目をやりながら、苦笑した。
それから、背を向きなおり、小声で……、
「小さいな」
「ああ……、相手をする気にもならん」

男の一人は、ふっと溜め息をついてから真顔に戻り、もう一人に聞いた。

「だが……、おまえ、フィエーブの皆殺しに、不服があるのか？」

「おれも、妻と子を殺された……。反乱暴徒の爆弾テロだった。帝国銀行の小さな派出所の爆破だった」

二人は、しばらく黙っていた。

やがて、どちらからともなく、苦笑し合った。

二人とも、上層部の命令を無視してでも『フィエーブ』を抹殺する気持ちなのは、明らかだった。

そして、たぶん、他の警察員も……。

リラは、その声を聞くと、静かにそこを離れ、向かい側の縁から、浴槽を出た。

脱衣室で服を着る手が震えていた。

公衆浴場を出たリラの身体は、赤くほてっていた。

お湯のせいだけではなかった。

……絨毯捜査が近い……。そして、私たちを問答無用で殺す気だ。

それに対しては、さほど、心の動揺はなかった。

……だって、奴隷だった私には、生命の選択の自由なんてもともとなかったのだから……。

たとえ、主人の気まぐれで殺されても、文句をいえる立場などない階層なのだ。

接待用女奴隷として育てられたリラとはいえ、闘技士として育てられたフィレーナの三分の

―ほどは、いつでも死というものに対面できる覚悟はできていた。

だが、『フィエーブ』の携帯通信電算機に写しだされた反乱や暴動の情報……、その無機質な文字の羅列(られつ)の向こう側で、肉親や知人を失った人々の数しれぬ憎悪が渦(うず)まいているのを聞かされたのは寒かった。

その憎悪は、帝国人民(エンパイアラー)に限らないだろう。

属国の人々も……、もしかしたら、家畜以下のあつかいだとしても平穏に生かされてきた奴隷(クレチァ)たちの中にも、この反乱と暴動に巻き込まれ、好むと好まざるにかかわらず傷つき倒れた者は多いはずだ。

その人たちと家族は、『フィエーブ』をどう思うだろう。

相次ぐ反乱と暴動を、まるで……、いや、まさに煽(あお)りたてているような『フィエーブ』を……。

……私なら、どんないいわけを聞いたって、憎んじゃうだろう……。

……まがりなりにも静かに生きていた生活を破壊されたのだから……。

……それぞれの個人的生活に、帝国への反抗など、どんな意味を持つのだろう。

……どう考えても憎んじゃうよね……。

そして、憎悪の矢面に立ってもおかしくない『フィエーブ』。

……でもって、それを作っているのは私たち……。

「なんとなく、そんなこと、わかっちゃいたけどね……」

リラは、一人でつぶやいた。

……けれど、『フィエーブ』を作るのと、帝国の目をくらますために逃げまわるのに気を取られて、まともに考えてみる余裕なんてなかった……。

「まいっちゃったなあ……」

また、思っている言葉が、唇から洩れた。

最近、リラには、こんなひとり言が多い。

……唯一のお喋り相手だったフィレーナがいなくなってから、話す相手といったら、あの酒中毒のおじさんだけ……。それも酔っているときは、壁と話しているようなもの……。

リラが、自分自身を話し相手にするのは無理のないことかもしれなかった。

……フィレーナと出会い、奴隷生活から逃げだし、そして、フィレーナと別れて三年……。

これじゃあ、私、接待用女奴隷どころか憎悪対象用奴隷だわ……。憎悪対象用奴隷なんてあったっけ……。

……さげすまれ、いたぶられるのが、奴隷の専売特許なのに、こちらが憎むことはあっても……、憎まれるなんて……、これは、もしかして、初体験なんだわ……。なんてこっちゃ、本来の初体験はまだだっちゅうに……。リラ、あんたどういう女の子？……。

リラは自分を笑っちゃおうとしたが、頬が引きつってとても無理だった。

なんだか、ボーっとして、地に足がついていない感じだ。

「ぶっ殺してやる！」

さっきの男の声が、耳鳴りのようにこびりついている。

……こりゃいけないわ……心因性症状ぽいや……。

リラは、無理やりわれに返ろうとした。

……このままじゃ、頭が、プッツンしちゃう。しっかりしろ！……。

リラは、ぺたっと自分のほっぺたを平手で叩くと、

「殺そうったって、死なないもん」

そうつぶやくと、いきなり両手を振って規則正しく歩き始めた。

「いちにいさんし……、いちにいさんし……、一、二、三、四、……」

やがて、その歩きはいつの間にか誰かに追われるように走りだしていた。

リラにとって、追っ手はこの街のすべてに思えた。

＊

リラは、荒い息で風呂抜き荘（バスナインホテル）の二人の部屋の戸を開けた。

酒の匂いが吐きだされ、〔燃料補給〕を終えたネストが、ベッドに横たわっていた。

リラは立ちくらみを起こしたい気持ちで、中に入り、戸を締めた。

……こんなときにこれだもの……。

「ぜ、つ、ぼ、う……」

そんな声が、唇からこぼれ落ちた。

「起きろ！　おっさん！　寝こけてる場合かっ！」

リラは、ネストの襟首を摑んで叫んだ。
「もうすぐ、この街は、絨緞捜査されるのよ！……逃げなきゃ殺されるのよ！」
ネストはとろんと目を開けた。
「騒音は二日酔いに毒だ……」
ネストは呆けた口ぶりで、そういうと頭をかかえて身体を丸くした。
そして横たわったまま動こうとしない。
……どうすりゃいいの……。どうすりゃ、シャンとしてくれるわけ？……。
情けなかった。
いつになくうろたえてもいた。
なにより追いつめられていた。
……私がこのおっさんの目を覚まさせるには……。私にできることは……、なにもないの？
……。
リラの頭に、いきなり唐突に、妙な考えが浮かんだ。
浮かんだというより、頭のどこかが、ぷつんと切れたといったほうがいいかもしれない。
リラは、横たわるネストの背中をじっと見つめた。
……どうせ殺されるなら……、殺される前に……。うん、あいつらが、生きている私を捕まえたら、たぶん、殺される前にされるに違いないこと……、きっと服を剝ぎ取られて……。だったら、今のうちに……、こいつ……、酔っ払いだけど……、私、好きだし……、うん、きっ

と大好きなんだとして……。

リラは、唇を噛みしめて、こくりと自分にうなずいた。

リラはむしるように服を脱いだ。

薄汚れた毛布を、ネストに掛けてやると、するりとその中に身体をすべりこませた。

そして、酒の匂いに塗れたネストの寝顔を見つめた。

ここ一カ月、洗ったのを見たことのない髪に、そっと手をやった。

そして、力の抜けているネストの腕を、ぎこちなく自分の腰に置いた。

「ん?……」

ネストは、いきなり手に触れた柔かな肌触りに、目を開けた。

「どうした?……」

ネストの酔った頭は、毛布の中でリラを抱いている格好になっているのがわかっていなかった。

リラは、精いっぱいのすがる眼差しで、ネストを見つめた。

「なんなんだ……、これは……」

ネストは、焦点のさだまらぬ目で、リラの眉のあたりを見た。

「抱いて……」

リラの声は震えていた。

「ん?」

ネストは一瞬、息を飲んだようだった。だが、すぐに、酒臭く長い溜め息を、リラの顔に正面から吐きかけた。

リラは、酒気にむせたのと恥ずかしさの両方でうつむいた。

そのとたん、リラの身体はネストに押し出され、ベッドから床にいた。

そのうえに、さっき掛けた毛布が、ふわりと落ちた。

……こういう状態って、みじめっていわなければ、なんて呼ぶんだろう……。

「どうかしたのか？　おかしいぞ、おまえ……」

ネストの声が、さらにリラへふりかかった。

「おかしい？……どうかしたのか、ですって？」

リラは、すばやく毛布に身体をくるみ、きっと、ネストを見すえた。

「抱いてっていったの、それ、おかしい？……私がそれいっちゃおかしい？」

「ん……」

ネストは声を詰まらせた。

リラの表情は、今まで見せたことのない真剣さと切なさがあって、ネストにそれ以上の言葉をいわせなかったのだ。

「私、女よ。女が、好きな人に、抱いてっていっちゃいけないの！」

「好き？」

ネストはリラから天井に目をやって、ふっと息を吐いた。

「好き……、か」
　リラは、口をとんがらかして、ほとんど泣き声でいった。
「そうよ……、好きよ、好きなんだから抱いてよ……」
「おまえは、……その……、いい男を見つけて……、抱かれるはずだろう」
「見つからないんだもん……。見つける暇もないんだもん……。絨緞捜査が、始まって、私、めちゃくちゃにされて殺されるんだもん」
　ひっく、ひっく、と、泣きだしていた。
「絨緞捜査か……。わかった。もう、泣くな」
　もう、泣くなといったネストの言葉には、リラが裸でなかったら抱きしめ支えて、いってやりたい気持ちがこもっていた。
「泣くわよ……。最後に残された酔っ払いのおじさんにまで、こんな仕打ちされてさ……。これで、泣かなきゃ、女じゃないわ……」
　リラは、ネストが、抱く抱かれるなどという関係とは、遠いところで自分を見ているのがなんだか無性に悲しく悔しかった。
「あっち、向いて……」
「ん？」
「服、着る……」
「ああ……、それがいい」

ネストは、ごろんと、壁のほうに体を向けた。
服を身につけながらリラがぽつりといった。
「おたがい、こんなときのなぐさめにもなんないのよね……」
「……いい男が見つかるよ。おまえなら……」
「いつ？　時間はもうないもん……。おじさんのそんな言葉、気休めにもなんない」
涙が、とうとうあふれてきた。
止まりそうもないからネストにいった。
「私、ちょっと行く」
「どこへ……」
ネストは、壁に向かったまま聞いた。
「情報収拾……。お風呂、入ったら、また、汗かきたくなっちゃった……」
ネストの後で、リラが戸を閉める音がした。
ネストは、ゆっくりと戸のほうに目をやった。
二人に何も起きなかったが、ネストの酔いだけは、しっかり覚まされていた。

＊

……どうして、止まらないんだろう。涙……、人の体ってこんなに水気が多いものなのかしら……。
舞踏場「笑い茸の檻」で、激しく身をくねらせながら、リラは踊っていた。

あの男に出合うかもしれないという警戒心は、どこかに忘れていた。
仮面もつけていなかった。
もう、仮面などどうでもよかった。
でも、涙はどうにもならなかった。
あの木賃宿から、ずうっと泣き続けていた。
ここに来て、一曲も休まず踊り続けた。
けれど、踊りの汗と一緒に出る涙も、流れるのをやめなかった。
……このまま、泣き続けて、水気がなくなっちゃって、ひからびておばあちゃんになればいいんだ。そうしたら、誰も、抱く気にならなくて、私、誰にも何もされないで殺してもらえる……。
……そうよ。それのほうが、さっぱりしてるわ……。
むちゃくちゃ、やけっぱちで、踊っている。
馬鹿(ばか)、考えていると思いながら踊っている。
ネストおじんの馬鹿！　私、あのとき、本気で思い詰めてたのに……と、　怒りまくって踊っている。
どれほど踊り続けたろう。
さすがの水気も抜けてきたのか、喉(のど)がからからになって、へとへとになって足がもつれてきだしたころ、リラに、ぴったりとくっついて踊っている男がいるのに気がついた。

男は、犬の仮面をしていた。

「……？」

リラは、踊りを止め、犬の仮面を見つめた。

「やっと見つけた……」

仮面の奥から、低い声が聞こえた。

「え？」

「覚えてないか？　この顔を……」

男は、仮面をはずした。

手入れをしていない、不精髭にまみれた顔が現れた。

「おれと会ったとき、おまえは狐の仮面をしていた」

「知らない。な……こと」

「とぼけても無駄だ。おれはおまえの踊りと、なにより汗の匂いを忘れちゃいない」

ラズルだった。

「……！」

不精髭のなかったラズルの顔は、リラの頭に、はっきり焼きついている。

リラは、後ずさったが、その腕をラズルは、がっちり握って放さなかった。

「思い出してくれたようだな。だが、この前のように弾けるのは御免してもらう」

いきなりリラの脇腹に硬質の物がつきつけられた。

それが硝子短剣なのは、リラにもすぐわかった。
「ここでは、何もしない。おれも今は目立つとまずいんでな。ゆっくり外へ出ろ」
リラはいわれるままに舞踏場の出口に向かった。
そうするよりなかった……。というより、もうどうされてもいい気分にもなっていた。

＊

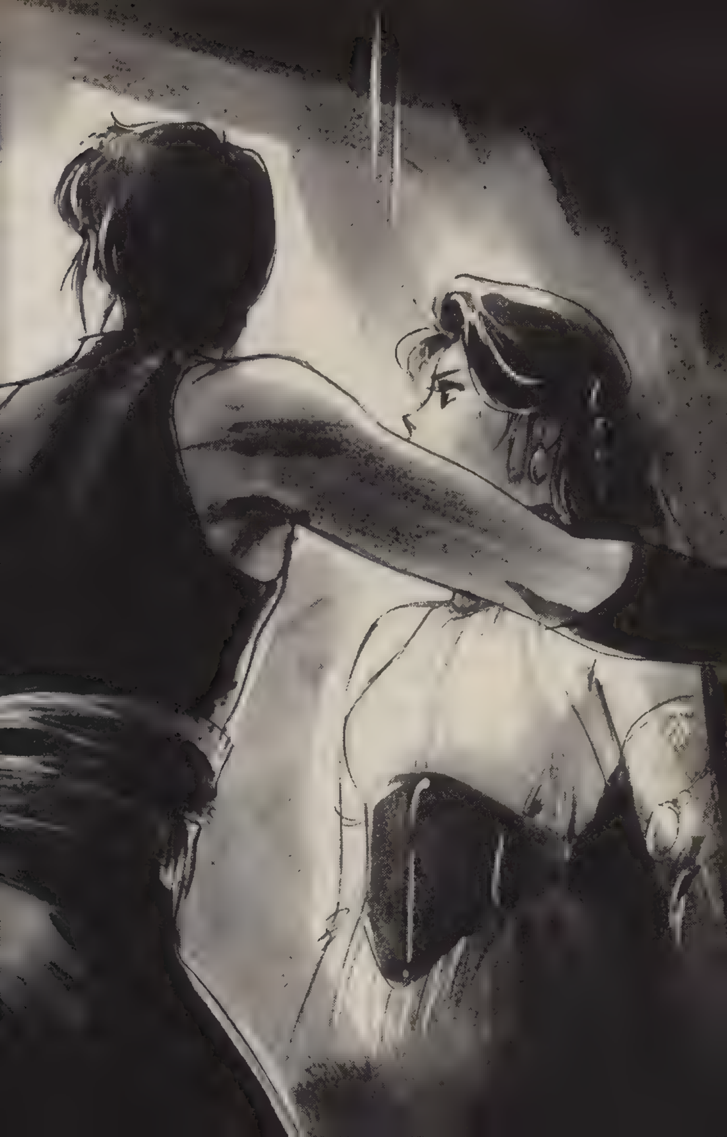
ラズルは舞踏場の横の路地に、リラを連れていくと、いきなり壁に押しつけた。
表通りの硝子着色光がかすかに差しこみ、リラの表情をさまざまな色に変えて映していた。
しかし、表情そのものは、うつろだった。
ラズルは、硝子短剣の先でリラの頰をなでながら、かすかな溜め息をついた。
「狐の舞姫が、おまえのような小娘だったとはな……」
「どうする気？……私を……」
「さあどうするかな……。殺してみるとしようか？　おまえがどんな階級の女であれ、こちらは、痛くも痒くもない。この殺しは、精神病者の犯罪ってことになるからな。ま、おまえにしてみれば、事故にあって死んだようなものだ。どこにも文句はいえない」
「精神病者の犯罪って？」
「目の前にいるおれさ。おまえの一蹴りで、そういうことになっちまった。前途有望な優秀種様が、一夜の戯れに失敗して警察に追われる身だ」
「なんのことか、わかんないわ……」

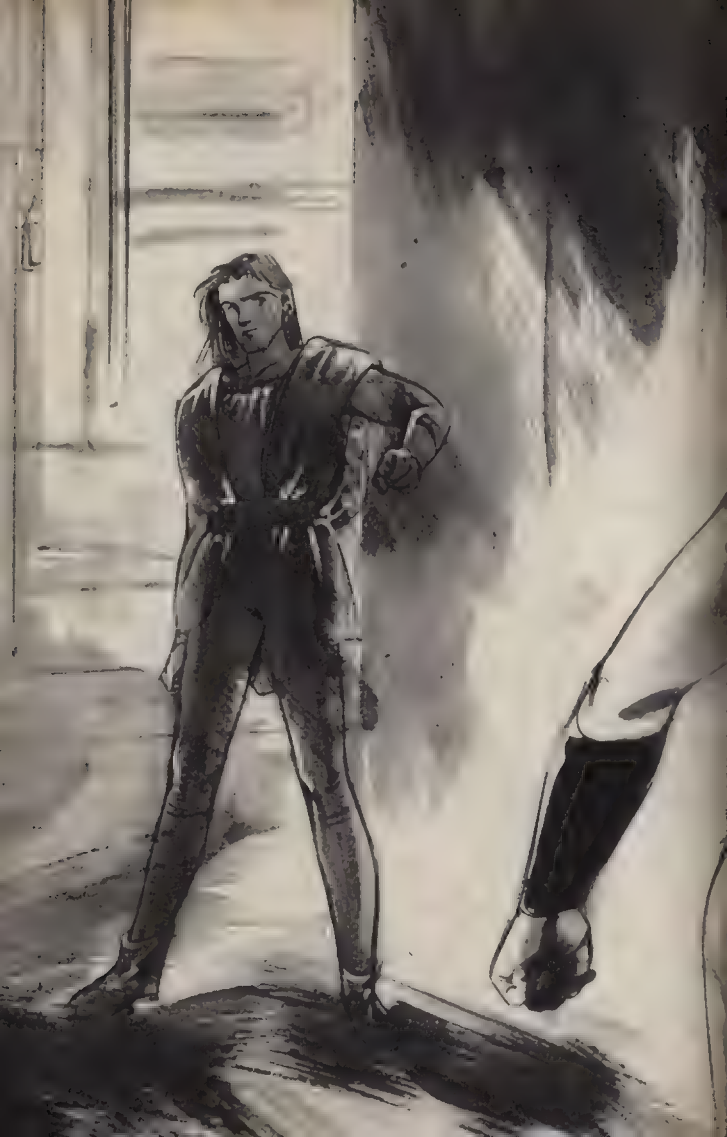
リラは、震えながら、少しだけ、つっぱった口調で、顔をそむけた。
女を数多く知っているラズルには、それが、幼く、初々しくすら見えた。
……自分の人生を変えた女が、こんな子供だったとは……。
ラズルは、ふっと笑った。たまらなく、虚しかった。
「わからなくて結構。おまえが、もう少し大人だったら、話してみたいとも思ったが、しょせんは、おれが、決めたことだ。おまえは、きっかけにすぎない。このっ！」
ラズルは、こぶしを壁に叩きつけた。
リラの顔すれすれだった。
一瞬、身のすくんだリラだったが、顔に触れていた硝子短剣を握った手が力なく垂れ下がり、ラズルが、こぶしを壁に叩きつけたままうつむいているのに気づくと、恐る恐る声をかけた。
「なんか、不幸なんですね……」
「ん？……」
ラズルは、リラを見つめた。
「なんだか知らないけど不幸で……、それって、なんだかわかんないけど……、私のせいなんですね」
「なんだかわかんないけど……、か」
ラズルは、気が抜けたように微笑した。
「殺していいです……。それで、気がすむなら……」

リラが、ぽつんといった。
「あん？……」
「私が不幸にしたんでしょ？　だったらいいです。どんなことしても……。私だって、ほとんど不幸です。殺されたほうがましなぐらい不幸です！　私、いいんです！　ほんと、なにされたって！」
リラの声は、いつの間にかその興奮を隠しきれないほど、大きくなっていた。
「殺す前に、めちゃくちゃにしたければ、していいです！　殴ろうが、蹴ろうが、抱こうが……、私の器じゃないけれど……、うん、私、我慢しちゃいます！」
泣きながら叫ぶようにいった。
ラズルは、呆然とリラを見つめた。
……なんなんだ。この娘は……。
「子供、子供っていうけど、私、もうちょっとで二十歳です。大人です。抱けます！」
リラは、いきなり両手で、服の胸元を開いた。
リラは自分でも、なにをいって、なにをしているのかわからなかった。
ただ、頬を伝わる涙に、
……まだ、私、水気があったんだ……と、妙に感心している自分が、おかしかった。
「そこまでだ……」
路地の奥から他の男の声がした。

その男は、つかつかとラズルに近寄ると、物もいわず殴りつけた。
不意をつかれ、ラズルは路上に倒れた。
「その娘には手をだすな」
ネストだった。
ラズルは、切れた唇の血を拭うと立ちあがった。
「ほう、保護者つきか……。しかし、出てこなければよかったのに……。おまえは、おれを怒らせた」
ラズルはネストが武器を持っていないのを見ると、にやりと笑って、手に持った硝子短剣を投げすてた。
そして、こぶしを構えた。
いきなり、右拳。
ネストは、ひょいと首を捻ってかわすと、
「おれは、左ききだ」
左拳を出した。
だが、当たらなかった。
「ん？」
当惑したネストの顎に、続けざまに三発のこぶしが叩き込まれた。
ネストの身体は、路上にうずくまった。

「まだまだ、いけるんだろう？」
ラズルは、ネストの襟元を摑みあげると、腹にこぶしを、突き込んだ。
さらに、一発、二発……。
リラには、信じられない姿だった。
数年前のネストは、あの屈強な「黒い悪魔」と、少なくとも対等に戦える闘技能力を持っていたはずなのだ。
それが今、なす術もなく、めった打ちにされている。
ラズルは、倒れたネストに馬乗りになって殴り続けた。
……このままじゃ、死んじゃう……。
リラは、二人に駆けよった。
「やめて！」
リラの悲鳴を、ラズルは頭上から聞き、ふとネストを殴る手を止めた瞬間、顔面に衝撃を受けた。
目の前が暗くなった。
ラズルの顔面に、リラの蹴りあげた靴が食いこんでいた。
この前、両足の付け根に受けた一撃より強烈に効いていた。
ラズルの体は路上に崩れ、そのまま、気を失っていた。
「大丈夫？　大丈夫よね？」





リラは、倒れているネストを、すがりつくようにゆすった。
「生きてはいる……」
ネストは、リラを支えにするようにして、よろよろと立ちあがった。
ネストは呆然としていた。
自分自身、相手の拳を避けられなかったのが不思議だった。
「……酒と歳のせいか……、三十を過ぎると転がるように四十……」
そうつぶやいてから、リラにいった。
「すまんが、荷物を……」
路地の隅に、携帯通信電算機と文章印字機の入ったバッグが二つ置いてあった。
「逃げられる？」
「捕まるまではな……」
ネストの顔は膨れ上がり、人間とは思えないほどだ。
それでも、リラは、嬉しかった。
……いつもは、粗大ごみのおじさん、でもまだ、やる気はあるんだ……。
「うん」
リラは、涙を拭ってうなずいた。
そして、二つのバッグに駆け寄ると、両手で、抱え上げた。
「一つ、持とう」

ネストが手を出した。
「いいの。怪我人さんは……」
すたすたと歩き始めた。
そして、くすくすっと笑った。
「どうした？」
リラは、にっこり笑った。
「私、今日、どうかしてたわ……。そうよ、捕まるまでは逃げなきゃね……」
リラは、ふり向いてちょっと生意気にいってみた。
「で、どこへ逃げるの？　酔っ払いの相棒さん」
「さあ、どこに行くかな」
ネストは首をふりながら、そう答えるほかなかった。
絨緞捜査が始まれば、メガデラシーナに隠れ家はないも同然だった。
そして、この享楽街ブギーガナ地区も夜はともかく、昼は、たとえ仮面をつけても隠れられるところはなさそうだった。
営業時間以外のこの地区は、いつも厳しく監視されているのだ。
そんなことはリラにもわかっていた。
……でも、今日はまだ捕まったわけじゃない……。
リラは、よろけがちのネストに肩を貸しながら、二つのバッグを持って、もう少しは元気で

いることに決めた。

＊

どれほど歩いたろう。
いつの間にか、二人は、メガデラシーナを見下ろす丘の上に来ていた。
そこは、メガデラシーナの人たちの墓地だった。
浮き草階級の人生の終点だった。
「終点を最初から捜査することはあるまい」
二人は、路上で野垂れ死にした名のない人々をまとめて埋葬した墓石の陰に、腰をおろした。
もう、朝が近かった。
夜中じゅう動き続けで、さすがに元気なリラも、うとうとしかけたとき、携帯通信電算機の呼び出し灯が鳴った。
「はい、はい、わたしゃ眠いんです。こんな時間になによ……。あ、世間様は、朝かあ……」
首都ボーを囲む城壁の向こうから朝日が昇ってくる。
リラは、携帯通信電算機の画面を見た。
×××〔特別情報〕
……南部海岸地方……嵐のフィレーナ軍、灼熱のフィレーナ軍と同盟……、今後、同一の反帝国軍組織として、帝国撃破を目指すものとする。
なお、呼称は、指導者名から嵐のフィレーナをそのまま使用する。

補足……、灼熱のフィレーナの指導者は戦死。
嵐のフィレーナの総勢……、約三万四千。
×××
リラは、目を輝かせた。
「見て！　反乱軍の同盟が始まったんだわ。おじさんが、いつも『フィエーブ』に書いていたことよね。ばらばらな反乱軍を合わせて、大きな力で、帝国に反抗すべきだって……。その芽が、出てきたのよね」
ネストは、朝日を見つめながらつぶやいた。
「そうかな？」
「えっ？」
「いままで、ふたつの軍に、総勢何人いた？」
リラは、怪訝そうに携帯通信電算機の出鍵盤を打った。
そして、息を飲んだ。
×××
嵐のフィレーナ……、約二万八千
灼熱のフィレーナ……、約一万四千
×××
「計算が合わないわ……」

ネストは携帯通信電算機の画面も見ずにいった。
「そう、同盟したなら、簡単な足し算だ。少なくとも四万人以上いなくてはならない」
「足すと四万二千人だわ。それが、三万四千だなんて後の八千人は、どうしちゃったの？」
「数字どおりに消えたんだろう。彼らは、同盟したんじゃなく戦ったんだ。おたがいの勢力の拡大を狙ってな。そして、『嵐のフィレーナ』が勝った。早い話が、同士討ちだ」
「こんなことって……、じゃあ八千人は殺されたってこと？」
ネストは、それには答えず、いつの間にか手に持った酒瓶をあおり飲んだ。
「まだまだ続くぞ……、反乱軍同士の勢力争いは……。いや、もっと激しくなる」
リラは、ネストの酒瓶を取りあげる気力もなく、ただぼんやりと、墓場の墓石の群れを見つめた。
だが、リラは、まだ知らなかった。
『嵐のフィレーナ』が次に統合しようとしているのが、南部海岸地方の小さな反乱集団の一つ、『狼のフィレーナ』だということを……。
そして、狼のフィレーナが誰かというのも知るはずがなかった。

第4章

反攻の群狼

ゆったりと寄せては返す波の上で、月の光が、軽やかに踊っている。
海に流れこむ小さな滝の水で身体を洗ったフィレーナは、岩場の上から、かすかな滝の音と、波のささやきしか聞こえない月の光の賑やかさを、ぼんやりと見つめていた。
いまごろ、狼のフィレーナの野営地では、昨日の勝利を祝ってどんちゃん騒ぎがくり広げられているだろう。
勝利とはいえ、何人もの血が流されたのだ。
どうして、あんなに楽しそうに仲間たちが、騒げるのかわからなかった。
戦いのときよりもみんなは興奮している。
酒と薬に酔い、やがて、誰かれかまわず抱き合い、誰の目もはばかることなく絡みあう。
鉄の掟、清冽、秩序、粛清、などと、辞書を片手に聞かなければ首を捻ってしまう言葉を羅列するあのスパタですら……、勝利に饗宴は必要です……、といって率先して騒ぎに加わっている始末だ。
こんなとき、フィレーナは、いつも吐き気をもよおし、狼犬のギャッピーとともに騒ぎを

抜けだして海を見にくるのだった。

……いったい、この人たちは何なんだ。それとも、あの騒ぎについていけない僕が、おかしいのか……。どっちにしろ、僕が、女だということは、絶対知られちゃならないんだし……。

それだけは、フィレーナもわかっていた。

酒と薬に酔ったら、男は見境なく女に飛びかかる。

この集団に加わってから、そんな光景を嫌というほど、見せられてきていた。

だから、水を浴びるときも、耳と鼻の効くギャッピーに見張らせて、誰にも身体を見られないよう気をつけていた。

「ギャッピー、おまえが、人間の男でなくてよかったよ」

フィレーナは、そっとギャッピーの頭を撫でた。

が、ギャッピーは、甘える気配はまるでなく、じっと、前方の林を睨んでいる。

その耳がぴくりと動いた。

「ん？」

フィレーナは、ギャッピーの見ているほうに身構えた。

ギャッピーがそんなときは、近くに何かがいる合図だった。

き〜ん……。

フィレーナにも、かすかなその音が聞こえた。

その音が何なのかフィレーナが聞き違えるはずはなかった。

あれは硝子剣（グラススオード）のぶつかりあう音……、それも中型剣（ミドルスオード）の……。誰かが、斬（き）り合いをしている。
フィレーナは、身を屈め、素早く音のほうに走った。
木の陰からうかがうと、一人の男が、六人に囲まれていた。
ときどき、硝子剣（グラススオード）の交錯（こうさく）する光が、ちかりちかりと火花を散らしている。
服装から見ると、両方とも帝国軍には見えない。
……こりゃ、勝ち目はないな……。
フィレーナにはこの戦いの結末を、一目見て予想できた。
囲まれているのは、不精髯（ぶしょうひげ）をはやした、何の変哲もないような三十過ぎに見える痩（や）せた男で、囲んでいる六人は、筋骨隆々とした若い男たちで、素人の目には痩せた男に勝ち目はなさそうに見えるだろう。
だが、フィレーナの持つ、超一流と呼んでいい闘技士（バトラー）としての目には違って見えた。
痩せた男の動きには隙（すき）がない。
囲んでいる六人とは、比較にならない闘技能力がありそうだ。
六対一でも、答えは出ていた。
フィレーナは、今日はもう殺し合いを見たくなかった。
「やめろ！　勝負は見えている」
思わず飛びだして叫んでいた。
「ほう、どうして、そうわかる？　負けるとは限らんよ」

囲まれている男がつぶやいた。
「そうさ。あんたが勝つよ。勝つとわかっている連中をわざわざ殺すのか？」
「おれは殺したいとは思わん。だが、こいつらが許してくれない」
「ここは、今、狼のフィレーナの野営地に近い、変な騒ぎを巻き起こさないでくれ」
「ってことは、あんた、狼のフィレーナの仲間か？」
「そういうことになるよね……」
「へえ……、とうとう、辿り着いたか……。で、皆さん、どうする？　狼のフィレーナの連中に見つかっちまったよ」
男を囲んでいた六人は、明らかに動揺し、今度は、フィレーナにも剣を向けた。
フィレーナは少しもあわてなかった。
フィレーナにとっても、問題にならない闘技能力の六人に見える。
「やめてくれよ。僕は、喧嘩をしに出てきたんじゃない」
「だが、こいつら、知られちゃ困るらしいよ。ここにいるのが狼のフィレーナにな……」
男が、フィレーナにいった。
「どういうこと？……」
フィレーナが、いい終わらぬうちにいきなり、六人の一人が、フィレーナに斬りかかった。
男の剣が、素早くそれを払いのけた。
「若いの怪我するぞ、そこにいると……」

「けど、このままじゃあ」
「どうにもならん……。どうしても、こいつらはおれを殺したいらしい。そして、おまえさんもな……。仕方あるまい、今までは遊んでやっていたが、こうなったら仕方ない……」
男の剣が舞った。
六人の一人が倒れた。
「仕方ない……、仕方ない……」
つぶやきながら、もう一人、それから三人目も……。
一撃で倒していた。
そして、四人目に向かい、
「仕方ない」
「なくない……」
男の打ち降ろした剣を、フィレーナの剣が受け止めた。
「ほう……、やるねえ、若いの」
フィレーナは剣を引いた。
「もう、やめなよ……。で、さあ、みんなもね……」
フィレーナは残った三人に向かっていった。
「この人に勝てっこないんだからさ。ここはよしたほうがいいよ」
三人はおどおどと顔を見合わせた。

男が、呆れた様子でフィレーナに声を掛けた。
「おいおい、勝手に決めてくれるな……。こいつら、放っておくと、またおれやおまえを狙うぞ」
「狙われて、簡単にやられると思うの？」
「ま、そりゃそうだが、世の中、飛び道具ってもんもあってな。白熱光線で、やられたらどうする？」
「そのときは、そのときさ……。だいいち、白熱光線を使うなら、とっくに、この人たち、あんたを撃ってるんじゃないのかな」
「正解だ。こいつらは、おれを殺した証拠が欲しい。白熱光線で溶けて消えてしまったんじゃ、仕方ない」
「なにかわけがありそうな喧嘩だけれど、僕の前ではやめてくれ」
男は、三人に向かっていった。
「と……、この若いのがおっしゃっているが、どうするかね？」
三人は、後ずさると、いきなり、逃げだした。
男は肩をすくめると……、
「ま、こういうことで、三人、斬らずにすんだわけだ。だが、おれの剣は、一度血を吸うとなかなか収まらない」
男は、フィレーナに剣を突き出した。

フィレーナは動かなかった。
男の剣は、フィレーナの胸の人差し指ほど手前で止まっていた。
「なぜかわさない？」
男がフィレーナに聞いた。
「遊ばないでほしいな……、殺す気もないくせに……。もっとも、あと少し、切っ先が近づいていたらちょっとは僕も動いたかもしれない」
「殺す気のないのがわかったのか？」
「けっこう、長い間、やってきましたからね。なんとなくわかりますよ。なあ……」
フィレーナは、いつの間にか傍に来て、ゆったりと坐っているギャッピーの頭を撫でた。
「狼のフィレーナか」
男がつぶやいた。
「ええ、僕たちの集団です」
「いや、あんたが、狼のフィレーナその人だね」
「どうしてです？」
「この犬まで見せつけられて、それとわからぬ者は凡夫といっていい」
男は、フィレーナに向かってひざまずいた。
「あ、何の真似です？」
フィレーナはあわてた。それが、服従の意味であるのは知っていた。だが、奴隷だったフィ



レーナは、ひざまずいても、ひざまずかれる人間になろうとは、考えたこともなかった。
それに、狼のフィレーナを率いるようになった今も、寄せ集めの集団では、そんな儀礼的な仕草をする者はいなかった。
弱者にはふんぞりかえり、強者には頭を地面にすりつけて震える。
それしかなかった。
「困るなあ……、こういうの」
フィレーナは、頭を掻いた。
「ま、そう、気にしないでいい……。いちおう、格好だけでも礼儀を見せねばなりません。私の名は、バンニル……。人によっては、はぐれ蜘蛛のバンニルと呼ぶ者もいる。悪知恵が働くという意味らしいですが……。このバンニル、お仲間に入れていただきたく参上した」
「はあ……」
「さてと……」
バンニルは、立ちあがり膝の泥を手で払うと、フィレーナの顔を覗き込んだ。
「で……、どうしますかな……、入れてくれますかな……。それとも何か、試験でもありますのかな?」
「いえ、別に……」
「なら、決まりましたな。いや、ただで入れてもらおうとは思いません。みやげ話は持ってきている」

「みやげ話？」
フィレーナは聞き返した。
「『嵐のフィレーナ』を知っているね？」
バンニルがいった。
「ああ、噂は聞いています。ずいぶん、大きな反乱軍でしょ？」
バンニルはうなずいた。
「それが来る。二、三日中に……、ここにな」
「なぜ？　ここらの帝国軍は、僕らがもうやっつけた。それに、そんな大群が必要なほど、大きな帝国軍の軍隊は、この付近にはいませんよ」
「ここに来るのは、帝国軍を破るためじゃない。狼のフィレーナの軍を吸収するためだ」
「吸収？」
「と、いえば聞こえはいいがな。早い話が、狼のフィレーナの軍をやっつけて分捕るってことだ。そして、嵐のフィレーナは、さらに大群になる」
フィレーナは、まだ、バンニルの言葉が、飲み込めなかった。
「反乱軍が、大きくなるのは、悪いことじゃないと思うけれど、どうして、僕らを倒そうとする必要があるの？　おたがい、反帝国でしょ。手を組んで協力し合えばいいことじゃない」
「そう、たしかにな。だが、手を組むだけじゃ気のすまないやつもいる。いや、群衆の指導者なんて代物は、とことん、自分の勢力と権力を広げたがるもんだ。お若いの、おまえさんだっ

て、それを望んで、狼のフィレーナの指導者をやっているんだろう？」
「そうかな……。僕は好きでやっている気はないなあ。帝国をやっつけるにはたしかに一人じゃできないし、みんなの力が必要だと思うよ。だけど、自分のために、狼のフィレーナを大きくするなんて御免だな」
「ほう、珍しい種類の指導者だな。お若いのは……」
フィレーナは肩をすくめた。
珍しいといわれたほうが、意外だった。
「どうして？　だって、人の数が増えれば増えるほど、食料だって寝泊まりする場所だって大変だし、もし帝国軍にふいに攻撃でもされたら、動きが取れなくて、きっと犠牲者が山ほど、出るに違いないでしょう？　それに、狼のフィレーナの集団って、戦える技術を持っている闘技士は少ないし、武器なんて持ったことのない人がほとんどです」
「それは、どこの反乱軍でも同じだ」
「でしょうね。僕んところもこれ以上、人が増えたら、危なっかしくてどうにも戦えません。ほんとは安全に生活できる場所があったら、今すぐにでも、そこにみんなを残して……。そうだなあ……、そうだなあ、帝国軍とは今の十分の一ぐらいの人数で、戦いたいんですよね」
「戦闘そのものはそうかもしれない。しかし、反乱する意志の確かな者が、多ければ多いほど、まとまればまとまるほど、帝国にとっては脅威になる。そして、反乱組織の指導者は、多きな権力を握ることになる」

「でも、そのぶん、戦闘能力のない人たちが、帝国の攻撃の的になりやすくなる。そうなるのは、嫌ですね」
　バンニルは微笑した。
「今までのように小さな撹乱(かくらん)戦闘軍で、一生やるつもりかね」
「わかりません。僕は、帝国をやっつけたい。そのためには、なんでもしたい。でも、これ以上、人の血は見たくない。……困ったもんですよね……」
「確かに困ったもんだな、反乱軍の指導者としては……」
「ほんと、困ってます」
　バンニルは、くすくすと笑った。
「おかしいですか？」
「ああ、おかしいね。そのおかしい指導者の率いる狼のフィレーナを助けたい。嵐のフィレーナの蛮行(ばんこう)からな」
「蛮行？」
「三日前、嵐のフィレーナは、『灼熱(しゃくねつ)のフィレーナ』を併合して、この南部海岸地方で二番目に大きな反乱組織になった。知っていると思うが、この地方の最大の組織は、『鯱(オルカ)のフィレーナ』だ」
「あまり、他のフィレーナに関心ないというか……、僕の集団だけで精いっぱいというか……」

「すぐに無関心ではいられなくなる。嵐のフィレーナの狙いは、鯱のフィレーナを破って、南部海岸地方最大の反乱組織になることだ。だが、その前に、奇襲して手に入れたい勢力があるんだ。その勢力を加えれば、鯱のフィレーナといい勝負になる」

フィレーナはバンニルのいいたいことがわかった。

「他のフィレーナの勢力争いに巻き込まれるのは御免だな」

「御免といっても、問答無用だ。すでに嵐のフィレーナは、おまえさんのところに向けて出発した。有無をいわせず奇襲して、相手の指導者の首を狙うのが嵐のフィレーナの得意手だ。そうすれば、最小の犠牲で勝利を握れる」

「問答無用かあ……。でも、これで奇襲ではなくなったね……。あなたが、知らせてくれたもの」

「奇襲ではなくなったが、結果は同じになる」

「最小の犠牲で勝利するのが、嵐のフィレーナの得意手なんでしょう？」

「それは、おれの作戦だった」

バンニルが、ぼそりと答えた。

「え？」

「最小の犠牲……。嵐のフィレーナは奇襲で、灼熱のフィレーナの首を取った。そこまでは、わずかな犠牲だった。そこまでの犠牲で灼熱のフィレーナを併合できるはずだったんだ。しかし、嵐のフィレーナは、それで満足しなかった。抵抗の危険ありとみなして、灼熱のフィレー

ナの戦闘員を皆殺しにした。戦闘員とはいえ、指導者を失い戦う意志をなくした男たちをな……。八千人近くが、無残に殺された。おれの作戦は、途中から、殺戮に変えられた。おれは、嵐のフィレーナと別れることにした。で……、先刻のやつらが追ってきた」

「なるほどね」

フィレーナは、野営地に向かって歩きだした。

そして、ふり返って聞いた。

「だけど、どうしてここへ逃げてきたの。嵐のフィレーナの次の狙いが、僕たちだったら、数の差で僕らに勝ち目はないよ。ここより、鯱のフィレーナとかに行ったほうが正解だと思うけれどもね」

「逃げる前に調べた。南部海岸地方だけでなく、帝国全土の反乱組織をな……。戦闘の規模に比例した犠牲者の率が一番少ないのがおまえさんのところだ。会ってみて、やはり正解だった。狼のフィレーナはおれ好みの反乱組織だ。少なくとも、その指導者はな。それに、おれの作戦があれば、嵐のフィレーナは恐くない」

「自信あるんですね。自分の作戦に……」

「それで、食ってきた。いろいろな組織を渡り歩いてな……」

「ふ〜ん」

フィレーナはまた歩き始めた。

「みんなに紹介します」

「甘いな」

バンニルがいった。

「え？」

「そんなに簡単におれを信じていいのかな」

「危険ですね。でも、危険な人は、敵にいても味方にいても危険です。同じ危険なら味方にいたほうがいい。危険なときにすぐ、手が届きますから……」

フィレーナは、ふり返りもせずにいった。

「ほう」

バンニルは、肩をすくめた。

危険といったわりには、バンニルに見せるフィレーナの背中は隙だらけだった。

……こいつ、思っていた以上に大物か……、それとも馬鹿か……。ま、どっちにしろ、つき合うしかなさそうだ……。

バンニルは、苦笑して、フィレーナの後をついていった。

＊

しかし、その夜は、バンニルを紹介しようもなかった。

みんな、どんちゃん騒ぎに疲れ果て、とても話のできる状態ではなかった。

野営地の野外に酔い潰れ、抱き合って眠っている男女の群れを見て、バンニルは顔色ひとつ変えずにいった。

「指導者はどうであれ、反乱の集団が酔ったときは、皆、同じですな……」
寝床を探してやろうとするフィレーナに、バンニルは断わった。
「早く、寝なさい。狼のフィレーナの指導者は、明日からが忙しくなる……」
バンニルは、野営地の木の下にうずくまって寝た。
フィレーナの天幕の前に横たわったギャッピーだけが、バンニルをしばらく窺っていた。
しかし、バンニルの敵意のない寝息を耳にすると、ゆっくりと目を閉じた。
危険なものの気配を感じる……。
その本能は、フィレーナよりギャッピーが数段優れていた。
ギャッピーの反応を見れば、少なくとも、今現在、相手に敵意があるかどうかはわかった。
フィレーナは、その夜、ぐっすりと眠れた。

＊

「はぐれ蜘蛛のバンニル！」
寝呆け眼のスパタの顔が、一瞬のうちに真顔になった。
翌朝、フィレーナは、狼のフィレーナの幹部級を集会用の天幕に呼んで、バンニルを紹介したのだ。
「知っているの？」
フィレーナは、スパタに聞いた。
「悪名だけはね……。こいつのような革命ゴロのいうことを聞いちゃあいけない」

「革命ゴロか……。諸君のやっているのは、革命と呼べるのかね？」
バンニルは顔色ひとつ変えずに答えた。
「なに！　もう一度いってみろ」
スパタは、バンニルに感じる敵意を隠そうともせず食ってかかった。
バンニルは、それには答えずつぶやいただけだった。
「ま、反乱戦争ゴロといわれないだけましかな……」
スパタは、バンニルを指差してフィレーナにいった。
「こいつは、危険だ。何を考えているかわからん」
「それは、僕も思うけれど、スパタはどうして危険だと思うんだい？」
「帝国に反乱暴動が起こるたびに、各地を回って戦闘に加わり金をもらう、ゴロツキの兵士たちがいるのは、あんたも知っているだろう。戦闘が終われば、次の戦いを求めて別の反乱軍に加わる流闘士……、流れ者の闘士のことをな！」
「そう、金になれば、どこの反乱軍でもかまわない、いわば戦闘専門の助っ人業だね」
バンニルがスパタの言葉を受けて註釈を加えた。
「だが、それと、私に、何の関係があるのかね？」
「おまえも、同類だ。いや、やつらより、まだ性質が悪い。やつらは、少なくとも命を賭けて戦うが、おまえたちは、何もせず、戦いの後ろで見つめるだけだ。流策士ってやつはな」
「木々の入り混じった森の中では、森の全体は見渡せないのでね……。策士は、所属する集団

の戦いを見すえ勝利に導くのが仕事だ」

個人対個人の戦いでなく、集団対集団の大きな戦いになると、作戦が必要になる。

その作戦を作るのが策士だ。

今まで、全国各地で生き残っている反乱集団には、大なり小なり優秀な策士がいたといっていい。

狼のフィレーナでは、もちろん、指導者のフィレーナが、それを兼ねていた。

だが、今までの小規模な戦いはなんとかこなしてきたが、狭い競技場の中で殺し合いを見せる闘技士(バトラー)として育てられたフィレーナには、一万人単位の戦争となると、まったく未知の戦いだった。

戦い馴(な)れたフィレーナですらそうである。

まして、寄せ集めといっていい他の反乱集団の中には、戦いの方法を知らないものすらあった。

そこで、帝国各地を渡り歩き、帝国軍と戦いが起こりそうな反乱集団を見つけては、作戦を売り込む流れ者の策士が現れだした。

やがて、そんな策士たちを人は流策士と呼んだ。

パンニルは続けた。

「だが、戦いに命を賭けるのは同じだ。作戦に失敗したような流策士を味方は許しはすまいし、敵も、自分の軍に負けるような作戦を作る策士じゃ、知恵袋として必要とはしないだろう。結

局、作戦の失敗は、そのまま、流策士の死を意味する。けっこう厳しいもんだよ。流策士商売も……」
「黙れ！　おまえらは、金になりさえすればどの反乱軍にも紛れ込む、寄生虫のような輩だ。革命を商売にする、人間として奴隷以下のやつだ！」
　バンニルは、平然として答えた。
「奴隷以下か……。だが、一つだけ、確かなことがある」
「なにぃ？」
　スパタは食いつくような表情で喚いた。
「おれの商売はな、帝国に抵抗するための策士だ。敵は帝国だ。どんな反乱集団に紛れこもうとそれだけは変わらない。わたしの作戦は、帝国をやっつけるためのものだ。今、この混乱した反乱の状況のなかで、帝国軍を倒す。必要なのは、剣と、兵隊の数と、その数の損害をでき得る限り少なくして勝つための作戦だ」
　バンニルは、スパタの顔も見ずに、しかし、はっきりといった。
「あんたのような、お喋り好きはどこの反乱集団にもいるものだが、その舌先だけで、帝国人を一人でも倒すことができたかな？」
「黙れ！　侮辱は許さん！」
　スパタは、腰の剣に手をかけた。
「ほらな……。いざとなれば、そうやって剣が必要だ」

バンニルは淡々とした口調で、いった。

「言葉の戦いで勝っても、それは一時の戯れにすぎない。言葉など剣の一ふりで、消されてしまう。違うかね？」

バンニルは、スパタを、まったく無視してフィレーナにいった。

フィレーナも、スパタの剣を抜きそうなそぶりを気にしていなかった。

仮に、スパタが、バンニルを斬ろうとしても、実力差がありすぎる。

バンニルは、軽々と避けてみせるだろう。

そして、バンニルも、こうして狼のフィレーナの面々に囲まれていては、スパタがいくら突っかかってきても、……仕方ない……、といって斬り捨てるようなむちゃはしないだろう。

事実、スパタは歯ぎしりしながらも、バンニルの隙のなさに、剣を抜くきっかけがつかめないでいる。

「さっき、損害をできるだけ少なくといったね？……」

フィレーナはバンニルに聞いた。

「そう、おれの作戦の売り物は、最小の犠牲で最大の成果だ……。味方はもちろん敵の戦闘員の数を減らした勝ちも、勝利とは呼べん。敵の戦闘員を生かし味方の戦闘員に引き入れることができれば、次の戦いのための勢力になる。敵をむやみやたらと殺す戦いは、後を考えれば、単なる疲弊にすぎぬ結果になるかもしれん」

「犠牲者を出す戦いは、消耗にすぎないってことですね」

フィレーナは聞き返した。
「少なくとも帝国への反乱という大きな目的からみればそうなる」
「最小の犠牲で、最大の成果か……。あなたは、その作戦作りに実績があるんですね。スパタの耳に届くぐらいだもの。かなり、知れ渡っているんですね。あなたの名前は……」
「ま、いままで生きてきている流策士だ。悪名だけは知れていても仕方がないかもな」
バンニルは、苦い微笑を洩らした。
フィレーナにも、溜め息に近い笑いが浮かんだ。
スパタは、焦っていた。
……フィレーナは、バンニルに興味を持っている……。フィレーナが、たとえ敵であれ殺すのを嫌がっているのを、スパタはよく知っている。
フィレーナに、最小の犠牲という言葉が、どんなに魅力的に聞こえるか、およその見当はつく。
「騙されるな！　フィレーナ！」
スパタは叫んだ。
「その男の名前が知られているのは、作戦の巧さだけじゃない。この男の立てた作戦で、たしかに、帝国に負けた反乱集団はない。だが、この男がその集団を去った後、必ずといっていいほど、その集団は潰れている」
「潰れた？……どういうこと？」

フィレーナは聞き返した。

「わけは知らん。ともかく、こいつの通り過ぎた後の反乱軍は、必ず滅びている。はぐれ蜘蛛の蜘蛛は、遠くから見れば魅力的だが、手を触れれば動けなくなり殺されてしまう蜘蛛の巣のように危険で不吉なやつという意味だ。こいつの名前は、策士としてではなく不吉な疫病神として知れ渡っているんだ」

「はあ？……疫病神ねえ……」

いつも、小難しい理屈をまくしたてるスパタが、いきなり、神だの不吉だの、迷信じみた言葉を喋るのがなんとなくおかしくて、フィレーナは、苦笑しながらバンニルに直接聞いた。

「あなたは、疫病神なわけ？……」

「そう思うやつらにとっては、そうかもしれんね……。だが、やつらが滅びたのは、やつらの勝手だ。おれという策士を使いこなせなかっただけだ。切れる硝子剣も使うやつしだいだ。馬鹿が握ると眩しすぎて目が眩み、怪我をする」

「今まで、あなたは、馬鹿とばかりつき合ってきたんですね」

少しだけ、皮肉を込めてフィレーナがいった。

「馬鹿を見分ける修行が足らんもんでね……。ところで教えてほしいね。そういうあんたは馬鹿か？」

「自分の硝子剣で怪我したことはないよ……」

「馬鹿ではないらしいな」

バンニルは微笑した。

スパタはますます慌てていた。

……何なんだ。この二人のやりとりは……。まるで慣れ合いではないか……。

慣れ合う気はなかったが、フィレーナにとって、小難しい理屈をこねくりまわし饒舌にまくしたてるスパタより、昨日会ったばかりとはいえ闘技に心得のあるバンニルの持つ、一種の割り切りのよさのほうが心地よいのは、確かだった。

「用心しろ。フィレーナ……、こいつとつき合った反乱軍のことごとくが潰れているのを忘れるな」

スパタの声が、耳にうるさい。

「ああ、それが本当なら、たしかに用心しなければならないだろうね。バンニルさんはそれについていいたいことはないの？」

「別にないが、何かいわんとそこの人間拡声器の音量が、さらに上がりそうだな……。騒音防止のためにいわせてもらえれば……」

バンニルは、フィレーナを見つめた。

「滅びた反乱集団の指導者が、その器でなかった……」

「器……？」

「最初は、どこの集団の指導者も気持ちは一緒だ。敵に勝ちたい……、それだけだ。そのためにおれの作戦が必要になる。だが、ある程度、勝ちが続くと欲がでてくる。富と権力が欲しく

なる。そして、そのために、作戦を無視した無用の戦いをしたがる。力まかせに、相手に有無をいわせぬ強引な戦いになる。いつの間にか、その戦いは、帝国への反抗でなく、その名を借りただけの略奪、暴行がまかりとおり、自分の勢力拡大に夢中になる。勢力拡大は確かに必要だ。だが、器のできていないやつは、力のごり押しでそれをしようとする。そして、いつでも勢力の頂点に立っていたがる。そんなとき、おれは、その集団を見限って立ち去る」

「立ち去っただけでは、その集団は滅びまい。だが、おまえが消えた後の集団は必ず倒れる。おまえが、何かを仕掛けたとしか考えられん」

スパタが、吐き捨てるようにいった。

バンニルは軽く肩をすくめた。

「仕掛けて何の得があるというのかね？　おれは、今まで三十六の集団を渡り歩いてきた。確かに三十五の集団は、おれが去ってから数か月も経たずに消えてしまった」

それまで黙っていたスパタ以外の幹部級から、どよめきが起った。

バンニルは平然と話し続ける。

「だが、三十五回も何かを仕組んで、誰にも気づかれずに大きな集団をすべて滅ぼすことができるかね？　必ず、おれに復讐を企てるやつが出てくる。だが、おれは、いつ殺されるかなどと脅えて、睡眠不足にもなっていないし、いまだに殺されてもいない。評判も悪くはぐれ蜘蛛などと呼ばれ、忌み嫌われているが、おれを使いたいと思う連中は減らん。なぜかな？」

「答えは知っているんでしょう？　なら、もったいぶらずに話したらどうです」

フィレーナが先を急がせた。
「失礼した。どうも、そこのお喋りさんの調子が移ったようだ」
「なにっ！」
いきり立つスパタを手で制したフィレーナは、静かな口調で入った。
「今はバンニルさんの話を聞く時間だ」
静かだが、スパタに有無をいわさぬ無言の力があった。
バンニルは、微笑んで続けた。
「三十五の集団は自滅したのさ。なまじ勝つ味を知りその指導者になっているやつは、自分の地位を保ちたい。仲間を押さえつけておきたい。そのためには、帝国との戦いに勝ち続けたい、結果、むちゃな反抗をして返り打ちに合うのがひとつの類型だ。そうでない類型は、周りの誰もが自分の地位を狙っていると思いこむやつだ。仲間の誰かが、目立った行動を取ると警戒をする。そして、目に余ると消そうとする。消されちゃたまらんと、そいつも、指導者を狙いだす。で、結局、どちらかが消され、そのくり返しで集団の力は消耗し、他のどこかの集団に吸収され消えてしまう」
「でも、僕が、集団のその指導者だったら、自分の地位を狙うやつとして、一番先に危険に感じるのは、策士のあなただと思うけどなあ」
フィレーナは、バンニルに、いたずらっぽく微笑みながらいった。
「だから、その前に逃げだすのさ。それが三十五回も続くと、おれが、何も指導者の地位が欲

しいから、策士をやっているんじゃないということに気づく、少し頭のいいやつならな。おれを使いたがるやつらは、少なくとも、おれが、自分たちの指導者という地位をおびやかす者ではないと安心している」
「じゃあ、バンニルさんは、何のために、策士をやっているんです？」
フィレーナの問いに、バンニルはぼそりと答えた。
「面白いからさ。帝国に反抗する作戦を作るのがな……。そして、それを実践できる指導者を見つけたい。それだけのことだ。おれの趣味だといっていい」
「あまり、楽しそうな趣味じゃないなあ」
「趣味は好き好きだ……。帝国には迷惑だろうが、反乱軍の指導者には、いつも喜ばれている。少なくとも最初のうちはな……」
「でも、嵐のフィレーナは、あなたを殺そうとしましたよね」
「あいつは、おれの作戦に泥を塗った。人を殺しすぎた。おれは、出ていくといった。やつは、おれが他の反乱集団に行くぐらいなら、殺したほうがましだと考えた。だが、おれとつき合って三十六番目に消えるのは、やつの集団だ。嵐のフィレーナは、おそらく、狼のフィレーナとの戦いに破れて、消えてなくなるだろう」
幹部たちは、狐につままれたような顔でバンニルを見た。
スパタが、せせら笑った。
「ふん、相手は数万の大群だぞ。戦えば、万が一にもこちらに勝ち目はない」

「おれがいれば、その万が一が、起きるかもしれない……。それとも、戦わずして助かる方法があるとでもいうのか？」

「交渉しだいによってはな……。フィレーナ、私が話し合いに行けばなんとかなるかもしれない。私は、命を賭けてこの交渉を成功させてみせる」

スパタは胸を張った。

「おまえさんがね……」

バンニルは、憐れむようにスパタを見た。

「何人のいけにえを用意するつもりかね」

「いけにえ？」

フィレーナは聞き返した。

「数倍の相手と平和に交渉するときには、貢ぎ物が必要だ。狼のフィレーナ、あんたは用意できるかね。自分の首を……」

「僕が死ぬことが条件になるわけ……」

フィレーナは、他人事のようにいった。

正直、それですむのならそれでもいいかな……、とも思っていた。

もう、人を殺すのに、そして人が死ぬ姿を見るのに、うんざりしていた。

そのくせ、自分が死ぬことに対しては、妙にあっさりした気分だった。

地方都市ドラの新米闘技士として、闘技場に出場してからというもの、絶えず自分の死と直

面してそのたびに切り抜けてきたフィレーナは、他人の死には胸を痛めつけられていたが、自分の死には麻痺しているのかもしれなかった。
生きたいと思う気持ちが、胸の中で痛切に湧いてこないのだ。
……別に死にたいとも思わないから死なないだけの話でね……。
帝国を倒してやる！……三年前、首都ボーの神殿をたった一人で破壊したときの胸の震え、高鳴りも、今の血まみれの日常の中では、傷口の瘡蓋のように、ぽろぽろと剝げ落ちてしまった感じすらしていた。
「あんただけでは、すまんよ」
バンニルは、あっさりといった。
「嵐のフィレーナは、危険の種は根こそぎ刈り取るやつだ。そして、自分の力を、みんなに見せつけたい目立ちたがりやでもある。おそらく、ここにいる諸君の首……、それをずらりと皿の上に並べなければ、ご馳走さまとはいわんだろう」
フィレーナは、くすくすと笑った。
「ここにいるみんなの首？　そりゃあむちゃくちゃくちゃだなあ」
「ああ、むちゃくちゃだ」
バンニルも、微笑んだ。
だが、笑みを洩らしたのは、二人だけだった。
みんな、青ざめていた。

「私が、外交手腕でなんとかして見せる。な、私に任せてくれ」

スパタが、幹部たちの顔色を窺っていった。

「外交手腕？……ずいぶん古風な言葉を使うもんだな」

バンニルは、ひやりと笑った。

「今、帝国以外の国のないこの世界に、外交などという言葉が存在するのかね？　それをいうなら、駆け引きといってくれ。若い者を難解な言葉で煙に巻くのは感心せんなあ……」

「どう呼ぼうと、私の勝手だ」

「あんたの勝手にされても困るんじゃないかな……。死ぬのは、ここにいるみんなだ。その数にしても、やつが要求するにしては、少なすぎるいけにえといっていい……。なにしろ嵐のフィレーナは、この前の戦いで、抵抗するのをあきらめた灼熱のフィレーナの戦闘要員全部の首を斬った。容赦なく、ばっさりとな……。交渉の通じるような相手じゃない……。それとも、あんた」

バンニルは、スパタを初めてきつい目で見すえた。

「な、なんだ……」

スパタは、後ずさった。

「戦いを放棄する代償に、自分の命だけでも助かる交渉でもするのかな」

スパタの額に青筋が立った。

「侮辱は許さん！」

スパタは剣を抜いた。
だが、動じる様子もなく、バンニルはふっと笑った。
「確かに、言葉が過ぎた。許してほしい」
バンニルはスパタに頭を下げた。
拍子抜けしたスパタは、剣のやり場に困った。
頭を下げて謝っている男を、幹部の前で斬るわけにはいかなかった。
狼のフィレーナの副指導者として、その人格を疑われかねない。
まして、無抵抗な者を殺すことに、嫌悪感を隠さないフィレーナがいる。
スパタは、怒りに震える手を押さえながら、剣を鞘に戻した。
「ありがとう。我慢してくれて……」
フィレーナは、正直な気持ちでそういった。
スパタは、煮えくりかえる気持ちをかろうじてなだめてうなずいた。
だが、フィレーナが感謝したのは、スパタよりむしろバンニルに対してだった。
……剣を先に抜いた以上、バンニルに殺されても文句のいえないスパタが、これで死なずにすんだ……。
バンニルは、そんなフィレーナの気持ちを知ってか知らずか、何ごともなかったように、話し始めた。
「で、どうするつもりかね。戦うか、死ぬか、それとも逃げるか……」

「戦うか死ぬかでしょう？　戦闘員だけなら逃げられるが、女や子供たち、戦いのやり方を知らない者……、これだけの大所帯、逃げきれるはずがない」
フィレーナはそういってから、ぽつんと溜め息をついた。
そのときだった。
「お話し中、申しわけありませんが、見張りの者たちが、こいつらを摑まえまして……」
天幕が開いた。
警備の戦闘要員に剣をつきつけられ、三人の男が入ってきた。
「助けてくだせえ」
「おれたちは行くとこがねえ」
「このまま、帰っても殺されるだけだ」
「ここに置いてください」
幹部たちにすがりつくようにして叫んだ。
三人は、昨夜、バンニルを襲った嵐のフィレーナの追っ手たちだった。
「おれの首を持って帰らなければ、命令に反したってことでこいつらが殺されてしまう……」
バンニルが、溜め息まじりでつぶやいた。
「こいつらも、おれに殺されるか、嵐のフィレーナに殺されるか、ふたつにひとつだったわけだ」
三人は嗚咽を洩らし、人目も憚らず泣きだしていた。

ガサッ！
いきなり、天幕の入口が開かれた。
見張りの一人が、飛び込んできた。
息も絶えだえに、ふらつく足をこらえながら、うめくように報告した。
「そいつらの話は本当です。東の谷の向こうに、武装した大群が集まってきています。それも、ここから、一日とかからないところ……」
そこまでいって見張りは倒れた。
背中に、硝子矢(グラスアロー)が突きささっていた。
幹部たちは、呆然(ぼうぜん)と立ちすくむだけだった。
フィレーナは見張りに駆け寄ると、抱き上げてすばやく硝子矢を抜いた。
だが、見張りは、もう息をしてはいなかった。
フィレーナは、肩を落とし見張りを抱きしめたまま、ほんのしばらくだけ俯(うつむ)いていた。
そして、スパタを見上げていった。
「これでも、嵐のフィレーナとの交渉をうまくやれますか？」
スパタは、何も答えられなかった。
「……ですよね」
フィレーナは、見張りの身体をそっと地面に横たえると、立ち上がってバンニルに向き直った。

「勝てる作戦があるっていいましたね」
「最小の犠牲でな……」
フィレーナはうなずいた。
そして、幹部たちにいった。
「ようするに戦うか……、死ぬかのようです。で……、バンニルさんは、スパタさんも知っているほど、有名な策士だそうですが……。僕たちにとって、大切な人材に思えませんか？」
誰も、答えなかった。
「黙っていられる時間はそうはないんだけどなあ」
誰も、答えられなかった。
フィレーナは肩をすくめた。
「じゃあ、僕がいちおう指導者ですから……。いいですね……、バンニルさんとこの人たちを狼のフィレーナに入れましょう」
スパタがうめいた。
「危険だ。その男を信じるのは……」
「どっちに転んでも危険は同じですよ。死ぬか、戦うしかないんですから……。で、まともに戦ったら、数の差でこちらが死ぬのはわかりきっていますからね」
「決まったようだね」
バンニルは、こともなげにいった。

「ま、今回は、たぶん、諸君が死ぬことはないさ」
「え？」
ほとんど、死ぬ覚悟をしていたフィレーナは、バンニルを見つめた。
「諸君は、見ているだけでいい。おれと、どうせ殺される予定だったこの三人で、嵐のフィレーナの始末をつけてやる」
「たった四人で……」
フィレーナは信じられなかった。
「もちろん手伝ってはもらうがね。だが、今回、嵐のフィレーナはおれがやる。どうやら嵐のフィレーナはおれを怒らせた。やつは、おれを殺す気だ。だったら、おれが直接、あいつをやっつけても罰は当たらんだろう」
バンニルは、苦い笑みを浮かべた。
「さあ、時間がない。諸君、悪いが、おれのいうように動いてくれ」
そして、スパタに声をかけた。
「気持ちはわかるが、協力してほしい。それが、あんたの命も助かることに繋がるんだからな」
スパタは、唇を嚙みしめながらも、バンニルからいわれるままにするしか、ほかに仕方がなかった。
やがて、天幕の中から一人、二人と、バンニルの作戦を受けた幹部たちが、首を捻りながら、

いわれた持ち場に向けて出ていった。
それは、戦闘要員をできるだけ小人数に分け、時間が来たら丘の周りから、ばらばらに、嵐のフィレーナの大群に攻撃を掛けるというものだった。
……こんなやり方で勝てるのだろうか？……。
幹部たちがいぶかるのも無理はなかった。
しかも、この作戦には、妙なただし書きがついていた。
この攻撃は撹乱が目的だから、無理に敵を殺す必要はないというのだ。
そして、こちらに危険があれば、味方のことなど考えずに逃げて逃げて逃げまくれとさえいった。
さらに、戦闘員、一人一人が、持てるだけの食料を携帯していけという。
「そのままどこかに逃げてもかまわないし……、なんなら、こちらを裏切って、嵐のフィレーナの軍に加わってくれてもかまわない」
まるで、戦闘要員をあてにしてないような口ぶりだ。
バンニルは、幹部たちを見透かすようにつけ加えた。
「すでに、そのつもりのやつもいるだろうが、くれぐれも気をつけることだ。嵐のフィレーナは、死んだ敵はそのままでも喜ぶが、寝返った敵は、いくら忠誠を誓っても、首なしでないと歓迎してくれない」
いちおう釘は差してはいたが、明らかに、戦闘要員の何人かが脱落し、寝返るのを予想して

いるいい方だった。

「おまえは、味方の同志を信じないのか？」

スパタが不機嫌（ふきげん）きわまりない口調で吐いた。

「あんたは、自分が殺されようとするときに、このおれが、必ず助けてやるといったら、それを信じて待っていられるかね？」

バンニルにそういわれては、スパタも黙るよりなかった。

狼のフィレーナ軍といっても、しょせんは、騒乱のどさくさで逃亡した奴隷（クレチア）たちの寄せ集めにすぎない。

あてにするほうが間違っているのは、スパタが一番よく知っている。

第一、集団の規律を破って追放された者たちの裏切りを恐れて、フィレーナの知らぬ間に、処分という名の殺しを続けていたのは、ほかならぬスパタだった。

だが、敵を撹乱するだけで、勝てるとも思えない。

……せめて、作戦のおおまかな全貌（ぜんぼう）だけでも聞かせろ……。

スパタは、バンニルに食いさがったが、首を横に振るだけで、何も話そうとしない。

「もしも、あんたが敵に捕まったときのことを考えるとな……」

「私が喋るとでもいうのか？」

「あんたに、その気がなくても、自白剤を使われたらひとたまりもない」

「そんなときは、喋る前に自決してみせる」

スパタは、肩を怒りに震わせながいった。

……少なくともおれは、副指導者だ。そのおれが、作戦の概要を知らぬなど、あってたまるか……。

「そういうの、好きじゃないな。自決だなんて……」

フィレーナは、スパタを見つめた。

「無駄に死ぬことはないよ。スパタさん。もし、あなたが、作戦の内容を知っていれば、狼のフィレーナの幹部だってことが、ばれてしまう。そうなれば、ほとんど殺されるに決まっている。けれど、何も知らなければ、普通の戦闘員と間違えられて、万が一にも、命だけは助かる可能性だってあると思うよ。いや、それこそ、あなたの上手なお喋りで、相手をごまかせるかもしれない。僕は、スパタさんに死んでほしくない。できるだけ、生きてほしい。だから僕も、スパタさんは、何も知らないほうがいいと思うんだ」

それは、フィレーナが本心からいった言葉だったが、スパタにとっては、副指導者としての自分の立場に、泥を塗る台詞だとしか思えなかった。

「勝手にするさ！　おれは、狼のフィレーナの副将らしく戦うだけだ！」

スパタは、憤然と席を立って出ていった。

夕暮れがやってきた。

天幕の中に、最後に残ったのは、パンニルとフィレーナだけになっていた。

「あんたにやってもらいたいことはだ……」

バンニルがいった。
「時間が来たら、谷を見下ろす丘の上に狼犬と一緒に立ってくれ」
「それまでの間は、どうしていればいいんだい？」
「そうだな……、幹部連中の中から嵐のフィレーナに寝返りを打つやつがいないかどうか、見張りでもしていてくれ」
「それだけなの？」
「一番、大切なのは、出番が来るまで怪我をしないことだ」
「僕にも、作戦の内容を知らせないつもりかい？」
「ああ……、そのつもりだ」
バンニルは、まるで兄弟を見るような不思議にやさしい眼差しで、フィレーナを見つめた。
「その理由は、先刻おまえさんが、あのお喋りな副指導者さんにいったのと同じだ。こういっちゃ悪いが、おまえさんのきゃしゃな体格じゃ、誰も狼のフィレーナその人だとは思わないだろう。だが、おまえさんは、狼のフィレーナの指導者でもある。どうしても、作戦を聞きたいといえば、おれも、話さないわけにはいくまい」
フィレーナは、ふっと笑ってうなずいた。
「わかった。僕は何も聞かない。あなたの好きなようにやってください」
バンニルは、一瞬、虚を突かれたように、ぽかんと口を開けた。
「何も聞かない？　どうしてだ？　おまえさんは指導者なんだぞ」

「どうしてです？　あなたにまかせた以上、あなたが聞かないほうがいいということは聞きません。そのほうが、あなたにとって、やりやすいんでしょう？」
「え？　そりゃあ……、まあ……」
「僕らを勝たしてくれるんでしょう？」
「まあな……」
「よろしくお願いします」
パンニルは、呆れかえった様子で首を振った。
「そこまでおれを信じていいのか？　たった一日会っただけのおれを……」
フィレーナは、天幕の外の夕日を見つめながらいった。
「人を信じるって、時間じゃないでしょう？　それが、ほんのつかの間でも、十年会い続けていても、信じられない人は信用できないだろうし……、それに、僕のような明日どうなるかわからない暮らしをしていると、相手を信じられるまでの時間を、待っている暇もないでしょう？　だから、相手が、少しでも信じられる感じがしたら、できるだけ信じることにしてます」
「甘いな」
「ええ」
フィレーナはあっさり認めた。
「それに、今は、あなたを信じるしかない状態でしょう？　だったら、疑う気持ちなんて最初

から持たないほうが楽です」
「おれのことを嵐のフィレーナが仕組んだ罠だと思ったことはないのか？」
「だったら狼のフィレーナは、みごとに引っかかったことになりますね」
「おれが声を掛ければ、先刻の三人が剣を抜いて踏み込んでくるかもしれん。おれをふくめて、四対一……、どうする？」
「あなたが、本気で僕を殺そうとしたら、勝つのは僕です。あとの三人は相手にならない」
フィレーナは、夕日から目を離そうともしないで、さりげなくいった。
「ほう、たいした自信だね」
「自信じゃなくて事実です。バンニルさん。あなたの闘技能力はたいしたものです。でも、動きがもう若くない。技だけじゃ僕の早さについてこれない。それ、あなただって、とっくに気がついているのでしょう？」
バンニルの溜め息が、フィレーナの後で聞こえた。
「僕は、ほかのことはまるでなんにも知らない若僧ですけど、闘技っていうのは、同じ闘技能力のとき、若さが勝ちます」
バンニルは、ふっと笑った。
「たしかに、闘技は残酷なほど、若さがものをいう……。だが、どうやら、おまえさんは、闘技だけの人間でもなさそうだな」
「そうですか？……僕なんてそれだけですよ」

フィレーナはパンニルをふり返って、照れたような子供っぽい笑顔を見せた。

夕日を浴びたフィレーナの髪が、輝いていた。

「フィレーナ」

パンニルはいった。

「おれを信じていいよ」

「ええ……、でも、明日は雨になりそうですね」

フィレーナは、夕日に向き直り、ぽつりとそういった。

「夕日に笠がかかっていますから……」

たしかに、霞(かすみ)のような雲が、赤い陽の光を、かすかにぼやかしていた。

第5章

嵐への咆哮

その夜……。

「嵐のフィレーナ」の大群は、谷間の道をゆっくりと進んでいた。

硝子細工をほどこした天蓋車に乗って、嵐のフィレーナは得意満面だった。

灼熱のフィレーナを倒した今、この南部海岸地方で倒すべき相手は鯱のフィレーナだけだった。

嵐のフィレーナは、胸の中に湧き上がる野望に酔っていた。

鯱のフィレーナとの戦いさえ、巧く勝ちを収めれば、嵐のフィレーナは、名実ともに、南部海岸地方最大の反乱勢力になる。

そうなれば、南部海岸地方の地方庁所在地デビを攻撃するもよし……。いやいや、まだまだ、帝国に面と向かって歯向かうには力が足りない……。帝国全体から見れば、南部海岸地方などほんの一部分にすぎないのだ。

帝国の他の各地方には、嵐のフィレーナ級の反乱軍がいくつもある。

とりあえずそいつらを合併吸収してから、いよいよ帝国打倒に立ち上がる算段だった。

……おれは、帝国全土の反乱集団の覇権を握り、最後に帝国を倒し、この世界に「嵐の王国」を打ち建てる……。

彼の征服欲は際限なく膨らみ、嵐のフィレーナは、帝国への反乱より、むしろ、新しい自分の帝国を作る野望に取り憑かれていた。

それは、嵐のフィレーナに限らず、どこの反乱集団の指導者でも一度は頭の中に描く、設計図だったかもしれない。

だが、帝国への反乱に勝てば勝つほど、解放された奴隷たちの数は増え続ける。

その集団を食べさせるため振り回され、その戦いは、帝国への反乱と呼ぶより食料確保のための略奪と変わらず、いつ果てるとも知れぬ戦いに疲れ、勢力の増大や、反乱軍の統一などをまともに考える余裕がないのが現状だった。

しかし、日常の流血に麻痺したのか、失われる犠牲も考えず野望の達成に邁進する指導者もいた。

まさに嵐のフィレーナはそんな男の典型だといえた。

彼の集団の通り過ぎた後は、嵐の名のとおり、なにもかも根こそぎ破壊されていた。

怪我人は、足手まといになるというだけで、敵も味方もなく殺された。

その蛮行は、食料確保のための略奪を通り越して、殺戮を楽しんでいるとしか思えなかった。

その行状に、不満をいう者がいれば、家族であろうと容赦なく処刑した。

もっとも、戦いに勝つたびに、その土地の女性の中から、解放の名目で無理やり増やしてい

く妻という呼び名の享楽用女性は、常時三百人を下らず、その家族といえば千人を越えていた。
嵐のフィレーナの周りには、いつも若い女や美少年がいて、飽きてしまった享楽用女性を整理するたびに、家族も消していたから、殺した家族の数は、時に、戦いで倒した帝国人の死体よりも多い日もあった。
奴隷（クレチア）たちの中には自由になる気もなく、仕えていた帝国人民の領地を攻撃され無理やり、解放された形になった者も少なくなかった。
彼らは、帝国側に戻っても、脱走奴隷（クレチア）として処分されてしまう。
一度、解放されたら、あと戻りはできない。
行き場のない奴隷（クレチア）たちは、嵐のフィレーナの集団に加わって生きるしかなかった。
結局、自由になったというのは名目だけで、実体は、残虐（ざんぎゃく）な指導者に脅（おび）え、がむしゃらに戦うしかない、もしかしたら、奴隷（クレチア）以下の存在だった。
しかし、傲慢（ごうまん）な指導者に、そんな部下たちの姿は目に入らない。
戦うたびに増えていく財産や女に夢中だ。
やがて、歯止めを失った欲望は暴走を始める。
富と権力への妄想（もうそう）はきりがない。
反乱だの解放だの改革だの、言葉は野望の飾り文字でしかなくなる。
嵐のフィレーナもそんな支配者の決まりきった軌跡（パターン）を辿（たど）り始めた。
嵐のフィレーナは、思った。

……武装し訓練された帝国軍と戦うより、有象無象の集まった反乱集団を吸収し勢力を伸ばしたほうが、楽で、手っ取り早い……。
……そして、南部海岸地方の、一介の反乱集団から、世界中の反乱集団の頂点に立つ……。
……帝国を攻撃するのはそれからでも遅くはあるまい……。
……とりあえずは、南部海岸地方の反乱軍をおれの剣で統一してやる……。
支配者指向の人間は、酔った寝言ですませれば可愛気のある言葉を、現実に実践したがるものだ。
嵐のフィレーナは、周囲の反乱集団を襲い始めた。
灼熱のフィレーナが手強いと見ると、東部地方で、流策士として名高いはぐれ蜘蛛バンニルを雇い、勝利を得た。
次は、いよいよ、南部海岸地方最大の反乱勢力、鯱のフィレーナだ。
……これさえ破れば、南部海岸地方はおれの物になる。そして、次は、山岳地方に討ってでて……、やがては、帝国全土の反乱軍を吸収してやる……。
嵐のフィレーナの口元には野心が涎になって垂れ下がっていた。
鯱のフィレーナの手前に、狼のフィレーナという小集団があるのは知っていたが、一瞬のうちに蹴散らせるはずだと、問題にもしていなかった。
ただ、気になるのは、はぐれ蜘蛛バンニルの行方だった。
灼熱のフィレーナとの戦いで、彼の作戦を無視し敵の戦闘要員を皆殺しにした。

怒ったバンニルは嵐のフィレーナから逃走した。
……鯱のフィレーナにでも雇われたら面倒なことになる……。
ふと、よぎる不安を嵐のフィレーナは、隣にいる百九十二番目の妻を抱くことで忘れようとした。
……なに、そのうち、追手がバンニルの首を持ってくるに違いない……。
嵐のフィレーナは、バンニルの闘技能力を全く知らなかったのだ。
そして、ものの数ではないと思っている狼のフィレーナに、バンニルが加わっていることも知りはしなかった。

*

翌朝は、土砂降りだった。
嵐のフィレーナの大群は、狼のフィレーナの野営地を見下ろす丘にやってきた。
……敵の血にまみれるならともかく、雨に濡れるのはかなわんな……。
嵐のフィレーナは、いまいましそうに天蓋車の扉から空を見上げた。
泥を蹴たてて、数人の偵察隊が走ってきた。
「敵の野営地は、燃えています。戦闘要員らしい者は見あたりません」
「確かか？」
「残っているのは、女子供と怪我人だけです」
「敵は逃げたか……。だが、罠かもしれん。敵の戦闘集団を発見するまで油断はするな」

嵐のフィレーナは身を乗り出して、野営地のほうを見た。
雨に霞んで、はっきり見えない。
「硝子武器反応はどうなのだ？」
「白熱光の光量は関知されませんが、硝子反応は見うけられます」
嵐のフィレーナはうなずいた。
「光量のない硝子反応か……」
それは、武器はあっても、その武器から白熱光線を発射する準備はされていないことを示していた。
「やはり、戦闘要員は、逃げたのかもしれんな」
「しかし、硝子反応はたしかにあります」
そういいかけた偵察員は、いきなり嵐のフィレーナに蹴り倒された。
「おれの判断に文句があるのか？　いいか、少なくとも敵は数千はいる集団だ。たとえ、女子供を置いて逃げたにしろ、慌てて逃げたのなら硝子武器の忘れ物ぐらいあって当然だ。むしろ、ないほうがおかしいではないか。それよりも、敵の食料庫を探せ。それで、ある程度のことはわかる」
嵐のフィレーナは、粗暴で残忍な性格だが、身の危険に対しては慎重な男だった。
敵が逃亡した確かな証拠がないかぎり、野営地に乗り込む気持ちにはならなかった。
「雨に濡れるのは御免だ。ここでおれは待つ」

天蓋の中に頭を戻すと、百九十二番目の妻の髪を摑み引き寄せた。

「おまえには飽きた。いいか、敵の野営地には女がいる。おまえよりいい女を探して連れてこい。いいな。おまえより美しい女だ。それが見つけだせねば、おまえは、おれの命令に反したことになる。一度、おれの妻になった女が裏切ったらどうなるか、よく知っているだろう」

女は、脅えうなずくだけだ。

「さあ行け！」

天蓋車の外に、女は放り出された。

「いいか、朝飯が終わるまでに連れてこい。食後の腹ごなしに間に合うようにな」

そして、警備兵たちにいった

「二、三人、ついていってやれ。いい女を探し出す前に、この女、敵に殺されても困るからな」

その言葉を聞いて、女は切なそうな目を、嵐のフィレーナに向けた。

それから、こくりとうなずくと、女は踵を返し、警備兵に守られながら土砂降りの中を、野営地に向かって駆けていた。

「そうは見つからんだろう。あいつ以上の女は……」

嵐のフィレーナは、一人言をいって、テーブルの上の酒瓶を飲み干した。

そして、並べられた食事を鷲摑みにして食いついた。

「報告です！」

別の偵察員が、泥ぬれで走ってきた。
「わが集団の両翼で、敵の戦闘要員らしき者と遭遇した模様です」
「それで？……」
嵐のフィレーナは、肉の塊を頬ばり肉汁をしたたらしながら聞いた。
「はい、どれも少人数で、ほんのこぜりあいの後に、逃げだしたそうです」
「逃げだした？　そうか……」
嵐のフィレーナは、したり顔でうなずいた。
「で、そいつらは、身軽だったか？」
「それは、なんともいえませんが、彼らが逃げ出した現場には、食料の入った袋が、かなりの数、落とされていたそうです」
「食料を持ち出していたわけか」
嵐のフィレーナは、ふっと笑った。
「闘うに邪魔な食料をわざわざ抱えていたということは……」
……やはり、狼のフィレーナの連中は戦闘を放棄して逃げだしたのか……。
やがて、野営地を調査していた偵察員たちから、続々と報告が届いた。
食料庫を見つけたが、残っている食料はわずかで、しかも略奪にあったように荒らされていたという。
武器も野営地のいたるところに散乱して見つけられた。

慎重な嵐のフィレーナも、この報告を聞いて確信した。

……狼のフィレーナの戦闘要員たちは、先を争って食料を奪い合い、逃げるのに邪魔な武器を捨てて逃げ去った……。

嵐のフィレーナは、幹部たちを、天蓋車の前に呼びつけた。

「これより、狼のフィレーナの野営地に前進する。足手まといになる怪我人や女以外の子供はただちに殺せ。白熱光を使うにはおよばん。穴を掘らして生き埋めにしろ。抵抗する者は、斬り捨てろ。女は吟味したうえで、後ほど不用な者は処分する。それまで、女に限り、いっさい傷をつけるな」

嵐のフィレーナは、天蓋車から一歩も出ず、拡声器を使って、そう命じた。

雨に濡れるのを嫌ったこともあるが、どこから撃ってくるかわからない敵の狙撃者の存在を恐れてもいた。

そのときだった。

土砂降りの中を、駆け足で走ってくる五人の姿が見えた。

そのうちの二人は女だった。

女の一人は、両脇を男二人にかかえられ、無理やり走らされているようだった。

雨の中、よくは見えないがもう一人の女は百九十二番目の妻のようだった。

天蓋車を出ていったときにはつけていなかったスカーフを頭につけていた。

……見つけてきたか。いい女を……。

五人は、泥を跳ねながら真直ぐ天蓋車に向かってくる。
そして幹部たちの傍で止まった。
百九十二番目の女だけが、天蓋車の前に、脇目もふらずやってくる。
嵐のフィレーナは、思わず、扉から首を出し叫んだ。
「おまえはもういい。早く、あの女の顔を見せろ。う！　おまえは！」
それが、嵐のフィレーナの最後の言葉だった。
百九十二番目の女の顔を見て唖然とした瞬間、いきなり、目の前に硝子剣の刃が走った。
驚きで見開かれたままの目をつけた頭が、胴体から離れ、泥の中に落ちた。
胴体は、首から、今さっき、食べた肉と酒を血の勢いで吹きだしながら、天蓋車の中に崩れた。
土砂降りの雨の中、それは一瞬の出来事だった。
嵐のフィレーナの幹部たちは、何が起こったのか、把握できなかった。
だが、次の瞬間。
目の前に立っている三人の警備兵が、剣を抜いて突きかかってくる。
叩きつける雨は、聞こえるはずの悲鳴や怒号を消し去り、噴出したはずの血液を瞬時に洗い流していた。
幹部たちのほとんどが剣を抜けないまま、泥の中に身体を埋めていた。
かろうじて、鞘から抜けたひとふりの剣は、斬られた腕とともに、転がっていた。

三人の警備兵は、無造作に幹部たちの首筋に剣を叩きつけ止めを刺すと、顔を歪めて笑いだした。

その声もまた、雨が掻き消して聞こえなかった。

嵐のフィレーナを斬った女が、スカーフを毟り取って怒鳴った。

「早く、そいつらの首を取れ！」

それは、女装したバンニルだった。

もちろん、幹部たちを殺した警備兵は、狼のフィレーナに加わったばかりの、バンニルを追っていた三人だ。

ここまでは、雨に助けられたこともあって巧くいった。

もともと、嵐のフィレーナは、指導者への恐怖で繋ぎ止められた集団だ。

嵐のフィレーナの頭さえ取れば、動揺した集団は、自然に崩壊する。

バンニルは、狼のフィレーナの戦闘要員が逃走した状況を作りだし、取り残されたと見えた女たちの中に紛れ込んで、襲撃の機会を狙った。

できるだけ少人数で、しかも、衆人の目の前で派手に殺し、集団に衝撃を与えるのが目的だった。

集団に心理的なパニックを起こさせ、間髪を入れず、効果的に狼のフィレーナを丘の上に登場させる。

そして、バンニルは叫ぶつもりだった。

「嵐のフィレーナを倒した男があそこで諸君を見下ろしている。あれが、これから諸君の指導者になる狼のフィレーナだ。もう、君たちは逃げられぬ。狼のフィレーナは、嵐とは違う。剣を捨てる者には、寛大なる処置、自由を与える。……だが、歯向かうものの心臓には、血まみれの牙が食い込むであろう。ただちに剣を捨てろ！」

そして、嵐のフィレーナとその幹部たちの首をかかげて見せる。

狼のフィレーナの集団は、たとえ大群とはいえ、もともと烏合の衆だ。

首のない嵐のフィレーナに、義理だてする者はいまい。

バンニルは、彼らに考える余裕を与えないで、一気に武装を解除させる心づもりだった。

だが、雨も手伝ってか、嵐のフィレーナは、なかなか野営地に姿を現さない。

しかも、狼のフィレーナが、丘の上に現れる予定の時間は刻々と迫っている。

そんなとき、女を品定めに来た百九十二番目の女が、警備兵とともに現れた。

バンニルはただちに作戦を変えた。

なによりも、嵐のフィレーナを倒すのが先決だ。

バンニルは、警備兵を倒し、百九十二番の女と服を入れかえ、堂々と嵐のフィレーナの前に現れて、目的を果たした。

だが、激しい雨は、バンニルを、嵐のフィレーナに近づける手助けはしたものの、集団に、心理的なパニックをもたらす点では、まるで逆だった。

なにしろ、土砂降りは、何もかも隠してしまっていた。

天蓋車の周りで警備している嵐のフィレーナの戦闘要員たちも、まだ、異変に気づいていないようだった。

それほど、あっさりとしてあっけなく唐突な攻撃でもあった。

だが、これでは困るのだ。

指導者を失ったという衝撃が、一気に嵐のフィレーナの集団全部に広まってくれなければ効果的とはいえない。

「早く、そいつらの首を斬って持ってこい！」

バンニルは、もう一度、幹部たちを倒した三人に怒鳴った。

だが、三人は、いとも簡単に、嵐のフィレーナとその幹部たちを殺せたことに驚喜し、興奮して、雨の中で抱き合い、剣を投げ捨て抱き合い、踊っている。

バンニルの声は雨に消されて届きそうもない。

……これからが大事なのに……。

唇を噛みしめたバンニルは、嵐のフィレーナの首を摑むと、天蓋車の上に駆け上った。

そして、降りそそぐ雨に、首をかざして叫んだ。

「嵐のフィレーナは、狼のフィレーナが討ち取った！」

だが、その声も雨に消されて、誰にも聞こえなかった。

バンニルは、腕時計を見た。

フィレーナは、そろそろ狼犬と一緒に、丘の上に立っているはずだ。

……急がねばならない……。

この土砂降りの雨の中、フィレーナを長く立たせておけば、かえって演出が逆効果になりかねない。

いくら嵐のフィレーナを倒した勇者だと讃えても、濡れ鼠になったきゃしゃな男と、大きいとはいえ、せっかくの毛並みがびしょぬれでべったりと体に張りついた犬では、野良犬を連れたあわれな乞食にしか見えないだろう。

そんな男に、嵐のフィレーナを倒せるはずがない……と、その配下の集団の間にいらない疑惑を呼び、指導者を失って萎えるはずの戦闘意識が、蘇ってしまうかもしれない。

バンニルは、フィレーナのいるはずの丘を見上げた。

そして、溜め息をついた。

激しい雨で、丘そのものが見えないのだ。

狼のフィレーナの、派手な登場場面はこれではおあずけだ。

バンニルは、嵐のフィレーナの首を抱えて、いささか途方にくれた。

これでは、狼のフィレーナが殺し屋を使って、嵐のフィレーナを暗殺しただけの結果だ。

暗殺では、バンニルの考えていた目的の、十分の一も達成したことにならない。

いや、むしろ、結果は悪い方向に出るかもしれない。

まともに勝てない相手を騙し討ちで殺した卑劣な指導者として、狼のフィレーナの名が知れ渡るとしたら……、そして、その汚名が、狼のフィレーナとその集団に一生つきまとうとした

ら、これから先、誰もが、狼のフィレーナを警戒し、まして、信頼しようとは思わないだろう。
そんな男は、本当の指導者にはなりえない。
……狼のフィレーナこそ、自分の作戦を有効に生かせる指導者の器かもしれないという、バンニルが抱いた淡い期待を、バンニル自身が潰した結果に終わるかもしれないのだ。
なんとかしなければならない。
こうなれば、自分が狼のフィレーナの身代わりを演じてでも、嵐のフィレーナの首が、殺し屋を使った暗殺ではなく、狼のフィレーナ自らが命がけで勝ちとった首だということにしなければならない。
そうすれば、少なくとも狼のフィレーナの名は汚されないだろう。
バンニルは、嵐のフィレーナの首を抱いて、どっかりと天幕の上に坐った。
ここで、雨が上がるか、警備の誰かがバンニルを見つけるまで待つ気だった。
たとえ、逃げ場がなく殺されたとしても、狼のフィレーナになりきって死ぬ気だった。
初代、狼のフィレーナは死んだことになるかもしれないが、名前さえ守っておけば、あの本物の若いフィレーナは、きっと反乱軍のよき指導者として蘇ってくるだろう。
「おれもどうかしているな」
バンニルはつぶやいた。
……いつもはこんなときは、一目散に逃げる道を考えるのに、こともあろうに、ちっぽけな反乱集団の若僧の名を守るために、死のうとしているとは……。

……あの若僧のどこにそんな魅力があったのか……それともおれに焼きが回ったのか……。
バンニルは、ふっと微笑んだ。
そのときだった。
耳をつんざくような音が天蓋車の拡声器から吹き出した。
バンニルは、思わず、嵐のフィレーナの首をひっ掴んで天蓋車から飛び降りた。
拡声器の音は、谷間に響き渡った。
嵐のフィレーナの集団の誰もがその音を聞いた。

*

それは、何かの遠吠えだった。
それぞれの戦闘要員を率いて逃げまくっていた狼のフィレーナの幹部たちにもその声は充分に聞こえた。
逃げていない幹部もいた。
スパタだった。
だからといって、戦っていたわけでもなかった。
スパタは、部下を先に行かすと、たった一人で、野営地のすぐ傍の林の中に隠れた。
危険は承知だったが、このまま逃げるのは、彼の自尊心が許さなかった。
狼のフィレーナという集団を諦めてもいなかった。
バンニルが、もし狼のフィレーナを裏切るようなことがあれば、ただちに出ていってフィレ

ーナを命(いのち)賭けで助けるつもりですらいた。
突然現れたバンニルの存在が、スパタをそこまで熱くしていた。
スパタもバンニルと同じように、集団の直接の指導者や支配者になりたいとは思わない性格の人間だった。
指導者を陰で操る隠れた存在でいたかった。
彼にとって頂点にいる指導者とは、反対勢力に狙われやすく、失策があれば非難の矢面に立つ飾り物にすぎなかった。
すげかえの効く人形の陰で、実際の権力を握っている黒幕……、それが、スパタの理想とする生き方だ。
そして、若くて世間知らずに見えるフィレーナなら、自分の弁舌で煙に巻いて、意のままに牛耳れるつもりだった。
そんなフィレーナを、たった一日で傾倒させたかに見えるバンニルが、スパタは我慢ならなかった。
その気持ちは、対抗意識や、副指導者の地位を脅かされそうな警戒心というより、むしろ嫉(しっ)妬(と)に近いといえた。
仮に、バンニルが狼のフィレーナを裏切らなかったとしても、意地でも最後までバンニルの作戦を見届けてやるつもりだった。
……目を皿にしてでも、欠陥(けっかん)を暴きだしてやる……。

スパタは、時おり通り過ぎる嵐のフィレーナの戦闘員の気配に脅えながらも、茂みの中にじっとうずくまって様子を窺っていた。
いつも慎重なスパタとしては、自分でも信じられないほど、危険な行動だった。
だが、この決死の潜行も、土砂降りの雨はただあざ笑うだけだった。
水の幕は視界を遮り、スパタは、なにが起こっているかさっぱりわからぬまま、ただうずくまっているよりなかった。
聞こえるのは、耳鳴りのような雨音だけだ。
いつの間にか、焦りや苛だちも萎え、濡れた衣服と同じように惨めさだけが身体に重くのしかかっていた。
だが……。
突然、聞こえた遠吠えに、スパタは弾かれたように立ち上がった。
この声には聞き覚えがあった。
狼のフィレーナは、ひとつの戦いが終わると、その夜の祝いの騒ぎからはそっと離れ、一人で海を見つめていることが多いのを、スパタは知っていた。
そんなときには、いつも狼犬のギャッピーがかたわらにいて、時おり、フィレーナの気持ちを叫ぶように月に向かって遠吠えするのだ。
今、その咆哮が、雨に打たれている谷間の隅々に聞こえている。
スパタは、思わず遠吠えの聞こえる方向へ歩き始めていた。

＊

「どうしてここに……」

天蓋車の中を窺ったバンニルは目を疑った。

フィレーナと狼犬のギャッピーが、そこにいたのだ。

ギャッピーは、拡声器の集音機に向かって遠吠えをくり返している。

「あなたの作戦を見ていたくて……。狙いは見当ついたけれど、この雨では、丘の上からはなにも見えないし、雨に濡れてて風邪を引くのがおちだしね……」

「ここにいちゃ困る」

バンニルがつぶやいた。

「こうなったら、いなきゃ困るでしょう……」

「ん？」

フィレーナは集音機を取り上げて、喋り始めた。

「嵐のフィレーナの皆さん。聞いてください。僕は、狼のフィレーナです。あなた方が攻撃しようとしている狼のフィレーナです。しかし、嵐のフィレーナはもういません。僕が、今、討ち取りました。嵐のフィレーナは、数をあてにせず、少数の兵力しかない僕と一騎討ちで、堂々と戦ってくれました。しかし、勝負は時の運があります。戦いの運は、僕、狼のフィレーナについてくれたようです。嵐のフィレーナの皆さん、もうあなたたちの指導者はいません、だからといって、僕は、皆さんの指導者にあえてなろうとは思いません。あなたたちは自由で

す。どこに行こうと、あなたたちの勝手です」
バンニルは、呆然とフィレーナを見つめた。
……なんという度胸だ。ここは、敵陣の真ん中だ……。周りから襲われたらひとたまりもない……。それなのに、こいつは……。
フィレーナはバンニルにふり返っていった。
「バンニルさんの作戦もこういうことなんでしょ？」
「だが、おまえさんは丘の上にいるはずだった。安全な場所で姿を見せなければ意味がない」
「こんな雨が降ったらそれも意味がない。僕にとっても、バンニルさんに死んでほしくないし……。いよいよとなれば、僕の代わりに死ぬ気だったんでしょう？」
……こいつ……、そこまで読めているとは……。
バンニルは肩をすくめるしかなかった。
「だが、これで両方死ぬことになるかもしれん」
フィレーナは、ふっと笑った。
「そうなれば……」
バンニルの口癖が、フィレーナの口元から自然と出てきた。
「……そうなれば……、仕方ない……」
フィレーナは、集音機に向かって再び話し始めた。
「嵐のフィレーナの皆さん、これから、どうしようとあなたたちの自由です。でも、僕は、あ

を殺したい人は、ここに来てください。誰にも手を出させません。僕とその人の一対一で決着をつけましょう」
なたたちの指導者を殺したことも確かです。その恨みを後々まで持ち越したくありません。僕

パンニルは溜め息をついた。
「おい、おい、調子に乗りすぎだぞ。相手が、千人、いや、一万人も来たらどうする気だ」
「千人来たら千回……、一万人来たら一万回、戦うさ……。それに、僕は調子になんか乗っていない。こうなったら仕方ないでしょう？」
フィレーナの表情は真剣だった。
フィレーナは、床に転がる嵐のフィレーナの首のない死体を一瞬見て、目をそむけた。
「こうなるんだったら嵐のフィレーナと、本当に一対一で戦いたかった」
「気にいらなかったのか？　おれの作戦」
「これしかなかったのかもしれません。でも、好きなやり方じゃあない……、です」
フィレーナは、自分にいいきかせるようにうなずいた。
「そうだろうな……だが、これが最小の犠牲だ」
「わかっているつもりです」
フィレーナは肩を落として答えた。
パンニルは、手に持った嵐のフィレーナの首を見つめた。
「せめて、これ以上の犠牲を出さないように、汚い仕事はおれがやろう」

バンニルは首を持って出ていった。
嵐のフィレーナの天蓋車の後には、三百人の妻用の大型天蓋車が五台並んでいた。
突然、その先頭車の扉が開いた。
脅えすくみあがる女たちの前に、首を持ったバンニルが入ってきた。
「見るがいい。これが、おまえたちの夫だ。もう、おまえたちを、夫の名でいたぶってきた獣の身体は死んだ」
女たちの視線が、バンニルの持つ首に集中した。
すすり泣きが起こった。
それは、女たちにどんどん広がった。
悲しみの涙であるはずがなかった。
長い苦痛から、突然救われた感涙だった。
「さあ、行くがいい。おまえたちが、本当の夫と思う男の元へ……、そして、家族の元へな……」
女たちは、最初はおどおどと……、やがて、堰を切ったように天蓋車の外へ飛びだしていった。
憎々し気に、嵐のフィレーナの首に、唾を吐きかけていくものもいた。
残る四台の大型天蓋車もバンニルによって、次々に解放された。
警備要員の誰も、それを止めようとしなかった。

嵐のフィレーナの最大の趣味、享楽用の女性が解き放たれた……。それは、取りも直さず、嵐のフィレーナの死を的確に証明していた。
警備員たちは、目の前を走り去る女たちを呆然と見つめながら、ただただ考えるのは、これから先、どうしたらいいか……、それだけだった。
バンニルは、嵐のフィレーナの天蓋車の前に戻ると、相変わらずはしゃいでいる三人を叱り飛ばし、幹部の首を硝子槍に突き刺し、天蓋車の前に、並べさせた。
そして、その中央にやはり槍に刺した嵐のフィレーナの首を立てた。
と、それまで、立ちすくんでいた、百九十二番目の女が、ふらりと、泳ぐように、首の前にやってきた。
女は、不思議なものでも見るように、首を軽く捻った。
首は、雨に洗われ、もう血の一滴も出ていなかった。
それは、合成樹脂で作った人形のように、妙に青白く光って、叩きつけられる雨滴を弾いていた。
女は、ぺたんと、首の前に坐ると、それを、うつろに見上げた。
女の顔は、首よりもさらに白く美しく、土砂降りの雨に打たれながらも能面のような表情を変えなかった。
天蓋車に戻ったバンニルは、フィレーナの前に坐った。
フィレーナは、何も喋らなかった。



「今なら、雨に乗じて逃げられるかもしれない。……二人とも、死ぬことはあるまい」
バンニルがいった。
「バンニルさんが死ぬことはない」
フィレーナが、ぼそりと答えた。
バンニルは、窓の外の雨を見つめながら、フィレーナに話すでもなくつぶやいた。
「おれが嵐のフィレーナを殺した。けりは、おれがつける」
「これは、狼のフィレーナの戦いです。僕が始末をつけます」
フィレーナは、ギャッピーの頭を撫でながら、さりげなく答える。
「おたがい、何をいっても無駄だな……」
「ですね……」
バンニルは、嵐のフィレーナのベッドに横たわると、足を投げだした。
「やつらが来るまで、少し休むか……」
「どうぞ」
バンニルは、目を閉じて、瞑想を始めた。
だが、さすがに、眠ることはできなかった。
それから、二人は、しばらくの間、黙っていた。
土砂降りの雨のざわめきだけが聞こえていた。
どれくらいの時間が経ったろう。

いつの間にか、窓の外は小降りになっていた。
バンニルは、かすかな音に気づいて、目を開けた。
「ん?」
規則正しい息の音が聞こえる。
バンニルは、フィレーナのほうを見た。
フィレーナは、テーブルに肘をつけて眠っていた。
ギャッピーも床に顎をつけてうたた寝をしている。
……こいつらは……、こんなときに……。
バンニルは、狼犬と若者のなんの屈託もない寝顔を交互に見て、呆れるより、いささか、舌を巻いた。
……考えていた以上に、大物か、さもなければ、とてつもない馬鹿だ……。
そう思いながらも、バンニルは笑みを洩らしていた。
やがて、バンニルも、いつの間にか眠りに吸い込まれていた。

＊

外でざわめきが聞こえる。
……来たか……。
バンニルは、硝子剣を持って、跳ね起きた。
フィレーナは、すでに目を覚まし、窓の外を窺っている。

いつの間にか、雨は上がっていた。
そして、天蓋車の前に、鈴なりの人々が集まっていた。
「いつからだ」
パンニルは、フィレーナにささやいた、
「少し前」
「なぜ、おれを起こさなかった？」
「疲れているみたいだったから……」
……こんなときに……。
パンニルは皮肉のひとつもいいたくなった。
「なるほどね……、ありがとうよ……。人の健康を気にしてくれて……」
「いいえ」
フィレーナは、軽く、受け流した。
「しかし、まあ集まってくれたもんだなあ」
「全部、相手をすると、一年は楽にかかりそうですね」
鈴なりの人の間に歓声が上がった。
一人の女が走りでて嵐のフィレーナの首に、石を投げたのだ。
次から次に女たちが進み出て、石を投げる。
嵐のフィレーナの首が、槍から落ちた。

さらに、歓声が起こった。
そのときだった。
首に向かって、女が飛び出してきた。
そして、首を抱くとうずくまった。
まるで、首を守っているようだった。
その肩に、背に、腰に、石が降りかかった。
衣服が裂け、みるみる白い肌が血にまみれていく。
「あいつは……」
パンニルがつぶやいた。
それは、嵐のフィレーナの百九十二番目の妻だった。
……なぜだ……。なぜ、あの女は、嵐のフィレーナを……、それも首だけになった男をかばうんだ……。
だが、深く、考える余裕はなかった。
「よせ！」
そう叫んでフィレーナが、天蓋車から、飛び出していったのだ。
いきなり飛び出してきたフィレーナに、人々は、驚いて静まり返った。
フィレーナは、百九十二番目の女を抱き上げた。
「なぜ、この人に石を投げるんだ？　相手は僕のはずだろう……」

「そいつはおかしいよ。嵐のフィレーナに一番、いじめられていたのはそいつなのに……」
石を投げていた女の一人が叫んだ。
「いじめられていた？」
フィレーナは、百九十二番の女を見つめた。
女は、ぶるぶると首を振ると、嵐のフィレーナの首を抱きしめて動かない。
「名前は、何？」
女は答えない。
「そいつは、話せない」
天蓋車からバンニルが出てきた。
人々からどよめきが起こった。
小声だったが、さざ波のように「フィレーナ」という声が起こった。
……おれがフィレーナか……。
バンニルは、苦笑しながら、フィレーナの傍に来た。
「先刻、その女には会った。その女に何を聞いても無駄だ。その女は、何かの拷問でだろう。舌をもぎ取られている」
「舌を？」
「だから、なぜ、嵐のフィレーナの首をかばうのか、聞いてもわかるまい。それより、フィレーナ、今は、その女に関わりあっている場合ではあるまい」

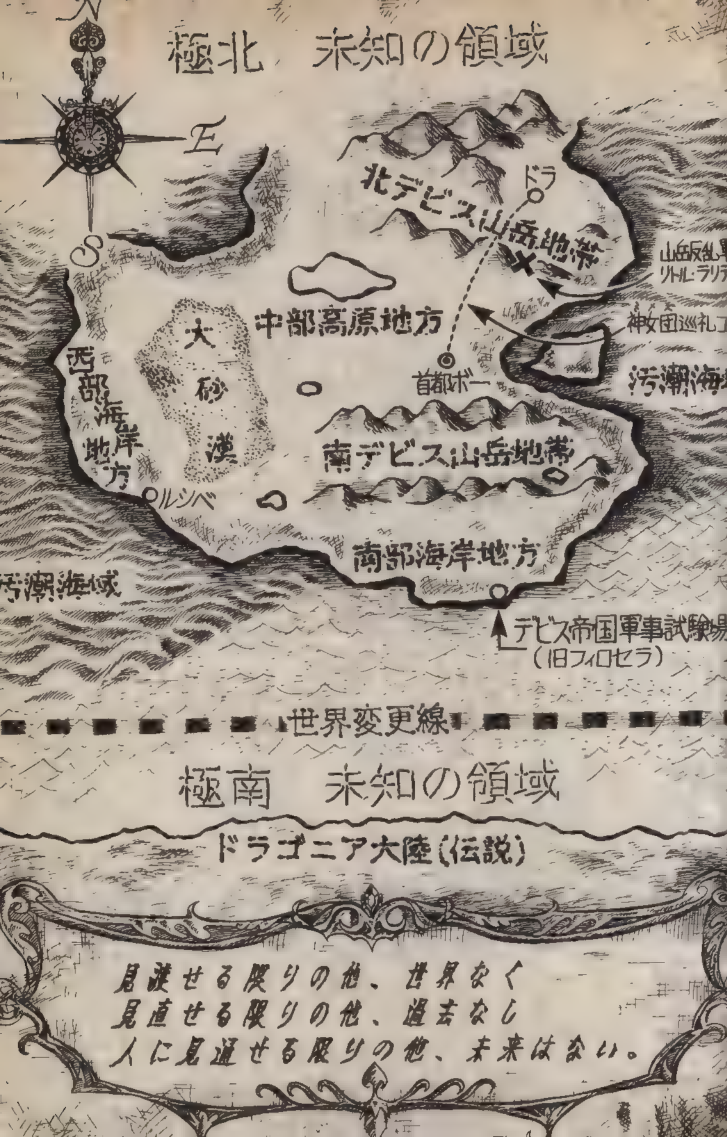
「え？」
「こいつらは、おまえさんを選んだようだ」
フィレーナは、怪訝そうに、パンニルを見た。
「敵としてでなく、皆の指導者としてのおまえさんをな」
「なんだって」
「早く名乗らんと、こいつら、おれをフィレーナと間違えてしまうぞ」
「なにが起こったんだい？」
「嵐のフィレーナがいなくなった今、こいつらは、行くあてのない集団だ。誰か指導者が必要だ。だが、嵐のフィレーナを越えるようなやつはいない。おまえを倒してまでな。こいつらは、おまえについていくしかないんだ」
「この人たち、みんな」
「ああ……」
パンニルは、人々に向かっていった。
「諸君、残念ながら、私はフィレーナではない。嵐のフィレーナを倒した狼のフィレーナは、この男だ」
パンニルは、フィレーナを示した。
フィレーナは、百九十二番目の女を抱え上げて立った。
「フィレーナ！　フィレーナ！」

たちまち、人々の声は大きく広がった。
「フィレーナ！　フィレーナ！」
人々の中には、逃げかけて戻ってきた狼のフィレーナの戦闘要員もいた。
人垣（ひとがき）を押し分けて苦々しい顔で、前に出ようともがいているのはスパタだった。
「フィレーナ！　フィレーナ！」
人々の声は雨上がりの空に響き続けた。
狼のフィレーナは、その日、四万近い大集団に膨れ上がっていた。
それは、嵐のフィレーナが攻略しようと狙っていた鯱（オルカ）のフィレーナにとっても、いや南部海岸地方の帝国軍にとっても、けっして無視できない存在だった。

＊

そして、そのころ、帝国の首都、ボーのメガデラシーナ地区では、反乱機関誌『フィエーブ』抹殺を暗にもくろむ者たちによる絨緞（じゅうたん）捜査が始まろうとしていた。
フィレーナの戦いは、フィレーナの好むと好まざるに関わらず新しい展開を迎えようとしていた。

第4部　完



極北　未知の領域
E
S
北デビス山岳地帯
ドラ
中部高原地方
大砂漠
西部海岸地方
首都ボー
南デビス山岳地帯
ルシベ
南部海岸地方
汚潮海域
デビス帝国軍事試験場
(旧フィロセラ)
世界変更線
極南　未知の領域
ドラゴニア大陸(伝説)
見渡せる限りの他、世界なく
見直せる限りの他、過去なし
人に見通せる限りの他、未来はない。

あとがき

「永遠のフィレーナ」の第4巻の登場です。
もう、弁解は申しません。
今、お手元にあるフィレーナの4巻の、実に一年間に及ぶ遅れは、想像を絶しておりまして、実際3巻が終わったときには、これから先、途方の付かないものを感じて、びびったものです。
何しろ、話が終わらないのです。
主人公がどんどん膨らんでいって、フィレーナが、十代のほんの一年間かそこらの出来事を書くのに、なんと、その3倍の時間を要してしまったわけです。
このままでは、フィレーナとリラの人生を描き切る前に、僕はあの世にいってしまいそうです。
それでは、あまりに、読者の皆さん、失礼ですから、これから、死に物狂いで、5巻、6巻、さらにと書く予定になってしまいました。
さて、今後の展開は、いよいよ、帝国への反乱軍を統合して、フィレーナの自由への戦いが

個人レベルではなく、全国規模で始まろうとします。
もちろん、帝国の成立の機密も明らかにされるでしょうし、スケールの大きな戦いが展開されるでしょう。
何しろ、広大な、帝国と、もしかしたら、それ以外の、この世界全体を作り出す何かも描かれるかも知れません。
それが、何かはこれからのお楽しみにして……。
……何は、ともあれ、この第4巻からは、フィレーナもリラもいよいよ二十代です。大人です。
今までとちがって、それなりの成長をしているはずです。
その内、大人の恋も生まれるかも知れませんね。
これじゃもう少年少女ドラマとは、言えないでしょう。(もちろん、フィレーナは少年じゃあないけれども)
もっとも、僕だって、最初から、十代のフィレーナたちで終わらすつもりはなかったけれど……この分だと超長大作……。
テレビにしたら某放送局の大河ドラマだと当初の一年の予定を突き破って、完結編は、21世紀なんて、冗談を言われてしまいそうです。
まさかね……。
でも、絵を書いてくださる高田さんや、編集のYさんが、あまりの僕の原稿の遅れに呆れて

そんな事、言われてしまっても無理ないですよね。
けれどもそんな事にはならないはずです。
主人公は、やっぱり大人といっても若い。
僕も若い気持ちのうちに、皆さんといっしょに彼女たちの人生を見守りたいと思います。
そして、今のところ、読者の皆さんの期待は、裏切らないつもりです。
フィホーパー（海の希望）という呼び名のある灯台のあるフィレーナの故郷、フィロセラの海ならぬ、なんと日本の伊豆の海を見ながら、僕は、一人、フィレーナたちの今後を考えています。
そうフィレーナの戦いは今も続いているのですから……。

首藤剛志

1990年5月のある日……。

アニメージュ文庫

永遠のフィレーナ 4

反撃への跳躍



首藤剛志

'49年8月18日、福岡生まれ。脚本家・小説家。19歳でシナリオデビュー。現在「アイドル天使　ようこそようこ」のシリーズ構成を務める。小説家としては「ゴーショーグン」と本シリーズが代表作。



高田明美

3月31日、東京生まれ。キャラデザイナー・イラストレーター。「クリィミーマミ」「うる星やつら」のキャラデザインを経て、現在「機動警察パトレイバー」(TV)のキャラデザインを務める。

1990年5月31日初刷　　N-056
Printed in Japan

著者　首藤剛志
発行者　荒井修
〒105-55 東京都港区新橋4―10―1
発行所　株式会社　徳間書店
電話　03(433)6231(大代)
振替　東京4―44392番
印刷
製本　大日本印刷株式会社

〈編集担当　吉田勝彦〉

★この本を読んでの感想を上記までおよせ下さい。また著者へのお便りもお待ちしています。

ISBN4-19-669630-9

無限に広がる首藤剛志ワールド

★痛快冒険活劇

～戦国魔神ゴーショーグン・シリーズ～

戦国魔神ゴーショーグン 絵/なにわ♡あい
その後の戦国魔神ゴーショーグン 絵/なにわ♡あい他
狂気の檻 絵/天野喜孝
覚醒する密林 絵/天野喜孝
時の異邦人 絵/天野喜孝
はるか海原の源へ 絵/天野喜孝
幕末豪将軍 絵/さかもとえみ 定価430円

★オリジナル・ヒロイック・アドベンチャー

永遠のフィレーナ 1 絵/高田明美
永遠のフィレーナ 2 光への脱出 絵/高田明美
永遠のフィレーナ 3 悪夢への挑戦 絵/高田明美 定価430円

★美少女ファンタジー

～ミンキーモモ・シリーズ～

いつかきっとピーチブック 絵/わたなべひろし他
それからのモモ 絵/わたなべひろし&けいこ
夢の中の輪舞(ロンド) 絵/わたなべひろし&けいこ

※定価は表示のあるもの以外すべて390円

首藤剛志関連作品リスト

戦国魔神ゴーショーグン
その後の戦国魔神ゴーショーグン
狂気の檻
覚醒する密林
時の異邦人
はるか海原の源へ
幕末豪将軍
永遠のフィレーナ 1 2 3
都立高校独立国 上 下
いつかきっとピーチブック(ミンキーモモ)
それからのモモ(ミンキーモモ)
夢の中の輪舞(ロンド)(ミンキーモモ)
ラインハルトとヤン(銀河英雄伝説)

カバーイラスト=高田明美
カバーデザイン=真野薫
カバー印刷=真生印刷(株)

徳間書店
アニメージュ文庫 定価390円(本体379円)
ISBN4-19-669630-9 C0174 P390E(0)

